

爆豪くんが逆行しました

ネムのろ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

爆豪勝己くんが主人公のお話し。すつたもんだがあつてプロヒーローのデクくんと
罵にかかつちやつて、デク君を救つて死んだ後に、逆行してしまつたかつちやんが主人
公。

ザツクリどうなるか言うと幼馴染を不愛想&彼らしい反応で（人生二度目なので少し
大人しめ）助けながら、じやあついでに周りのクソ共を助けるかあつてなつて、いつの
間にか皆に何故かそんなんつりないのに尊敬とか憧れられちやつてる勝己君。

デクくんとの凸凹コンビでなんだか丁度いいのに拗れちやつてすれ違つて辛い思い
もするけれど、かつちやんもデク君も諦めを知らない頑固者ですのでハッピーエンド目

指してかつちゃんは葛藤していきます！

#R——指定は一応念のためでするので期待はしないでください

#P i x i vとのマルチ投稿です

#読む前の注意点

- ・オリジナル設定が出てきます
- ・完全ノリで思い付きをそのまま書いただけです。アザマス。
- ・原作の主人公どこいった感。またはキャラ崩壊してます。
- ・原作改変が大いに進んでおります。
- ・無茶苦茶なアイデア、妄想あります。
- ・オリジナルキャラ満載です。
- ・色々ぶつ飛びすぎな事柄、設定が出てきます。
- ・完全オリジナル展開あります。
- ・ある程度の無茶ぶりな展開があります。
- ・他色々

目 次

第1話 もつともらしい死に方だったのに掌は紅葉?!	1
第2話 前世ヒーローの闘乱1	22
第3話 前世ヒーローの闘乱その2	1
43	
ある日の爆豪くん	
第4話 その瞳に映るのは	
第5話 My hero	
第6話 紋しスキル	
第7話 大怪我を阻止!	
第8話 大怪我を阻止阻止!	
第9話 月に託した願い	
203 193 170 148 123 101 75	

第10話 大切な思い出
第11話 尖水辰と不穏な動き

第1話 もつともらしい死に方だったのに掌は紅葉?!

おい：冗談じゃねえぞ…！

「この数の敵に囮まれちゃヤバい…このままじゃ…」

「黙れクソデク」

「せめてこの二人だけでも安全な場所に！」

「んなこたあ言わなくつてもわあーつてるだろうがクソナード！」

隣にいる緑色の髪の爆発頭を睨みつけながら、俺はこの状況をなんとか打破しようと頭をフルに使っていた。

こいつとは何の因果か知らぬ一が幼馴染で、前は無個性でなんの意味もなさないような守られる側の力を持たないヤツだったのが、ある日を境に個性が発覚したらしく、それをナンバーワンヒーローのオールマイトがあらかたの力の使いかたをレクチャーしたらしい。

何も聞いてねーのにクソナードがペラペラ喋つてきやがったから、まあ大体の事情も極秘の情報も知ってる。あいつの個性が実はオールマイトから受け継いだ力だという

事も、そしてその対価がどんなものなのかも。

目茶苦茶だと思つてたが、それを知つた後は軽くこいつ本氣でイカれてんじやねーかつて心配しちまつた自分の頬を殴つた。元々、こいつはこういうヤツだ。心配するだけソンだと思う反面、やつぱ頭の隅つこの奥底で心配しちまう自分が居て自己嫌悪になる。あー自分を爆発させてえ。

自己犠牲が強くて、前を向いてしつかり歩けるヤツ。

腹立たしい。自分が傷ついてばっかりで、目につくもの全部守ろうとして、できたら自分の怪我がどんなに酷くても結果オーライなんて言つてヘラヘラ笑つてやがる。逆にできねー時はとことん自分を責めてかかるからやつかいだ。

そうだ。こいつはやつかいでもある。

つーか、なんで俺なんかに色々秘密を言つたのか問い合わせても「かつちやんには知つててほしかった」一点張りだ。

3 第1話 もっともらしい死に方だったのに掌は紅葉?!

こいつ、妙なところで頑固だからイラつく。まあ、その頑固さがあつたから、クソみてえーな思考してた俺や、色んな奴にいい影響を勝手に与えまくつて変えていきやがつたから無駄じやなかつたみてえだが。

結局のところ、俺にとつてこいつは幼馴染でいけ好かなくて頑固者で。自己犠牲が過ぎて放つておけねえ。下手すりや自分で死に行くような奴だ。誰か傍で睨みつけて首根っこ引つ掴んで殴つて正気に戻してやんねえとダメだ。

じやなきやこいつはすぐに死ぬ。

他人を救うのがヒーローだというのなら、自分の命も少しは大切にしやがれと何度も言つたかわかんねえ。自分を救えねえ奴に他人を救うなんてできるかと。

だが聞きやしねえ。だから今もこうしてこいつは敵に囲まれるなんてヘマをやらかす。ああ、本当にこいつは。こいつって奴は。

ホント俺様がいねえとダメだな

「おい、クソデク」

「なに、かつちや…ヘブツ！」

とりあえず今までのイラつきの分を発散するように、ガキ二人をあのクソ爆発頭へと投げつける。へつ。なんだその間抜け顔。

「かつちやん？」

「そのガキ二人連れてここから離れる」

「え?!」

「お前が適任だろーが」

少なくとも俺がそいつらの泣き声にキレる心配がなくなるだろ

「そんな…！」

そしてどういうわけか、クソデクはオロオロし始めて、そして困ったような顔になりやがった。

5 第1話 もっともらしい死に方だったのに掌は紅葉?!

「かつちやんを置いて逃げられるわけないだろ！」

「こいつ、本当はバカなんじゃねーかつて本気で思えてきた。

「なに勘違いしてやがる」

「え？」

睨みつけながら、大声で言つてやる。いつものケンカのよう。いつもの日常の一部のようになるべくケンカ腰で。憎まれ口で。そうすりやこいつは安心して子供二人を連れていく。

「だあれが逃げろつづったよああん?!このクソナードが!!俺あ、このガキ共連れていけつつたんだよ!」

「でも、それ逃げろつて言つてると同じ」

「同じじやねーよクソがあああ!」

「ええ?!ど、どこが違うのさ?!」

「ボボボン！」と両の掌から火花と小さい爆発を起こさせながら、敵とクソデクを威嚇する。俺様を誰だと思つてやがる？つてな。

「こいつらの泣き声が煩くて集中できねーんだよクソナード!!」

「え、ええ？ それはかつちやんがずっと大声で“黙れクソガキども!!”って言いながら凄い剣幕してるからでしょ？」

「うつせえクソが！死ね!!」

「り、理不尽だよかつちやん！」

とりあえず、あいつがガキどもをなだめている間、作戦をたてた。それをどう始めるかの前に、問題が発生した。

このクソナード：どうあつてもここを離れないつもりらしい。クソ。ふざけんなよ
ワカメ頭が!!

「かつちやん」

大人になつても、何故かこんな可愛らしいあだ名で呼び続けるクソデクを睨む

「僕は絶対キミを一人にはさせないよ」

「…」

ああ。俺の作戦はどうやら見事に筒抜けだつたらしい。だからこいつはキライだ。

「そーかよ」

思わず笑つちまう。バカが。

「俺がお前のいう事聞くと思つてんのか」

「…！」

そんな事、予想してなかつたと思つてやがんのか

一体何年、お前と一緒に居ると思つてやがる？ちいせえ頃からだぞ。

「かつちやん、やめ——」

ああ、一例の動作でなにをしようとしてんのか分かったのか。さすがは観察しまくつて何でもノートに書き留めやがる変な癖持つクソナードだ。

「閃光弾！」
スタングレネード

一旦、こうやつて敵味方に目くらましをやりながら、次の攻撃だ。

「かつちやん!!」

狙いはもちろん

「ぶつ飛べ」

クソデクと——そのガキども

「かつちやああああああん!!」

ドカン!!と大きな爆発音。そして、ガキどもを庇うように遠くへと飛んでいくデクが見えた。そうだ。そうやって守つていろ。その間、ほんのちょっとの間だ。それがあればこいつらヴィランなんて一掃できる。

「次はてめえらの番だ」

ニヤリと、笑つてやる。身体はボロボロで、正直俺もデクももう限界だつた。守れるだけの力も、逃げ切れるだけの力もアイツも俺ももう、なかつた。

「てめえらは、あいつを、デクを追い込むために、罠を用意したんだろうがなあ、無駄だつてことを思い知らせてやるよ」

そう。こいつらの目的は最初からデクだつた。それに気が付いたのは俺。だから、少し体力を温存して、今の攻撃を温存していた。あとたつた一回の大技しかできねえ。しかもその反動で俺自身が無事に済むとも思えねえ。

ハツ。結局このザマか。

「あいつは、殺^やらせねえよ」

あいつに散々、自己犠牲のやりすぎだ頭イカれてんのかクソがつて腐るほど言つてきたつつーのに、自分はこの局面でまさに自己犠牲をやろうとしている。

「食らいやがれ」

汗だくの身体は、そこらへんに散らばつた俺の血と連動できることが、判明している。
自分の個性だ。自分がよく知つてる。

だから、もし、もしもだ。その汗だくの身体を起爆に使えば、飛び散つて流れ出た俺の血と触れ合えはどうなる？

結果は明らか。大爆発が起きやがる。それはしねえようにしてたから論理上でしか成立はしてねえが、まあできるだろ。さつきためしてみたら案の定、できちまつたからな。

ただ、俺を中心に大爆発が起きやがるから俺も周りの奴らも無事じやすまされねえ。だからさつき、特別に作つてもらつておいた人体発見レーダーを使つてこいいらにまだ誰かいねえか確認しておいた。

結果は、オレとヴィラン共だけ。

さあ、御託はもういいよな。

大爆発と行こうぜ?

「"血線インパクト"!!」

そう高らかに声に出して。俺は自分の個性で導火線に火をつけた。一瞬まばゆく光り輝いて、そして次々と俺の血に爆発が起こつていく。そうして起こつた大爆発。俺はどこかそれを遠くで見てているような感覚で。

だが、その凄まじい威力に身体が持つてかれそうになる。

まだダメだ。踏ん張りやがれ爆豪勝己！せめて最小限になるために踏ん張るんだ。
ここで俺の身体が吹き飛ばされりや、その先の民家にまで被害が出る。今の俺は爆発の
導火線だからな。

「グ……ううう……！」

ああ、体中焦げ臭くなつてきやがつた。炭になるのかな。どうでもいいか。

「カハッ！」

やつと爆発が納まつた。ああ。身体が軽い……いや、そうじやねえか。あんだけの爆発
の中心に居たんだ。体中の水分が飛んでもおかしくねえ。

体中、ひでえ火傷だ。

自分でやつといてなんだが、こりや助からねえな……

「ハハ……」

空笑いが出ちまうな…。そして身体は力を失って、ゆっくりと背中から倒れていく。
ああ、いてえのかな。なんて思つてたら

「…なに、やつてやがる…ツ爆豪！」

ああ。ホントに今日はツイでねーな…

「なん、で…おま、え…が…」

何でお前がここにいやがる？半分ヤロウ

「お前、散々緑谷に!!」

「うる、せー…わ、かつて…る

「じゃあ、じゃあなんでこんな無茶しやがった?!」

言いながら悔しそうに唇噛みやがつて。なんだよ。てめーもデクと同じなのかよ。

救えねえ奴が居たら、てめえはなんも悪くねーのに責任感じるバカな奴。

「し、らねーよ…」

かろうじて見える左目で見ると、半分ヤロウは今にも泣きそうなほど顔をくしやりと歪ませてやがる。

そして、自分の個性で少しでも良くなるようにと、俺の身体を薄く氷の膜で覆う。無駄だつづーの。見りやわかんだろーがよ

「かつちやん！」

ああ、目障りで無茶苦茶でイラつくクソナードがきやがつた。しかも俺見てギクリと動きを一瞬止めた。お前もわかるんだよな。そうさ。もうすぐ俺は

「かつちやん…ヤダ。ヤダよ…なんであんな無茶な事を…!! あんな、あんな自分を!!
「てめーと、いつしょだ」

「え？」

「あが、いきすぎた、じこぎせい…だ。わかつたか…クソデク…」

口がもう、上手く動かせねえな。そう思つたら、半分ヤロウが俺を支えたまま氷をとかさないように自分の個性を使って俺を温めてくる。余計なお世話だよこの野郎。

「いてえ…だろ」

「…！」

「みてる、がわも…いてえんだ」

「かつちや…」

「わか…たか」

「わかつた…！わかつたよ！僕がどれだけ無茶してたのか、わかつた…！見てる側がどれだけ痛くなるのか、わかつたから！」

だから。そう続けて言おうとしたデクは、声を発せなかつた。

「な、くな」

「かつちや…うううう！」

間抜けな顔だな。てめーはいつも

「きづくの…おそすぎ、なんだよ」

「かっちゃん…つ！ごめん！ごめん！」

まあ、こんな終わりも悪かねえな…

せめて

長生き

しろよ

ああ、そうだ。最後だから言ってやるか

「出久…
いすく…」

「かつちや…?!」

ハハツ…なんツー顔だよ…ざまあ。

ああ…でももう…声あんまし出ねえや…視界も…もう…

「嫌だ！いやだよ！かつちやん生きて!!」

幼馴染の声が遠くへ行く感覚がする。

「爆豪!!息をしろ！おい!!」

半分ヤロウの苦しそうな声も…もう遠くに聞こえる。

そうか。

これが死ぬ感覚なのか…

「死ぬなかつちやん!!」

ハハ：最後までそのあだ名かよ。まあ、悪くはねえな

「い……き……ろ……よ」

だからまあ、餓別だ。

なけなしの力を振り絞つた、俺からてめえらへ

「てめえら、ながいき、しなきや、あのよで、ぶつころす……」

さあ。終いだ。俺の人生の幕を閉じよう。

.....。

つてーのが、俺の最後のハズだつた。そう。ハズだつたんだ。

「…」

気が付けば俺は生きていて。

「勝己～こつちへおいで～？」

「ほらほらパパのほうにママもいるわよ～？」

自分が知る両親は何故か若返つていて

「だう」

そして、俺の発せる声は何故かぜんぶ、だう。や、あう～だ。手元を見れば積み木の玩具。そして断然部屋や家具やらなんやらが嫌なくらいデカイ。ジジイとババアもデカイ。そして、極めつけに自分の掌は紅葉みてえな明らかな赤ん坊の手だ。

ああ。そうか。と俺は合点がいった。

たしか、生前クソデクが「かつちやん、かつちやん！見てみてこのネットの二次小説！」って言いながら無理やり読ませてきただことがあった。その話じや、誰かが何かしらの理由で死んじまつて、神様が出てきてチート能力授けて逆行させて一から人生やり直すまるでゲームのようなお伽話。

そんなもん読んでねえでテスト勉強しろと言つたら、あいつたしかニッコリ笑いながら「もうやつたよ」つーもんだから爆発させようかなコイツと睨んでいると無理やりアレコレ二次小説を読ませてきやがつた。

嫌なことに、一度目を通したり耳に入れちまつたモンは、ぜつてー忘れねーから覚えちまつてやがる。そうかよ。これもなにかの逆行つーフザケタもんなのかよ。

「……」

はあ：ため息が出るぜ。だがまあ、なんの因果か。幸か不幸か。もう一度、爆豪勝己

として一生を送るのならば。見るからに赤ん坊の俺がこれからなにをするか。

決まつてる。今度こそデクにもオールマイティにも負けねえようなナンバーワンヒーローになつてやる。

そして…そうだな…しうがねえから自己犠牲が酷くなる前に。変な癖がつくまえに。俺が早くに見張つてやる。そんでちつとマシになるように鍛えてやんよ。

だから首洗つて待つていやがれ

おれのヒーロー
久出谷 緑

第2話 前世ヒーローの鬪乱1

俺が二度目的人生でデクに出会ったのは

「ほおら、 いっく君よー。 かつちゃん」

「いっくですー。 よろしくね、 かつちゃん」

まさかの、 生後七か月の時だった。

早すぎんだろ何だよあの髪の毛ホワホワな緑色は！ 手がちつちえんだよふざけんな
!!あとヨダレ出すすぎなんだよ目クリクリしすぎなんだよ可愛いじやねえかよクソが！

まさかの両親がデクの両親と幼馴染で、 近所に住んでやがつてしまも親友ときたもん
だ。 しょっちゅうこのウゼエ緑の髪が俺の傍に居やがるこの状況。 なんなんだよ前世
でももしかしてこんなだつたんかああ、 ん？

「あうー」

「…」

とりあえず、しばらくは様子見か。なんて思つてたら、こいつ親が見てないほんの
ちよつとの間に棚は登ろうとするだのコンセント弄ろうとするだの飴玉呑み込もうと
するだの色々やらかそうとしやがるからキモが冷えやがる。

『だああ！てめーなんつーもん食おうとしてやがる?!』

『え？ダメ？』

『当たり前だろうがあああ！見てみろこれはビー玉だつつの！』

『だつてキラキラしてて美味しそうだつたから…』

『てめーはキラキラしてたらなんでも食いたくなんのかああ、ん?!』

『ふえ…』

『ゲツ…』

『ふええ…かつ…かつちゃんがおごつだああああ』

『だああああ!!もう!!泣くな!!怒つてねえ!!ホラ、これは食べちゃダメだが、こつち、こ
れは食べ物だ』

『ふえ…これ？これなあに？』

『赤ん坊用食品のゼリーだ。ほら、キラキラしてんだろーが』

『わあホントだ！おいしそう!!』

『……はあ……』

てな感じで毎日なにかやらかそうとするたびに俺様が慌ててソイツの手からとつたり、ハイハイの方向を逆にしたり、怪我しそうになつたら素早くなんとかして免れた。おいふざけんなクソナード。てめえ俺様をこの年で過労で殺す気か。ババアもおばさんもなんで気がつかねえんだよクソッ！

ああっ！またてめえは性慾りもなんくなもん口に入れたら！

「ダウ！」

「…う？」

ダメだと言つても口からは赤ちゃん語しかでねえ。それにたいしてデクのやろうは、首を傾げて『どうしたの、かつちyan？』なんて言つてきやがる。

あああああ爆発させてチリにしてえが生憎この身体は個性が出る随分前の身体だし、まだ乳児。

「はあ…」

溜息は普通にできるんだな。これからが思いやられる。クツソ。親共なんて能天氣におしやべりしやがつて！オレの苦労なんてこれっぽつちもわかつてねえ！ああああイラつく!!

そんな日々を三か月くれば過ぎしてたら、デクのやろう俺様の顔をジッと見ながら

「か一ちゃや？」

「……」

つて言いやがつた。か一ちゃつてなんだ。もしかしなくとも『かつちゃん』か？

つーか、なんでてめえは自分の親よりオレの名前を最初に覚えやがつた？ 気色悪い

「ちょ…ちょつと、いづく…今」

「言つたわよね？ か一ちゃつて!!」

あああ母親共がうるせええええ

母：じゃないわよね…家でもそんな風に言つてないし」

「てーことは、勝己のこと?!」

「い、いizzくが最初に覚えて口にしたの、かつちやん?!」

「あつちやー…ごめんなさいね。うちの勝己が」

おいコラババア。なんで俺様が悪い事になつてやがる? 悪いのはデクだらうが

「い、いいのよ…それだけ勝己君のことが大好きなのよ」

ああ、面倒くせえ事になりやがつた。思わず赤ん坊のまま頭を抱える俺を見て、首かしげながら笑うアホデクに本氣で殴りかかりたくなつたのは言うまでもねえ。

俺様はてめえの保護者じやねえんだぞクソデク。

それから数年がたつた。なんて言おうと数年がたつたんだ文句言うな。もつと赤ちゃんエピソード欲しかつたなんて聞かねーかんな。ありすぎて俺様は忘れることにした。あーあーあーなんにも覚えてねーなあ!

あれから平和つちやー平和な日々をおくつて、時々やらかしてくれやがるデクに殺気を覚えつつ過ごしていたそんな、ある日。

おい、ウソだろ…と目の前の出来事に啞然としながら、俺は物陰からコツソリと状況を窺っていた。俺の目線の先には赤ん坊のころから一緒に過ごさざるを得なかつたクソナード。そしてそのクソナードはといふとまだ幼稚園児の幼い姿だ。

そう。俺が逆行したと気づいたあの頃から早数年。やつとここまで来たなあなんて呑気にできるハズもなかつた。あの野郎、これまでも知らねージジイやババアについていこうとすんのを俺がいつもさり気なく取り戻してた。

おい、クソナード。お前ぜつてえ前世じやこんなに頻繁に攫われそうになつたりしてなかつたよな??なんで今世こんなに頻度あがりやがつた?ああ、?
だからまたこの光景を見て頭が痛くなつた。

「大丈夫だよ。ちよつと調べものしているだけなんだ。」「しらべもの?なんの?」

クソデクがそう首を傾げて聞けば、奴の目の前の大人の男はニヤリと気味悪い笑みを浮かべやがつた。

明らかに口クな事を考えてねえ口クデナシの大人の顔だ。怪しすぎる。さすがのボケでバカでクソなデクでも騙されねえだろ。だってあの顔見る。わからんねえ奴の方が頭イカれてやがる。

「個性の調べものだよ」

「わあ！ そうなの？ でも、おいしゃさんしか、わからないんじやないの？」

「大丈夫。私は医者だからね……」

「へー！」

おいおい。エセ医者かヤブ医者か知らねえが。さすがのこの時代のどの子供も知つてゐる。個性を調べようとする大人は悪い奴だから全力で逃げるか、警察に連絡しろつといつともクソ親たちとクソ先生共が耳にタコ出来るほど言つてくる。

いくら昔は少しの事でもバカみてえにすぐ信じちまうクソナードでも怪しいあんな奴についていこうとはしねえだろつて考えてたが甘かつたか……

そういうやあいつ、まだ4歳児だつたな……4歳児つつ一のはあんな隙だらけなのか……？俺も4歳児だが精神年齢はもうはるか彼方だしな。

取り越し苦労になることはわかつてゐるが、まあ念のためだ。べつにあのクソナードがどうなつたつてかまわねえ。ただ後々面倒なことが俺に起きたかもしけねえ。

だから見張つてる。そう。これはあのクソデクのためじやねえ。断じて俺があいつのことが心配で見張つてるとかじやねえぜつてえそじやねえ！

こりや言わゆる、自分のためだ。

息を殺しながら、気配を消してジットと二人の行動に注目する。前世はナンバーワンヒーローまではいかなかつたが、デクと肩を並べるほどのプロヒーローだつた。

前世でぜつて一できねえつて思つても氣合で身に着けた追跡力と判断力をフルに使う。直感力とそれを確信に導いてくれるのは前世で得た経験と推理力のおかげだなこりや。

そんで色々頭ん中でパーティを組み立てていく。カチリ、カチリと色んなモンが組み合わさつてバラバラになつて、そんでやつと仕上がつていく感覺。

ああクソ。こりや面倒なことが絡んでやがる。次はどういう行動をするかに今後かかるてるな。

……つーか、デクに近づいてくる奴はいつも変人だつたなそりゃ。

前世でもあいつは、ヴィラン側でも味方側でもあいつにちよつかいかけてくる奴らはみんなクソみてえな変人だつた。

ああ思い出したら腹たつてきやがつたどつかに爆発しても良いカモいねえのか。

そんな事をうだうだ考えてつと、嫌に口が回る男ゴミが仕上げだと言わんばかりに邪な笑みを浮かべながら決定打ともいえるような、いかにもデクが興味を引きそうなことを言い出し始めやがつた

「…キミは自分の個性…早く知りたくないかい？」

「うん！ 知りたい！！」

「じつはここだけの話。キミみたいな子供限定でわかっちゃう簡単なほうほうがあるんだ！」

たちまちデクの周りから花が咲いていくような、笑顔が一層眩しくなったというか、喜びと期待と憧れがバツと出てきやがる。

おい。少しばかり好奇心隠しやがれクソデク

「ホント？すぐにわかつちやうなんて、まほうみたい!!」

「そうだろう？しかも針を指に差すだけの少量の血だけでわかるんだ。」

「すごいすごい！」

聴いた事ねえぞそんな変な検査方法。個性を知るつづることは大切で、そう易々と判断できねえ。

そもそもが個性が現れてから怪我しちまう奴だつているし、コントロールもしなくちやいけねえ。そんなもん幼稚園児の授業の中で習つていくが：ゴミ変人の奴の言つてた方法ができるわけがねえ。

まず、血が足りねえ。病気を調べる時にでさえ信じらんねー量を採られる時だつてあんのに、個性を調べるための、それこそ人生で一番大切で重要な検査を、血の一滴や二滴で出来るはずがねえ。

自分の一生を決めるパートナーを知るんだ。当たり前だ。個性をよく理解し、安全に

扱うためにも綿密で纖細な調査、検査を何度もおこなつてやつとわかんだ。

だからそんな手つ取り早く個性わかつてたまるかつづーの。さすがのデクでも気づけるだろ

「本当は秘密なことなんだけど、今先着で20人くらいの子供を限定でタダで検査して
るんだ。キミで最後の一人なんだよ。どうだい？ やつしていくかい？」

「うん！ やる！」

はあ?
?!?

あのクソナード今なんつった??『うん！ やる！』だとおおお??

マジふざけんな！あんな全身怪しいやつについていくとか、頭沸いてんのかクソナード!!つーか、あのクソカス子供だけに声かけてやがるのか!!!口リコンかあいつ！ああ、イライラしてきたクソがああああ！！

まあ、今まで疑問が確信に変わつたな。

クソデクにしたように他のガキどもも誘つてやがるつづーことは…誘拐犯だという

可能性もある。どうする？このまま怒りの感情のままツッコんであのゴミを炭にしち
まえばいいんだろうが、もし万が一

他のガキ共も、どつかで捕まつてたら？

そこまで考えたら、『このままツッコんでぶつ殺す』はできねえな。しかたねえ。かな
り面倒くせえが

「おい、デク」

ちょっとと声に怒りと、デクを小バカにするように話しかけながら、俺は両手を片方ず
つポツケにつつこんだまま、デクの隣に並んだ。んで、このバカを一発ぶん殴る。

勢いは殺したが、衝撃でこいつの頭が下へグラリと揺れた。ああ、やっぱこの髪の色
は、あいかわらず緑だな

「いたいよ、かつちやん！」

涙目で急になにしてくるの。と睨むこいつを、呆れたように俺が睨む。そうしたら決

まつてこいつは少し恐縮した後で困った顔になつて、俯く。

ゆらゆら揺れるこの目の前の緑色のぼわぼわした髪の毛を、無性にモフリ：いや、むしりたくなる。ああ爆発させてえしんでくれねーかな

「手加減はしたぜデクしね。」

「ひどいよかつちゃん！」

「つーか、お前なにしらねえ奴についていこーとしてんだよ」

今まで蚊帳の外においておいた変人ヤローを親指でビツシとさす。するとクソデクは今まで俺が見ていた事をすべて話した。

「だからね、だから」

ワクワクしてやがるテメーの目は、いつもキラキラ輝いてまぶしくて、俺はソレを見たびに

「ああもう鬱陶しい奴だなてめーは!!」

鬱陶しくてしかたねえ。クソが。爆発させざるをクソナード。んな事を思いながら舌打ちすると、ギュッと、小さな手が俺の洋服の裾を掴んできた。その手は少し震えていて

「かつちやん：」

んだよ。なんでそんな顔で俺を申し訳なさそうに、困ったように見つめてくるんだよ？一人じゃ不安だから俺も一緒にきてほしいっていう顔だ。チツ。昔からわかりやすいんだよてめえは。

「俺はてめーの保護者じやねーぞ」

「ん？うん？そうだね：？」

言いながら首傾げてやがる。よくわかつてねーなコイツ。まあ、この方法が妥当か。

「しょーがねーな」

そう一言いつただけで、こいつの顔がパアアア！って明るくなりやがった。クルクル顔かえやがつてクソナードが。感情が相手に読み取られやすい体質はこの時からだつたのかよ。

「俺もいく」

そう言えば、その変人ゴミは慌てたようにどこかへ連絡していた。おおかた奴の上にいる司令塔ナマコミか、組織もえののボスゴミかに、かけてやがんな。しばらくして変人は了承を得たらしかつた。

「さ、こつちだよ」

……車に乗せて移動かよ。しかもご丁寧にカメラと睡眠ガスを発生させる機械まである。とすると盗聴器もありそうだな。

ココから遠い場所に位置してやがんのか？ そعدだとしたら逃げる時面倒じやねーか：相当な組織か？ ここまで念入りだと…連れて行つたガキ共は家にかえつてねえな。

そう言えば最近、あの付近でガキが行方不明になるつづー事件があつたな…

頭の中で、欠けてたピースがハマつたような音がした。

ああなんだ、そういう事かよ

キラキラ目を輝かせながらなんにでも興味をしめしている、能天気な緑色を見て、途端にこの幼馴染をとてつもなく殴りたい衝動にかられた。

十中八九、その事件に巻き込まれてんじやねえかクソがああああああああ!!!!

「爆発してしね!!」

ついポロリとでちまつた言葉に、ビクリと肩を震わせて恐る恐るこつちを振り向いてきたのはクソデクだつた。

「…」

「んだよ」

「ヒツ……う、ううん……なんでも。ただ、かつちゃん少しイライラしてるから、さそつたボクが、わるいのかなって……」

ハツキリ言えばてめえのせいだクズ！と吐き捨てたい。ただ、なんとなくショボーンとしてうぜえ。ああ・目障りなんだつてその顔。

「…」

思わず無言でいれば、恐る恐ると言つた感じに、クソデクはまた俺の服の裾を握つて、クイッと引っ張つた

「かつちやん……めんなさ」「ついたよ」…」

存在を無視していた変人が言葉をかぶせてきた。んじやまあ、仕事にとりかかるとすつか。両腕をポツケから出してうーんと思いつきり伸ばす。その時に空気中に俺の二トロを少し発生させてみた。

個性は上々。こんな時のために少しづつ早い段階から修行をコツコツやつてきたんだ。前世含めて久々に暴れられると思うと、口元が緩む。

三歩くれえ前に出たら、いつもひつついてくるデクのバカが隣にいない事に気が付いた。なんだてめえ。今更俺様に遠慮か？

「おい」

「なに…？かつちやん」

なんつー顔してやがる

「なんで離れた？」

「え、だつて…そのほうがかつちやんは…イライラしないんじやないの？」

「…」

てめえは。まつたく…本当に

「ハア…」

「た、ためいき?!ボクかつちやんにためいきつかれて…ツ!?

「おいでク」

「ひやい?!」

ポンと肩を軽くたたく。それだけでもこいつには十分の攻撃力だつたらしい。冷や汗をかきながらブルブル怯えてる。でもその瞳はどこまでも真っ直ぐで：道を踏み外したりはしないんだろう。こいつのことだから、命を投げ捨てても他人を救おうとヴィランに立ち向かうんだろう。

やっぱてめえは救いようがないほどのお人好しバカだ。

「べつに邪魔じやねーよ」

「え」

「てめえはゴミでもねえし」

「かつちやん…?」

「それに」

ああ、今日はやけに勝手に口が動きやがんなあクソムカつく!!

「俺の横に並んでいいのは強くなつたお前だけだ」
「??」

そう。

未来のお前だけだ。許されてんのは。だからよお

「弱いままのてめえなんか俺様の四歩後ろであるいてやがれ！」

「えええ?! いみわかんないよ、かつちやん!!」

「わからんなくつて良い」

今はそれでいい

片方の拳をもう片方の掌にぶつける。自分が今、あくどく、それこそヴィランのよう
に笑つてるのがわかつた。

作戦は頭ん中にある。ガキ共の居場所はある程度のハツキングでどこにいるのかわ

かつてるし、さつき身元不明でオールマイトやエンデヴァーにも地図と内容を送つとい
たからなんとかしてくれんだろ。

さあてど？

「暴れるぜエ？」

第3話 前世ヒーローの鬪乱その2

ハツキリ言おう。俺は甘かつた。

「かつちやん!!」

たつた4歳児のガキが、結構な組織相手にして無事に居られるわけねえ。これは俺様の失敗だ。できると思ってた。だが、身体の違和感が邪魔してうまく個性を扱いきれなかつた。

まだ幼児だからかもしれない。クソッ！なんつー失態だ。元・プロヒーローが聞いて呆れるぜ。

「かつちやん!!」

背中のほうで俺のことを呼ぶこいつの目は、きっとあの時のように怯えてても、助け

たくてしかたがねえヒーローの一面をしてんだろうな。

「うるせえクソデク黙りやがれ」
「で、でも…かつちやん傷…」

傷がひつでえのはわかりきつてる。だから、だからよお…これ以上その震えた声で心配そうに呼ぶな。今にも飛び出していきそうな声で叫ぶんじやねえよ…

「てめえの心配なんかいらねえんだよ」
「でも、かつちや…ぼくのせいで…」

クソツ！またか…またてめえはツ!!
「だあ！泣くなウゼエ!!」

誰のせいでもねえ。俺の失敗。そんだけだ。だからてめえがそんな顔してんじやねえよ。てめえは悪くねえんだよクソナード！
だから…あの時みたく…なんの力もねえのに…

「オレの前に飛び出すんじゃねえぞ…」
「え？ で、でも…」

「約束しろ」

「でも、かつちや 「やくそくしろ!!!」 …ツ!!」

それなりに怒鳴れば、デクの野郎は嫌々コクリと頷いた。よし。それでいい。口約束でもしなけりやてめーは何をしだすか分かつたモンじやねーからな…

もう一回だ。もう一回集中しろ。やれねえ事は後回しだ。今はできる事だけに神経を集中させろ。こういう時こそ余裕な笑みをして、なんでもねーみてえに笑つて、相手がそれを見て悔しがる様を楽しまなきやなあ！

「こんな傷、痛くも痒くもねえなあ！」

「このガキ…っ！」

やつと平常心を乱してくれやがったか。そうだ。それでいい。あとはプロヒーローたちが駆け付けてくれるまで、俺がふんばりやいいだけの話だ。一応念のために外からこつちまで俺の二トロを含んだ汗をばら撒いてきた。

プロだつたら誰か一人でも変わつた甘い匂いに気づいてくれんだろ。策は尽くした。後はヴィラン側に一切この事をバレちゃいけねえ。泣きじやくる後ろのクソナードを守りながら、必死に耐えて、時々あいつらの隙を見て攻撃をする。

注意をこつちにもつてこさせてバレにくくさせるのが、今の俺の出来る事だ。ああ、でもやべえな。血がとまんねえなあ！俺が倒れるのが先か、プロヒーローの誰かが到達するのが先か？確率は半々？てどこか？

「ハア…！ハア…ツ!!」

「随分と息が上がつているようだなクソガキ？本当は息苦しくつて痛くてしかたがないんじやないか？」

「ケツ…！ハンデだつつーの。俺が本気でてめーらを相手にすると思つてやがんのかああ？口リコン野郎どもが！」

「お前…相当痛い目をみないとわからないようだな…」

ヴィラン側が何の個性かは戦いながら分析した。俺の個性だけじゃ不利だつたが、生憎人生二度目の俺には個性だけじゃなく、経験と知恵と情報量が糧になつてくれる。戦

いはさほど難しいわけじやねえ。

問題なのがデクだ。

「おいデク」

「な：なに？」

「目え瞑つてろ」

「え、なんd 「いいから言う通りにしやがれクソが！」はわわわッ！わ、わかつたよ…」

「そうだ。それでいい。これからやろうとしてる事は、デクが見てたら少し目を負傷するかもしねえからな。」

「なんの真似だクソガキ？」

「ワラワラと俺たちを囲むヴィラン達と、それを少し先の方で観察してやがる研究者ども。ああそうだ。俺様に注目してやがれ。そんで

「ぶつ飛びやがれ」

手首に、いつもつけていた秘密兵器がある。これは一見するとただのリストバンドだが実を言えば、俺の二ト口を存分に含めるようになつてて、ある一定の二ト口を保存できようになつてる。ババアと親父に頼んで特別に発注してもらつた。

こんな時のために。

バシン！と俺は両腕をクロスさせて前へ伸ばす。これでリストバンドの中にあるスイッチは押された。

「食らいやがれ」

とたんに鳴り響く破裂音と破裂弾並みに発光するオレの手首。巻き上がる煙と、壁が少しばかり崩壊して煙幕が生じた。

見た目は爆発音と煙とで派手だが、威力はそんなにはねえ。あくまでも逃げる時用と

目眩ましのためのもんだ。だが、使いようによつちやあ、色々とできることがある。今回みてえに注意を散漫させるには、うつてつけだ。

幸いこの組織は未来のデクと俺を欺いて罠にかけやがつた危ねエ組織じやねえしな。正直あの最後の戦いはトラウマに近エし。

ああでもツ…！衝撃波は俺の方に来やがるんだよなあクソが!!傷に沁みやがる：

「グツ…！」

「かつちやん？ど、どうかしたの…？目、もう開けていい？」

「まだ瞑つときやがれ！」

「ええええ……」

デクの腕をとつて隠れる。そこで俺は素早く違エトコへ移動して思いつきしじヤンプしながら積みあがつた箱を蹴つて一人の敵の背後をとつた。そこで思いつきり俺の爆発をうなじに食らわせてやつた。

「ゲハツ！」

「お、おい?!どうした?!」

まだ爆発の余波の煙幕で何が起こってるかはわからんねえから、その間少しだけでもこいつらの急所狙つて気絶させておかねえと。数が多くなるとデクを守りきれ……じゃねえ。デクが邪魔になつて俺が気が氣じやねえ。戦いに集中できやしねえからだ!

こんどは静かに相手の背後の壁を足で蹴つて、宙でクルリ回転しながら踵落しだおらあ!!死にさらせやクソロリコン共があああ!!

「フブツ?!」

「なつ?!おい!!一体何が起こつて…」

今度はコイツだと、狙いを定めて。なるべく気づかれねえように音を最小限に。素早く、そして一点の急所へめがけて蹴りを入れた。

「カハッ！」

うし。これで残りは…そう思いながら次の行動に移そうとしたその、瞬間だった。

「おらあ！出てこい爆発のクソガキ！」
「うわあ!?」

「緑色のガキがどうなつても知らねーぞいいのか?!」

あいつ…デクを人質にとりやがった!!

「何勝手に俺の足手まといになつてやがんだクソデク!!
「ゞ…ゞめんにやさいいいい…！」

デクの野郎。泣けば何とかなるとでも思つてやがんのか。つーかあの、大男^{クソゴミ}デクを怖がらせやがつてトラウマにでもなつたらどうしてくれやがる爆発して死にさらしてやる!!

「ふー…」

ひとまず、一呼吸して冷静さを取り戻す。

さて。どうやつてこの状況を回避する？

デクを傷つかせず、尚且つこの大男^{ソダイゴミ}をグチャグチャに原型とどめていらんねえほどに

叩き潰して爆発させる方法。

「クソが。デクに気安く触つてんじやねーぞ」

4歳児をなんだと思つてやがる。この歳でトラウマにでもなつたら治るのに相当時間かかりやがるんだ。面倒くせえことになるじやねえかよ。俺様が一体なんのために何年こいつの傍に居たと思ってやがる？

「そいつをボコるのは俺だけで十分だ」

そんでてめーは刑務所ゴミバコにでも入つてやがれ。

いきり立つて、そのまま戦い続けた。だがやっぱ確実に仕留められるような技もねえ。身体も個性も育ち切つてねえ。なにより体格差がひでえ。おまけに俺は怪我だらけで血を流し過ぎた。

結果的に、そんな俺が倒れて起き上がれなくなるのは、そう時間がからなかつた。

「かつちやん！」

「へつ。達者なのは口だけかよ」

「ゲフッ！」

俺は今、敵になぶられていた。ああ悔しいじやねえか。なんなんだクソ。何が足りなかつた？やつぱ4歳児の身体じやあ…大人には勝てねえのか？
「カハッ！」

勝てると信じて疑わなかつた。

「かつちやん！もうやめて!!やめてよ！」

横目で、泣き叫ぶデクを見る。ああ、あんなに泣きやがつて。目元真っ赤じやねえか
…ホント、お前は泣き虫だよな…

「おらおらー！まだまだ痛い目見てもらうぜクソガキが！」

「グアッ!!」

腹に強烈な蹴りが入つて、そして勢いよく壁にぶつかつた。口から血がタラリと出て

きて、腹は痛えわ、頭は朦朧とするわ、背中も痛えわ：腕も痛みでか、それとも受けた攻撃でか、痙攣しはじめてやがつた。

「かつちやん!! やめて！ やめてよお！ かつちやんが、しんじやう：しんじやうよおおお
!!」

策はあつた。何通りか作戦は考えていたし、攻撃パターンも変えて色々ためした。だが：やつぱ身体が個性についていけてねえのが現状か：

そのせいで、このザマだ。ハハッ。完全に俺の敗北かよ。クソ……こんなみつとも
ねえ形で敗北するなんてよお…クソつ！ クソが!!

「ゲホツ…！ ゲホゲホ！」

「かつちやん、血だらけだよ…もう、やめて…だれか、だれか…たすけてえ！」

「ハン。馬鹿かてめえは。ここは誰にも知られることはねえんだよ。特殊な加工してあ
るからな。子供には気が付かれるが大人にや感知されねえ。無駄なんだよ！ いくら泣
き叫ぼうがな!!」

ああ、クソ…もう身体が動かねえ。

「い、く…」

「かつちやん?!」

護れねえのか。あの時も…今も。お前を危険な目にあわせてばつかで：ホント、クソ

弱え自分に反吐が出るツ!!

「ごめ、ん…」

「かつちや…?!」

でもよ…それでも立ち上がるしか俺に選択はねえんだよ!!

「かつちやん!!ダメだよ!!逃げて!!」

「ウグッ…ぐがああ！クソがああ!!」

フラリとしながら、膝を手で支えながら立ち上がる。そんで背筋をまつすぐ伸ばす。

ああ、身体が痛えなあ：頭がクラクラすんなあ。だが、敵の驚いた顔を見て、思わず笑みがこぼれる。そうそう。その顔が見たかつたんだよ俺は!!
ケツ！と笑つてやる。手からいいせえ爆発を起こしながら、俺はニヤリ笑つてやる。

「んだよ…それだけかよてめえの個性。『身体の能力を向上させる個性』、地味だが使い勝手良いハズだろうが。瞬発力あげれば素早く動けるし、防御や攻撃も自分の身体張つてできる。自由自在じやねーか。なんでもつと頭つかわねえんだよゴミ。」

「…っ」

「それこそ『誰かを守る』ために使つたほうが良い個性だろうが。ヴィランなんて似合わねえ…個性が、血が泣いてるぜ？」

「……ツ！」

目を見開きながら驚き固まる目の前のヴィランは——少しだけ殺気が薄くなつた。

少なくとも、前世じや無個性でも誰かの役に立とうとしていたデクのほうが、何倍もマシだつたな。あいつは、出来る限りで人を助けて守ろうとする奴だつた：

「お前…何者なんだ?!普通のガキじやねえ…誰だお前は?!」

ニヤリ笑つてやる。俺が誰かだつて？

「爆心地」

今も昔も、それは変わっちゃいねえ。

——*—*—*—*—*—*—*—*—*

ああクソ…体中痛え…もうたつていらんねえ。他の奴らが俺を取り囲んできやがった。この状況でデクをどう助ける?どう助けられる??クソ…頭がうまく回ってくれねえ…

「一斉に攻撃するぞ」

ああ、マジでやべえ……こんな時にまさか敵方のボスが出てきちまうとはな…

「まあ、てめえには驚かされたよ。俺たちの邪魔しなきやそのまますげえヒーローになれたのにな。残念だ」

そんなこたあ微塵も思つてやがらねえニヤリ顔をしながら、そいつが合図した。直後に襲つてくるのはこいつらの個性や武器の攻撃――

ここまでか。

短い人生だつたな。

何でか分かんねえが、俺はそんな事を呑気に考えていた――…

結果的に俺は総攻撃にあつて死ぬ……

⋮

ハズだつた

「…？」

いきなり攻撃音が止んで、ピタリ止まる周り。そしてどこかの壁が破壊される音と、敵が持つ武器がドロリと熱で溶けるという、異常な光景。

「まつたく…どこの誰かは知らんが、場所を報告してくれて助かつた」

そいつはそう言いながら、壁が破壊されて出てくる影とは別の方向からやつてきた。

「エンデヴァー…」

そして、崩壊した壁のほうから見知った声が

「ハアーハツハツハ!! 私が来た!!」

「オールマイトイト…」

そして、オールマイトイの後ろに少し若い、誰かが。でも、どことなく知つてんぞ。おい、まさかあいつは――

「まつたく。いい加減『何かを壊しながら登場』するのやめてくれません? オレの個性使つた意味ないじやないですかヒーロー意識低いんじやないんですか?? 本当のヒーローなら壊さず救えよこれだから筋力バカは」

「ハアーハツハツハ!! 相変わらず相澤くんは辛口だねえ。早く救助した方が良いだろう?」

「……はあー…」

「…あの、頭抱えて深く溜息はかないで相澤くうん…さすがの私でも落ち込むから…なんで? なんで相澤センセーが…こんなところに…よりもよつて…きっとまだヒーロー活動あんまししてねえ時に…」

「すまないね少年。」

「…あ?」

オールマイトは、立ち尽くす俺の前に屈んでくれて。頭をそつと撫でてきた。傷のせいでちよつと痛かつた事は内緒にしておこうと思つた。

「遅れてしまつてすまない。どうも敵の個性で邪魔をされてしまつて。」

ああそうか。だからオールマイトでもこの場所を把握するのに時間がかかつたのか。どうりで…おっせえなつて思つてたんだ。予定より十五分持ちこたえなきやいけなかつたからな。

「不覚にも俺でさえも場所がわからなかつた。唯一ここだとわかつた理由は、薄い甘い変わつた香りが空氣中に混ざつていて、それが道しるべとなつたが……」

「変だと思つて、一応その場で調べて、「く薄い二トロがばら撒かれてることがわかつて、それでもしかしたらと、この二人を呼んだわけだ。」

エンデヴァーと相澤センセーが代わるがわるそう言う。

やつぱニトロを空氣中にばら撒いておいて正解だつたな。気が付かれぬ場合は最終的にそれを起爆剤にして無理やり居場所を教えてたがな。

「こいつから匂つてくるつてことは、やつぱりお前がワザと振りまいてくれたつて事か。そして時間稼ぎと、相手の注意を外の俺たちから外すためにも、攻撃し続けてここまでボロボロに：お前、本当に4歳児か？」

センセーはすぐに俺が何をしていたか推測しちまつた。さすが相澤センセー。俺が認めただけはある。

「それに、君は凄い!! プロヒーローのような意志で守ってくれたな」「…あ?」

オールマイトがことさら優しくなる。え、この人って人の頭、撫でんのこんなに好きだつたか?

「他の子供たちを、君に注意を向かせることで、酷い実験から守つてくれていたし、君のお知り合いであるあの、泣きじゃくる緑色の髪の少年も君が守つてくれた。」

「べつに、そんなつもりは…」

「そんなつもりはなくとも、君はよく戦つたさ!! 君はもう立派なヒーローだッ!!

「…っ！」

ホント、あんたつて人は俺の欲しい言葉を…どーしてこうも簡単にくれんのか…わかんねえ。

それから、オールマイトは俺たちが憧れ続ける、輝かしい笑顔を晒して

「ありがとう。ここからは私たちにまかせなさい」

そう、言つてくれた。

ああ、やっぱこの人は最高のヒーローだ・俺を、俺たちをこんなにも安心させてくれる。じゃあ…もういいか

「わかつた…後は…まかせる」

休んでも、いいか…

「デクを…いづくを…助けてやつてくれよ…ヒーロー」

「もちろんだ！」

倒れかけた俺の身体を支えて壁に移しながら、オールマイトが笑顔をくれる

「もとより、そのつもりだ。我々はヒーローなのだからな」

エンデヴァーが負けじと身を乗り出す。

……アンタ、オールマイトをライバル視してるだろ…

「…まあ、まかされちゃ、やらないわけにもいかないしな。できる事はする」

センセー…あんた相変わらずだよ…

そこで、そこで俺の意識はブラツクアウトした。

あれから、誘拐事件は事なき終焉を迎えたらしい。子供たちを攫つてたヴィラン達はヤクザ共ともつながつてたらしくつて、科学兵器まで子供たちに使おうとしていたところに、俺とデクが現れたと。

マスコミには俺とデクの名前を伏せてくれと頼んだ。あと、個人的にオールマイトと相澤センセーとも時々連絡できるように相澤センセーとオールマイトとSNSの連絡先を交換した。

最初は渋つて、「いや、個人でかかるつもりは…」と断られそうだったのを、今までのデクと俺（おもにデクがツッコむ）事件遭遇確率と、デクの奴が異様に事件ホイホイだという事を今までの事柄を含めて説明してお願ひしたら即答でOKもらえた。

彼らの目が俺を憐れんでいたのは見なかつたことにする。

ちなみにエンデヴァーは何故かチラチラとすみっこで、色々話し込む俺たちを観察しながらため息を吐いてて、なんかウザくてそのまま無視（え？こいつとSNS交換？冗談だよな?）してたらデクがてくてくそいつへ歩いて行つて（なんでソイツの事かまうんだほつとけよクソデクが）首を傾げながら何か話してた。

それから数分後に、「天使かッ!!」と言いながら胸押さえて打ちひしがれてるエンデヴァーの様子を見るに、デクの気まぐれ天然にかかつたと見た。

：わかる。デクの気まぐれ天然はたまにしか発動されねえが、発動したらしたで恐ろしいくれえの破壊力を發揮するからな…アレで萌え殺されねえ^{やられねえ}のはバケモン並の精神のヤツだけだろ。

それになあ、俺はエンデヴァーとは関わる気はねえ。事情は深くは聴かなかつたが、舐めプ野郎に色々腐つた親の代表者みてえな事した奴だつて知つてつから。

まあ、でも、ちよつと言ひてえことがあつたから丁度いいな。前世じや言えなかつたし、まあ良いだろ。

「エンデヴァー」

「なんだ」

すかさずジャンプして足蹴りをあいつの顔面に向けてやつてやつた。サツとよけられた。もちろんムカつくがナンバーツーヒーローの名に恥じないほどには強い。避けられるのは知つてた。

だから後ろの方で小さな爆発で少し上のほうに浮いた。それから墜落し。まあ、威力は蚊ほどもねえ。今度は避けられもしなかつた。ダメージ入らねえこと見越したつて処かよ。

クソ……筋肉ウラヤマシイ……

「なにをする」

「テメーに言いてえ事がある」「？」

ニヤリ笑いながら、手で小さな爆発をいくつか起こした。そんな俺を見ながらデクが「Σ（。▽。ノ）ノキヤー!! かつちやんかつくいい!!」とかなんとか言つてやがったがちよつとお前黙れ。

軽くエンデヴァーを威嚇してヴィランみてえなニヤリ顔をして。

続け様にソイツめがけてジャンプしながらキック、パンチをかまして。避けられて、そこでエンデヴァーが攻撃態勢に入つた直後にはんで向かう軌道を爆発で変えながらそいつの顔面に蹴りを入れた。

エンデヴァーは再び目を丸くして驚いてやがるが、それ以上の表情は見せねえ。つーことは痛くねえつーことかクソが！

まあ、制裁はここまでにしておいてやらあ。

：筋肉ウラヤマシイまじムカつく!!

「テメーの息子、もし嫌な目してんなら何とかしてやれ。苦しそうに顔をしょっちゅう歪ませてんだろ」

「!!」

俺の言葉に、エンデヴァーは目を見開いて驚くばかりだ。

「なぜ…そのことを…」

「別に。カマかけただけだ。それよりなんとかして痛みを和らげてやれよ。父親だろうが」「……」

何かを考えてやがるこいつの顔を見るに、父親がどういうものかよくわかつてねえみてえ。おいおい…てめーどういう状況で育つてきたんだあ？そんな事もわからんねーくれえの変な環境で育つたのかよ？

まあ、俺はデクみてえなお人よしのヒーローじゃねえし。てめえのメンタル気遣うような真似しねえしするつもりもまつたくねえ。

俺がなにかすんのは、舐めプ野郎のこれからを少し変化させるだけだ。他はするつもりねえ。

俺はデクみてえなお節介焼きじやねえから。

「子供は道具じやねえ。大人みてえに丈夫でも、精神が強えわけでもねえ。全部が全部、弱えんだ。だけどそれは、まだ色んなモン吸収して育つてるからだ」

親を見ながら成長するんだ子供って奴あ。だからけつこう、悔れないし、かといつて厳しすぎるのもかえつて逆効果だ。心が……壊れるぞ。

「だから、今のクソみてえな態度しかとれねえお前を見ているだけじゃ、そいつ、大きくなつたらテメエのこと恨むぜ？ そんで父親認定されねえだらうな。想像してみろよ。子供に、まるで居ないかのよう振るまわれる自分自身を」

「うつ…ウグう…」

簡単に想像できただろう。目の前の男は顔を歪ませて、汗までかいていやがつた。相当辛え事だと気が付いたか。

そんな何も言い返せないエンデヴァーを見て、オールマイトはポカンと呆けていた。

「少年…爆豪といったか…キミ凄いじやないか！ あのエンデヴァーを口でねじ伏せるとは！」

「…お前、本当に子供か？ まるで大人が子供に戻ったかのような…」

相澤センセー…相変わらず、鋭いな…

クソ。

また、僕はかつちやんに守られた。

いつも守られてばかりだ…

「だあ！ひつつくんじやねーよ!! オールマイトイ!!」

「ハツハツハ!! いいじゃないか！君の頭は結構、撫で心地いいんだ！」
「知るか!!」

いつか。いつかきっと

「俺はどうすればいいのか、ぜひ君の意見を…」

「知らねーよエンデヴァー!! てめえで勝手にやりやあいいじやねーか子供に頼んな!!」
 「しかしねは…」

「だあ!! うつせー!! 4歳児が大人相手に何ができるんだつづーの!!」
 「いや、しかし君は見事にこの事件を解決に導いたじや…」

「だあ!! てめえはホント!! まつたくもつてしようがねえほどに!! くつそおお!! 犯めプ野郎はそこん処だけでめーとソックリだよ!!」

「…? 誰だソレは?」

いつかきつと、かつちやん：

(キミを、超えてみせる…)

本当は知つてた。僕は無個性なんだつて。知つててあのおじさんが言う誘惑に負け
 てホイホイついていこうとした。そんな僕や、他の皆を守るために君は戦つてくれた。

キミはボクのヒーローもあるんだよ。かつちやん。

無個性でも諦めたくない。諦めたりしたくない。

今まで僕や皆を一生懸命守ってくれた君の努力を無駄にはしたくはない。

だから

だから、かつちやん

(辛そうな顔：してほしくないよ)

僕が弱いばかりに、いつも君を苦しめちゃう。傷つかせてしまう。
ごめんね、かつちやん

(笑ってる顔、見たいなあ)

いつか、君が背負うものを僕も一緒に背負えるように。支え合って、笑いあって、背
中を預けられるように強く。
もつと強く強く

「『ぶるするうるとら』だ。」

僕は、相澤つて言う男の人と、憧れのナンバーワンヒーローであるオールマイトイに、も

みくちやにされて慌てて反逆しそうなかつちゃんを見ながら、意気込んだ。

あ、かつちゃん顔真っ赤だ。久々に見たなあ。あんな顔なんだなあ。かつちゃんの照
れた顔つて。

「照れてる。めずらしいなあ」

そう言いながらクスツッて笑つたら、エンデヴァーアーさんが隣で「天使がいる…」つて
また意味の解らない事を言つてた。

天使がいるつて、どういう意味なんだろう？

ある日の爆豪くん

これは……

ある日のカツちゃんとデクくんが、12歳の時の出来事です。

——*—*—*—*—*—*—*—*—*—*

どうしようもなく不安になるときがある。

それは時折、ふと頭上から降つてきてそのまま俺の中に溶け込んで、不安と、恐怖を煽つて蓄積されていく。そうして、段々と俺は中から言い知れない積み重なったモノたちに蝕まれていく。

「かつちやん？」

前から気が付いてはいた。だが、俺は多分：見ようとしなかつたんだろう。忙しい

と、あいつがあつちいつたりこつちいつたりして目障りで危なつかしいからと、目を逸らして、これで、このままで良いと。

そう疑わないようにしてきた。

でも、もうそれもできねえ。

「あのね、かつちゃん。今日僕の家にきて？」

「ああ？」

「かつちゃん今日、一人でお留守番でしょ？」

「…それがどうした」

俺がどう思つてたつて、何を考えてたつて、デクはわからねえ。いや、わからうともしてねえ。築いてきた俺たちの、この関係性は前世とは違エからか、デクの性格が少し異なつてきやがつた。

前のデクなら、俺の仕草や言動を観察し、すぐさま何を思つているのか、何を感じて

るのか、一言もしやべらねえ内に推測でわかっちまう。まあ、それでもわかんねえ時は殴り合つて怒鳴り散らかしながら本音を暴露してたな。

だが、こいつはどうだ。この、デクは。心底お人好しで優しくて笑顔が眩しいのは変わらねえが：ダメだ。こいつは根本的に甘つたれ野郎に成り下がつてきてる…!! たとえば何かが起こつても「かつちやんがいるから助けてくれるよ！」や「かつちやんが勉強見ててくれるから、もう少しだけ怠けてようつと♪」やらだ。

クソ。やつちまつた。ちゃんとやれてると思つてたが、大きな間違いだつたか：傍にいすぎた。世話を焼き過ぎた。

仲良くなりすぎちまつた。

「だから、今日僕の家で勉強会やろうよ！」

「てめえ、まさかまだやつてねえのか。あれ簡単だぞ」「えへへ～？」

だからか、最近…：

「でもさ、かつちやんとやつたらすつゞく楽だからさ！」

「…（樂…かよ）クソが」

「ええ?! なんで暴言?!」

コイツと一緒に居るのが辛え

「だつてさあ、かつちやんなんだかんだ言いながら一緒にやつてくれるし、説明上手いし…おやつ作ってくれるし美味しいし!!」

「……」

どうも最近になつてこいつが、このデクの顔が、俺の知る未来のデクの顔に近づいているからか、前世の記憶がフラツシユバツクすることが多々ある。そんな中でもやつぱ変わつてきちまつているのがデクの性格だ。

コイツだけは何があつても変わらねえつて信じていたかつた。だが：長年の観察で理解したし、ハツキリとわかつたし、受け入れることもできた。

「デク、お前ちゃんと自分一人の力でやつた事あんのか」

「え? ないけど。だつてかつちやんが居るし!」

「……(またかよ)ちゃんと自分でやりやがれ。俺がいつまでもテメエの傍にいるなんて確証はどこにもねえんだ」

「……どして、そういう事言うの?」

「どうしたもなにも――――――」

「だつて! 僕は『無個性』だよ?! なんにもできないんだよ!! かつちやんが! かつちやんがいなくちやダメなんだよ! ボクは――――――!!」

コイツが変わつてきちまつたのは…『俺』のせいだ。

「ウルセエ…」

「かつちやんが居れば僕は怖くないよ! 無個性でもちゃんと生きれる。だつてかつちやんが隣にいてくれるんだもん。ずっとどんなものからでも、かつちやんが僕を守ってくれるんだもん。そうでしょ?」

「――――――!」

『前』の時、こいつに構いつきりになつたりしなかつた。むしろ目の前から消えろカス！くれえの勢いで暴力を振るつてた。こいつの存在を認めなかつたし、こいつがどんなにヒーローになるといつても俺は励ますなんつー事は一切しなかつた。

「ねえ、かつちやん何とか言つてよ」

「ウルセエ。例えはの話にガツツいてくんなキモいんだよクソナード」

「…かつちやん、言葉に霸気ないけど、どうしたの？」

むしろ声を大にして意氣揚々と「お前なんかヒーローになれねえよ！」や「屋上からワンチャンダイブしちまえやクソナード!!」なんつー事も平然と言つてみせた。

今はもうあんなのは無理だ。これからはこいつを鍛えるために傍にいる…なーんて、俺のエゴで思い上がりつたばかりに、俺は俺の一番のものを壊しかけてるなんてなあ：皮肉すぎんだろ。

「…」

「かつちやん？」

俺は

「な、ど、どうしたのかつちゃん」

どうしたらいい？

「今までに…見たこともない凄い顔…してるよ？」

なあ、教えてくれよ

「お腹でも痛いの？」

おれのヒーロー
緑谷出久

—————

とりあえずは、ウルセエクソナードを軽くいなして、一人になりてえから来るなって

言つたが、そんな事で諦めるデクじやなかつた。ああ何でこういう頑固な部分はちつとも変わんねえんだクソが死ね!!

だから忘れてなかつたら行くとだけ言つた。そこでプラプラ歩いていると――少しえ遠出しちまつたある公園で、アイツと出会つた。

「すよすよ…」

「…………」

今時すよすよ…なんつーメルヘンな寝息立てながら寝る奴なんて居たんだな。そう思いながら通り過ぎようとしたら――

「この、クソ野郎!」

目に映つたのは、その寝ている無防備な奴へ、勢いよく振りかざされていく長細い銀色と、何かにあたつてその場に鳴り響く鈍く痛々しい音と、赤い鮮血が宙に舞う場面。思わずその場に立ち尽くしちまつた。

え？ 今…何が起こりやがつた？

あり得ない出来事が目の前で起こつて、とてもじやねえが頭の処理が追いつかねえ。
おい、あの鉄パイプ持った男、一体寝ていた奴に何した？

「ウ…」

のろりと起き上がった、頭から血い出してる、俺とそう遠くない年ごろの男子。

「今まで死なないのかよテメエ…いい加減、死ねよ!!」

その、心無い男の言葉が、なんでか俺の奥底でくすぐつてた何かを揺らしてくるよう
で。

「お前なんて生きててもしうがねえんだよ！」

気持ち悪くて

「死んでくれよ!! もういいだろう?!」

なんとか嫌で

「これ以上、誰の邪魔もすんじゃねえよ!!」

いてもたつてもいられなくて

「何の役にもたたねえクソ野郎だろうがお前は!!」

ポタリ…と血が殴られた男子の頬を伝つて地面へ流れ落ちた。それはまるで涙のようだつた。痛い、苦しい、悲しい。色々な感情が籠つてそうなソレはポタ、ポタリ落ちてつて、男子の顔は俯いててよくわかんなかった。

わかつてるのは、こいつは怪我をしてるつて事で。泣いてるわけでも、痛そうにしているわけでもなく…ただただ、自分を傷つけた喚いている男を静かに見守るようなどつても優しい眼で見ていた。

何者なんだ…? こいつ。

そう思つてゐる矢先に、そいつは男に歩み寄つて

「お、おいつ」

そいつは今しがた、てめえを殺そうとしてただろうが！って言おうとしたら、ソイツの口が静かに開いた

「おとーさん」

「！」

父親だつたのかよ…

そいつは実の父親があんな事をやつてのけたのに、あまつさえそれをすべて受け止めるかのような、男前の笑顔でニッと笑つた。

「ごめんね…？」でも、出来る限り邪魔にならないようにするよ…約束する。高校生になつたら。いや、中学生になつたら、一人暮らしする。おかーさんと一緒にずっと暮ら

してあげて…」

その言葉を聞いてポカンとするのは、俺だけじゃなかつた。あいつの父親もポカンと呆けた顔で、ただただニッコリ、嫌なくらい綺麗な笑みを見せる男子を、得体のしれないモノを見るような眼で見てた。

「あ、金もいらない。おかーさんをどんなモノからでも守ってくれさえすれば…俺は身を引く。」

「ヒツ…、今度は俺を殺しに来るんだろう?! そうだろう?! なあ!! お前はそういうヤツだ!! 近づくな!! 僕に触るなあ!!」

どう見たつて男子は離れてるし、触ろうともしてねえ。なのになんだコイツ?
「ごめん…」

なのに白緑色の髪を持つガキは、自分が悪者だと言わんばかりに、申し訳なさそうな顔で謝る。逆だらうが。あいつが、父親のアイツがお前に謝らなきやいけねえだらうが…それに未成年に暴力を振るつたあの父親の方が圧倒的に悪い。

ガキと女に手を出す奴らは殺してやりたくなるほどだ。それなのに、あのガキは見た

目からは到底思えねえような風格で。

アイツ本当に俺と同い年のガキか？

白緑色の、長い前髪からチラリと見える少し鋭い、けれど優しい光を宿すガーデングラスの眼は、やけに綺麗と思わせた。

男は、何がそんなに恐ろしくなつたのか、いきなり駆け出して去つて行つた。その場にのこされたガキは、フウと一息つくと、元のベンチへと腰かけた。ああ、そういえばこいつ、頭に怪我してんだつたよな。

「…昔はさ、良い人だつたんだ」

そいつは、目を伏せたままひとり言のように語りかけてきた。俺に話してほしいんじゃないってことくれえ、わかつた。いうなりや、聞いてつてくれつて言わんばかりの、でも嫌なら帰つてくれてもかまわない。そんな風に言われているような気がした。

「だけど、何がいけなかつたんだろうなあ」

口元はニッコリと笑つている。だが

「俺の個性がさ、発現してからはさあ…だんだん狂つていっちゃったんだよねえ…」

目は…とても深い悲しみで染まっていた。

「いつそのこと無個性で生まれてくれれば良かつたのかもな」

なーんてな。そう言いながら、そいつは乾いた笑いを零した

「…無責任な事いうんじやねえよ」

「…」

『無個性』に生まれてきてたら…だと? そいつらの苦しみも悲しみもあざ笑う言葉だ
な

思わずソイツのトコへいって、首元を両手でつかんで睨みつけてやった。

「ふざけんなよテメエ。個性があるだけで恵まれてんのに、個性を持つ俺たちがンな事

言つたらお前、無個性の奴らの立場がなくなるじやねえか！ザケンなよクソが！！

「…そ、うだ…な…悪かった」

「ハン。わかつたならもう二度とんなバカな事言うんじやねえよクソが死ね」

そう言つてからハツとした。やべえ。今さつきまでコイツ、実の父親にDVやられて、それを今の俺の言葉で――
なんて考えて焦った俺を見て、そいつは

「普ッ！」

気が抜けたように、笑つた。その瞬間もの凄い恥ずかしくなつて、一気に顔に熱が集結した。

「なに笑つてんだテメエ!!」

「ああ、ゴメンゴメン。俺に死ねつて言って、すぐ後にオロオロしてくれたのお前がハジメテでさ」

その言葉を聞いてギクリとした。おい、その話し方だと、お前は常日頃：周りから死

ねつて言われ続けられて…?

「なんだか、嬉しくなつちやつたんだよな。心配、してくれたんだろ?」

「あ?」

「トラウマをほじくり返したかもしけねえ。やつベ!とか思つちゃつたり?」

クシシシと笑う白緑の奴を見ながら

「てめえ、もしかして」

「ああ、うん。もうしようがないかなつて開き直つてるけど」

「開き直つてる…?」

「ていうか、面倒くさい」

「面倒くせえだと?!それで片付けんのかテメエは?!?!」

「うん」

ケロリとしたソイツの顔を見て、ハア～～～と長く溜息を吐く。当人がこうなんだ。俺がとやかく首を突つ込むところじゃねえな。

つか、こいつ…

「ケガ…」

「ああ、治る。まあ、酷かつたら治らなかつたり、一生残るような傷もできるだろうけど、

今さつきの程度なら俺の個性で防御して攻撃受けて、それから傷を手当するのに回せるけど…癒せるのは俺の傷だけで、他の人にとつちや毒になる」

どことなく寂しそうにそう呟くこいつの顔を見つめる。不思議と親近感を感じた。

「すげえな…お前」

「なにが？」

小首をかしげたそいつの髪が、風に揺れる

「普通のガキだつたら」

「…ああ。 そうだな…俺、 普通じやねえしなあ」

普通じやいられなかつたからな。だからこうなつた。

そう言いながら笑うソイツを、俺は笑えなかつた

「ああ」

「ああ」

ただ、お前も色々あつたんだなと思つても、それ以上は踏み込まないよう踏ん張るだけだ。

「あ、俺の名前さ、とが 尖水みしん 辰つていうんだ。12歳」

「マジかよ 同い年？」

下手すりや俺の年上じやねえのつて思うくれえ、精神面強くて随分大人びてて

「爆豪勝己だ」

と、自己紹介していた。

「爆豪か。よろしくな。ところでお前はこんなところで悩める迷子の子羊のような顔をして歩いてたが、一体なんで??」

思えばその言葉がキツカケだったのかもしだねえ。

「…幼馴染の話なんだがよお」

何年も誰にも言えなかつたこの、息苦しいモヤモヤした色んなものを…抱えきれなくなつたから。俺はいつになく素直に吐き出し始めた。こいつが聞き上手だつたからか、それともなにか俺と似たような雰囲気を持つからかはわからねえが。

重く積み重なつた色んなモンが、こいつに話していくことで外に吐き出されて、そんで跡形もなく消えていった。まるではじめから、んなモンなかつたかのように。

「そうかあ。お前も大変なんだな」

最後に苦笑しながら言われたその言葉に、気が付くとすでに夕飯の時間だと気が付いて。もう帰る時間だよな?と言われて正直渋つた自分が居て自分でビツクリしちまつた。おいおい…なんで渋つたよ?

まさかもつとこいつと一緒に居たいなんて…思つてるな俺

「そんな顔するなつて。ホラ、また明日同じ時間でよかつたら、会おうぜ?」

「…………」

「ばくどう？」

「……

おう

「重症かよ」

ハハハツと笑われてムツとしながら、俺は渋々

「またな」

「ああ。まつたな」

帰ることにした。

ひらひらとお気楽そうに二ヘラと笑いながら手を振る様は、やつぱ同じ年つつい実感
がわかねえ。あいつ、年齢詐欺にもほどがあんぞ：

それでも、ソイツと一緒に時はなんだか心が軽くなる。色んなモン、抱えてる自分が
じつにバカらしく思えてくる。

「また、あえつかな」

そう言えば、デクのヤツ：家来いつつてたな

「五時…」

到底、宿題ができなくて俺も現れなくって泣きべそかいてる頃だろうな

「ケツ。ザマア見ろクソナード」

これに懲りたら少し自分でも努力をはじめろ

色々デクへ心の中で悪態つきながら、デクの家のインターほんを鳴らす。すると奥の方からドタドタとやかましい音が。

「かつちやん!!」

「ウルセエ」

なんで確認もなしに俺だとわかった？

「来てくれてよかつたあ！もう、来てくれないんじやないかって心配したよ。今日のかつちゃん、追い詰められてるような顔だつたから…ちよつと心配してたんだけど：あ、でもちよこつとだけだよ？かつちゃんは強いつてわかってるけど、でも僕心配してそれで今日誘つても来てくれるかなつてしんば「長え！いいから用件言えやコラクソ死ね！」う、うんわかった。えつと…とにかく入つて」

ノンプレスでつらつら言い始めたコイツを一言でやめさせた。それからデクがスタート歩いていく。そういうばこいつを少しトレーニングさせてて思つたが、こいつ運動のセンスゼロだ。だがそれは怠けててそうなつた身体だ。もう少ししたら失敗も少なくなるだろう。

まあ、弱音はいて止めたいなんて言うだろうが、俺が付きつきりなんだ。止めさせるわけねえわな。

つーかゲロ吐くほどしごいたるわ!!

と、そんなことを考えながら奥の部屋に入つた時、パンパン!!と何かの破裂音が聞こえた。そして頭上からカラフルな四角い紙と長細い色の紙が降つて来た。

「「お誕生日おめでとう!!」」

親父とババア。おばさんとデクがそこにいて。中央にはいろんな料理を置いた机と、結構でけえケーキ。ちゃんと名前が書かれていた。

刺さつてるローソクの炎が揺れた気がした。

「こ、れ…」

驚いて反応しきれないでいると、皆がニヤニヤしながら言つてきた。いわゆる今日は俺の誕生日。すっかり忘れてた。そんでデクが言つた宿題の話は俺を誘うための口実で。

「だからあんな…」

おおよそデクらしくねえ言葉を吐きやがったのか。必死に俺に来てもらおうと?バカじやねえのコイツ。お前のその奇怪な行動のせいであちどらヒデエ思いしちまつたつづーのに。

「あいだつ?!なんでデコピン僕に?!」

?!?!

「うつせえ。それだけで済まされると思うなよクソデク。特訓のメニュー明日から10倍な」

「うえええええええ?!?!」

まあ、なんだかんだ俺もその残りの日を楽しめた。

こういうのもなんだが…そうだな……この日を清々しく終わらせられたのも、
おかげだな。

あわよくば、あいつも。

(あいつにもいつか)

平穏が訪れるることを、ローソクを消す時のたくさんの願い事の中にひとつそりと潜ませた。

とがみ
尖水の

—————

今回出てきたオリキヤラですが、仲良くしてもらつての静さんにお借りしました（どうことー？）あ、許可されます。そこんところは抜かり在りません。
以下、お借りしたオリキヤラ設定です←

尖水とがみ
辰しん

白緑の髪にガーデングラスの眼を持つ。

個性は水銀を自在に操れる。僅かになら生成する事も可能。

性格は基本、面倒くさがりで暇があれば昼寝をしてる。

でも温情深くて仲間思い。一度決めた事はどんな事があつても曲げないしやり遂げる。

好奇心は強くて面白い事も好き。常識人。

個性の水銀は液体、固体、気体まで自由に操れて、その気になれば気体にして水銀中毒を起こす事も出来る。

(尖水君は毒の耐性を持つてる)

でもその危険性で、周りからはあまり良く思われてない。

その為もし攻撃に使うとしたら、水銀の重さを利用して鈍器やムチにして戦う。

では、次があればまた、寄つてつてくださいね（＝。ω。）ノ

第4話 その瞳に映るのは

それは爆豪勝己という少年が12歳になつた時に起つた。

「…おいエンデヴアー」

「なんだ爆豪」

「なんでてめーの息子持つて来やがつた」

目の前には物凄く見慣れた赤と白の髪を持つ、父親を先ほどから睨みつけている同い年のお供がいた。

（ヒデエ目だな…。爆豪はそう思いながらため息をした。四歳の時に三回くらい隠れて見て、七歳の時に何度も無理やり会わせようと必死だつたエンデヴアーを軽く回避していた頃を思い出す。たしかあの時はここまで拗らせてはいなかつたハズ。四年間の間に何があつた。

（デクのヤツ、こんな奴をよく救えたな…）

自分は無理だと爆豪は悟つた。これは自分の手に余る。だつて自分は破壊しかできない手なのだから。可愛い子ぶつたり愛想良くなんてできない。どうやつたつて顔は

不愛想になつたり、逆に激怒して怖がらせてしまう。

相手を安心させることができた記憶なんて、ない。相手を怖がらせるか、相手を威嚇して成功してきたことだけは覚えている。というよりそう言う記憶しかない。むしろそつちが得意だ何故だ。

ヒーローになつた後でもそれはほとんど変わらなかつたように思う。

レスキュー自体の成績は昔から雄英でもほとんど上がらなかつた。それでもヒーローになつて出久の隣に立てたのは、努力を怠らなかつたから。

自分は何でもこなすことのできる天才肌という奴だと言われても、それが当たり前だと思つてた時期もあつたが、その視点をえてみたら、出久が目に入つた。

あいつは努力の天才だ；と、貶すばかりだつた出久への自分の思考が変わつた。変わつていつたのだ。

そして認めた。認める事が出来たのだ。あいつはオールマイトが選んだだけの事はある人間だつた。力を継承しただけの価値ある人間だつたのだ。力がなかつたからといつて蔑んでいい対象ではなかつた。

道端の石ころでも努力を惜しまず諦めずに希望を胸にし、突き進めば必ず突破口はあると、空に輝く一番星にだつてなれるのだと、出久を見て勝己は思つたのだ。

そんな彼を見て、彼以外に（オールマイトを除いて）ナンバーワンヒーローなど居る

はずがない。

そこまで勝己が思うようになつたほど出久は本当に理想の、それでさえ、かつてのオールマイトのような、人々を笑顔にし希望を抱かせるような大きな存在となつていつたのだつた。

まあ、そのせいで危ないヴィラン共から命を狙われていたが。

「息子を連れてくると連絡したはずだが？」

キヨトン顔でそう話すエンデヴァーを見て、腹が立つた勝己は怒鳴つた。

「許可してねーよ！ つーか、なんでてめーが俺の連絡先知つてんだよ!!」

「ヒーローとはそういうものだ」

「ちつげえだろ!! つーかんなもんにヒーローの特権使つてんじやねえよ!! 人をバカにすんのもいい加減にしやがれよ!!」

「？ バカにしてないぞ？ むしろお前のようなお子様がここまでできるとは思つてなかつた。どういつた教育をすれば、どういつた特訓をすればお前のように奇才になるのか是非とも両親と話をし！」

「とぼけた顔すんじやねえよ舐めプ野郎二号!! 誰がさせるかよ!! てーかてめえはソイツ連れてさつさと帰りやがれ!!」

そうしてまたも勃発するは爆発と衝撃波と炎。さきほどから一向に帰る気配のない

エンデヴァー親子を追い返そうとして、勝己がエンデヴァーと何故か戦っている。もちろんエンデヴァーは少し手加減していたのだが……

(先ほどより、力も瞬発力もあがつていてる……)

弱まるどころか一向に疲れも感じないのか、どんどんと勝己の威力が増していく。素早さも劣るどころかますます早くなっているのだ。

(どういうことだ……)

たんに、12歳になつてもっと筋力増幅できて、やれることが色々増えたために勝己の昔の記憶と身体が馴染んできて、前世で得た知識と経験から動きにムラがなくなつて疲れにくくなつてているだけで。

個性もだんだん勝己の“言う事”を聞くようになつたからもある。どうやらよっぽどの事でもない限り、四歳から七歳の頃に個性が暴走することはないらしい。医学的に言うなら身体がリミッターをつくつてているからだとか。

(この子供の成長の底が見えない……)

エンデヴァーは目の前の年端もいかぬ子どもを見ながら、しかし彼の繰り出す攻撃と、その子供とは思えない集中力と表情にゾクゾクしていた。こんなに戦つて一喜一憂するなどと、何年ぶりだろうか?

「隙ありい！」

「しまつ！」

考え方をして隙を作ったエンデヴァーに、今の勝己のキックは効くようで。咄嗟にガードした彼の腕が反動で上に弾かれた。

しまつたと焦りを顔に出した瞬間、勝己の顔が喜びでいっぱいになる。目は見開かれで口元は見る見るうちに上がる。ちょっと待てあれが12歳の笑顔か？いや違う絶対に違う断じて違う。

「しねええええええカスがあああ！」

なんとも興奮したその叫び声を聴いて、おいコラ死ねってなんだ死ねって？と一瞬思つたが：叫びながら彼が何の迷いもなく上半身を屈めて、蹴りかぶつたところを見て咄嗟に飛びのこうとするが、それを勝己はさせてくれない。

「！」

仕方なしにガードするしか選択肢がなかつた。

しかし爆豪勝己という少年は、戦闘においての作戦までも考慮するのが上手いらしく……ガードする前に、恐ろしいほどの速さで勝己が間合いに入り込んできた。そのまま攻撃のモーション——ヤバい。

（来る！！）

そう疑わなかつた。

「…？」

だかしかし、衝撃が来ない。

不思議に思つて目を開けると、そこには何とも言えない嬉しそうなニヤリ顔の勝己。伸ばされているのは彼の左足。その足がピタリと攻撃態勢のまま、触れるか触れないかのギリギリな距離でエンデヴァーの腹に向いたまま空中で止まつていた。

「瞑つぶつたな？」

勝己の笑顔はしてやつたり。と笑つて いる

「ナンバー^{ツー}ともあろうエンデヴァーが：俺みてえなガキの攻撃を避けきれずに、
見え、瞑つぶつたな？」

「！」

その事実を言われるまで気が付かなかつた。 そうだ。自分は今、確実に攻撃が“来る”と予測し理解し、対処しようとした。だが、しきれなかつたのだ。

そして、あろう事かプロヒーローで実力も高い己に『恐怖』を抱かせた。スピードで圧倒しながらその都度、翻弄ほんろうされた。“必ず来る攻撃”だと信じこまされ、身体を硬直させ、その勢いと彼自身の膨れ上がつた殺氣と何かの“圧力”によつて恐怖を感じてしまつた。

よつて目を瞑つぶつてしまつたのだ。

ヴィラン戦において目を瞑^{つぶ}る行為は死を意味する。

それが模擬戦や戦闘訓練だとしててもだ。相手が誰であろうと、目を瞑つてはいけない。戦うにしても逃げるにしても……

なのに。

それなのに。

今自分は……何をされた?

目を……意図的に瞑^{つぶ}らされた?

数多のヴィラン共と幾戦と戦つてきたエンデヴァーが。

あの、実力と共に皆に認められた、プロヒーローNo.2のエンデヴァーが。

「このクソガキ……」

口では悪態つきながらも、口元は嬉しそうにニヤリと笑つていて。なんとも楽しそうに口元が上がっている。

「なんだよ火親父さんよ。」

「火事親父みたく言うな。」

「じゃあ2」

「2?!」

「舐めプ野郎二号。No.2ヒーロー。面倒くせえから全部まとめてくつづけて縮めて2だ

文句あつか

「文句しがないが?!」

「うるせえ。もう決めた」

エンデヴァーは、勝己の実力をかなり認めている。

そのうえ、お気に入りもある。四歳児でヴィラン共に立ち向かい、心搖ぎ無く最後まで立ち上がつていた姿は素直に感心したし、そのとても幼稚園児とは思えない精神面の強さに惹かれた。

実を言えば何度も勝己と焦凍を会わせようと目論んでいたが、何故かことゞ」とく断られるわ、秘密裏に会わせようとすればすぐにバレて計画失敗に終わるわで結果は残念なものになつていた。

なので少し間をおいてから何の計画もなしに、12歳になつた焦凍を連れてきた。すでに自分の手には負えないほどだつたし、それにと、焦凍を見つめる。

思つていた通りだとエンデヴァーは思つた。ついさつきまで勝己に無関心だつた焦凍も先ほどの戦いで勝己に興味を持つたらしかつた。だつて目が少しだけ、ほんの少しだけマシになつた気がするから。

「お前すげえな…クソ親父を騙せるほど演技上手えんだな」

「お前それどういう意味で言つてやがるああん？」

「いや？ ただ口も顔もフザケタ不良みてえな奴なのに、戦い方とか身のこなしどと：あと戦うフォルムとでもいうか…そんなのが熟練されててすつげえキレイだなって思つた。ドブ親父とタイマン出来る奴なんて同年代でいたなんてびっくりだ」

「ああ?! そりや褒めてんのか貶してんのかどつちだ舐めプロ野郎?!」

しかし悲しいかな…己の息子が天然すぎて相手を逆に煽つてしまつてるし、なにより先ほどから親である自分をさりげなく貶してくる。

「焦凍お……」

もつと人間関係について教えるべきだったか…ガクリとエンデヴァーは項垂れた。

「そう言えば…お前にくつづいて離れなかつた緑色の子供…緑谷といつたか？ 姿が見えないが…」

「知らねえよあんな奴」

今まで聞いたこともない心底冷えきつた声が勝己の口から放たれて。一瞬二人に寒気がしたほどで。

何かが。何かが二人の間に起こつた。そしてそれは触れるべきではないとエンデヴァーは悟つた。

「そうか…」

「…もう、帰れ」

「…」

「ど」となく冷たく、しかし憂いた背中を見て何かを言いかけた焦凍を制止して。

「そうか。わかつた。邪魔したな」

「ホントにな」

「また来る」

「くんna！ヒマ人かよ!!」

「俺も来るぞ」

「お前は一層くんna舐めブ野郎がツ!!」

一喝する爆豪だつたが、いつもの霸気がない。ないが怒つてているのはたしか。

「お前：面白い奴だな」

「真顔で んな事言われても笑えねえよ!!」

「冗談じやないぞ。本気でそう思う」

「余計にたち悪いじやねーかよ!!」

—————

グズグズと、出久は泣いていた。

(かつちやん：)

彼はいつものように帰路の途中で出会った勝己に声をかけた。しかし勝己は昔のように嫌々ながらも面倒を見る彼ではなくなつてしまつていた。

他の同年代の子たちがやつてきて出久を馬鹿にする。しまいには殴りかかつてくる。弱い者いじめと言うやつだ。

昔は少しだけ存在したソレが、今は活発になつてしまつていてのには理由があつた。

爆豪勝己という少年が理由だ。今まで正義^{ヒーロー}という名を背負うに相応しい男だつた彼が、何故か12歳になつた最近、出久への態度が激変したのだ。

無個性だからといって絶対にバカにしてこなかつた彼が

力がない自分でも頑張つてヒーローを目指しているのを誰よりも知つてゐるハズのあの勝己が

同世代の子たちとつるみ、笑いながら出久を馬鹿にし貶し、そして虐めてきたのだ。最初は信じられなかつた。何かの冗談だと思つた。だがそうやつて勝己の事を信じようとする出久の心を、勝己はいとも簡単に踏みにじつてしまつた。

なんなんだ。一体どうしてしまったのだ。こんな彼らしくないではないか。

「ちく、しよう……」

無個性だと馬鹿にし始めて、挙句の果てに手を出してきた。キミはそんなダサい男じゃないだろ！そんな風に弱い者を下だと見下す人を、君は一番嫌つていただろ！

「ちくしよう！」

僕だつて。僕だつて個性さえあれば。

「一生懸命、頑張つてゐるのに……ツなのに……！人の頑張りを嗤う奴らとつるむなんて……キミらしくないじやないか……！」

そう悔しく吐き出すと、ようやつと勝己は出久を真つ直ぐ見つめた。そしてこういつたのだ

「てめえに、俺の何がわかるんだよ……ええ？俺が守つてやらねえと、何にもできねえ石つころの意氣地なしのデクがああ！」

「……ツ」

彼の顔は、恐ろしいほど無表情だつた。しかしながら出久には……彼が泣いているような錯覚がした。だから息をのんでしまつた。あまりの彼の痛々しい姿に。

（痛々しい……？）

それはおかしい。だつて、痛いのは自分の心と身体なのに。それよりも目の前の、親

友であり幼馴染の勝己を見て、自分よりもずっとずっと痛々しいと感じるだなんて。

いや…もはや親友ではない。ただの幼馴染。

いやそれよりも。

(そうか…僕だけが君の事、親友って思つてたんだね…)

勝己は違つたのだと、この時デクは思った。

(僕だけが君の事…信頼してたんだね…)

そう言えば、勝己の気持ちも何を考えていたのかも、思考した事はなかつた。『爆豪勝己ならば大丈夫』。何故かそう思つて安心していた。そんな根拠などどこにもないのに。

何かに追い詰められていたのかな。何かを気に病んでたのかもしれない。やつぱり好きでもない相手をずっと助けてきてボロボロになつて…なり続けてきたから限界を超えてしまつたのかもしれない。

(かつちやんがこうなつたのは…僕のせいかもしれない…)

彼とちゃんと向き合つてこなかつた自分が悪いのだ。

(ごめんね。かつちやん)

頼りっぱなしで、寄りかかりすぎたのだ。自分の背負うはずの重みを、勝己に丸投げてたのかもしれない。

「もう…遅いのかな……」

取り戻せないのがな……

「前みたいな…かつこいい爆豪勝己」
ボクのヒーロー

出久の脳裏には、どこまでも頼もしくって、弱さなど見たことがない、弱くあつた時など見たこともなかつた幼馴染の姿が浮かんでいた。

親から聞くところによると、どうやら赤ん坊の頃から勝己は自分の面倒をよく見ていたらしい。

「はは…僕…かつちゃんの荷物だつたんだね…」

ポツリと吐き出したその自分の言葉に、なんだかズキリと自分自身傷ついてしまった。

これからどうすればいいのだろう。どうやつて生きていけばいいのだろう…?自分なんてヒーローを目指す限り、きっと勝己の勘に障ってしまう。

邪魔になつてしまふ。荷物になつてしまふ。彼の夢を…自分が潰してしまう
「そんなのヤダ…」

またポロポロと零れ始めた涙を、乱暴に拭う。だが止まつてはくれない。

『てめえなんぞ、さつさとそちらへんのヴィランにでも捕まつちまえよ』

言われた言葉が、自然と脳裏に浮かんでくる。その言葉を聞いて重なる背中は、いつ

も何故かヴィランや問題に巻き込まれがちな出久を、ボロボロになつても何年も助け続けたカツコいい小さな背中。

『頭だけ良くつても個性がなくつちやなあ？どーしようもねえよなあ？』

風邪を引くたびに、ぶつきらぼうなしかめつ面で、看病してくれた。休んだ分のノートを写して持つて来てくれた（ノートには細かく解説されてたり、先生の説明した部分などがあつてとつてもわかりやすかつた）

『諦めちまえよ。そうしたら楽だ。』

『どーセ立ち向かう根性も個性もなーんもねえんだ』

『諦めて、警察官にでもなつたほうがいいんじやねーか』

数々のその言葉が、出久の頭の中でリピートする。その度に悔しさが、疎外感が、あふれて胸の中で暴れまわる。

身体が震えるのを必死に止めようと、自分で自分の身体を抱くように蹲うずくまつた

勝己の邪魔にだけはなりたくはない。

「でも…かつちや…僕…ゆめ、諦めるのも…ヤダよお…！」

その震える丸まつた背中に、ポンポンという小さく、優しい振動があると気が付いて、顔を上げればそこに居たのは

「どうしたどうした少年」

半分呆れたような面倒くさそうな、もう半分心配しているような声

「何をそんなに嘆いているのかね？」

ワザとらしくキザなおじさんのように喋つて首を傾げている。親身になつて事情を聞きだそうとしている。

「お兄さん…誰？」

「お兄さん…？」

何とも輝かしい、キレイな白緑の髪が風に揺れていて。ガーデングラスの眼がキラキラと夕陽の光を反射してとても幻想的だと出久は思つた。

「ぶつ…！ お前つて面白い事を言う奴だよな」

随分と大人びた彼は、幾歳か年上に見えたのでお兄さんと呼んだのだが、相手はソレを聞いてブスクス笑つてゐる。

「わりいわりい。あんまりにもツボに入つたから」

「それにして、酷いよ：初対面なのに。ボク落ち込んでる時にさ…」

「ああ悪かつたつて。ほら。ここ座れ？ 話ならいくらでも聞いてやんぜ？」

その彼のやさしさに、少しだけ甘えてみようと思つた。ズタズタのボロボロになつてしまつた自分の心の依り代を少しだけでも……そう、少しだけだ。けつして同じ過ちは繰り返さない。

(かつちやんに寄りかかって傷つけたようには、しない……)

グツと奥歯を噛みしめて嗚咽を押し殺した。

「じつは……」

声が震える。震えるけれど――……

「僕……」

誰かに聞いてほしかった。この悲しみを、苦しみを何処かに吐き出したかった。グルグルと渦巻いた胸の中の何かに、自分自身が押しつぶされて壊れて消えてしまうその前に……どこかに吐き出したかったのだ……

————————*————*————*————*————*————*————*————*

「…………やりすぎだろ爆豪」

長い長い話を長い時間話し続けた出久。泣き疲れて眠つてしまふまで彼、尖水辰とがみしん辰は根強く話を聞き続けた。結果今は自分の膝を出久に枕代わりとして貸してあげている。

出久は自分が何処をどう歩いたかわかつてなかつたらしかつた。ずっと泣きながら歩き続けて、見知らぬ公園、つまりは尖水がいつもグースカ寝ている——勝己が色々なものに押しつぶされそうになつた時に訪れる——公園に出久が入つてきてそのままずっと蹲つて泣いていた。

さすがのちょい面倒くさがりの尖水も、目の前でメソメソ泣きながら、延々とブツブツブツと自分の思考を言い続けるこの少年が哀れに思えてきて。思わず手を差し伸べていた。

自分にできる事と言えば話を聞くことくらいだが、それでスッキリできればと、辛抱強く心して聞いていたのだ（勝己の時は半分頭からすっぽり抜け落ちる。大半が悪口か暴言だからだ）

出久は身に起き続けている出来事が相当なショックだつたらしく、最初軽くパニクつていて何を話しているのか全くさっぱりわからなかつたのだが。

段々と落ち着いてきたのが幸いして、彼はキチンと話すことができるまで回復していった。きつと色々我慢し続けて呑み込んできたために、言葉がありすぎて何をどう話せばいいのかすらわからなくなつていたのだろう。

フサフサな緑色の髪を撫でる

「『お兄さん』ねえ…」

「ふつくく。とまだ静かに笑えてしまう。

「俺、お前と同じ年なんだがなあ」

「まつたく。悩みが絶えないな。お前も爆豪も。

「お兄さん…うん…悪くはないかもな」

ニマニマ笑いながら、ナデナデする手は止めずに

「なつてやるか…? "お前ら" の兄に…」

言つて自分ですぐ否定した。面白おかしく笑いながら。

「ふつくく。なーに言つてんだか。ナイナイ…そんな事…」

ピタリと先ほどまで出久の頭を撫でていた手が止まる

「俺に、兄なんて…務まるワケねーよ…罪深い俺なんか…」

ふー…と息を出して。そして吸つた。ブルリと出久がかすかに震えた。それを見計らつて揺さぶつて起こす。辺りはすでに星や月が出ていた。

「おーい。おつきろー」

「ん…」

「もうそろそろ家、帰らなきやいけなくねえ?」

「ん?」

「ぼへーとなんとも面白い寝ぼけ顔を晒している出久。みるみるうちに何が起こつた

のか、把握したらしい。あわあわと顔を真っ赤にしながらお礼と謝罪を兼ねてお辞儀をしてきた。

「いーつていーつて。気にすんな。俺は毎日ここにきてるし、よければ話でも愚痴でもいくらでも聞くぜ?」

「ほ、ホント?!」

「ホントホント!」

「で、でも…悪いですよ…」

「遠慮すんなつてー。俺なんツもすることねーから」

「…それ、笑顔でいいます?」

「…あはは。俺も暇をつぶせるし。お前はスッキリできる。お互いメリットあんじやん?」

面倒そうに、しかしこッカと笑うその笑顔に。その優しさに。もつと、もつと甘えていたくなつてしまつて。

「じ、じやあ…これからも、よろしくお願ひします…」「ウーイー。よつろしくなー」

出された手を、迷いながらも握つた。

その日、夜遅いから途中まで送つていく尖水。出久を帰らせた後、もう片方の“弟分”の処へコツソリのぞき見していった。

「よいつ」

腰にいつも下げている、蓋をした試験管みたいな長細い銀色の瓶の蓋をとる。手を上にあげると中に入っていた物質は彼の身体を持ち上げた。相手には見えない角度で二階の勝己の部屋の窓から覗き見る。

「……バカ野郎……」

泣くほど辛いなら、最初からやんな。そう言いたくなるほどに、いつもの強気の勝己はいなかつた。電気を消した部屋の隅っこに蹲つて、何をするわけもなくジツと壁を見ながら泣いている。

静かに静かに、声を上げることもなく泣いていた。顔は感情が抜け落ちたかのような無表情。

「チツ……どいつもこいつも……」

「だめだ。こいつらを一人にしちゃ駄目だ。

「結局オレかあ……」

面倒くさそうに頭を搔いた尖水は、水銀を操つて帰つていった。途中、水銀をもとの

試験管のような中にしまつた。改めて空を眺める。半月をボーツと見つめながら考えた。

「…うし。この作戦でいこう」

彼の頭の中で一瞬で構築された作戦。それを実行するのは明日。指をパキポキ鳴らす尖水は面倒そうに間延びしてから、首を鳴らした。

「あ～面倒くせえなあ」

しかしその声は怠そうでも、しつかりと目的を果たそうとしているような、力強い意志が籠つていた。

その瞳に映るのは——…

：—————
　　：　　：
　　：　　：
　　：　　：
　　：　　：
　　：　　：
　　：　　：
　　：　　：
　　：　　：
　　：　　：
　　：　　：
　　：　　：
　　：　　：
　　：　　：

　　：　　：
　　：　　：
　　：　　：

第5話 My hero

心中で：子供が泣いている。

それは幻なのか、たんに感覚的なモノなのかわからないけど
でも、たしかに

そこで泣いてるんだ――――：

――――*――*――*――*――*――*――*――*――*

「ああ、嫌な夢見たな…」

尖水は、その呑気な怠そうな声に反して、汗だくで起きた。その顔は青白くて身体は震えている。

「あれから…もう11年」

そして、そのまま起き上がりながら、頬に伝う幾筋もの零をそのままに。

「ああ…ホンツト……」

零がポタポタと床へ滴る。そうして消えていく。一つ一つゆつくりと。口元はほの

かに笑つていて

「最悪だなあ……」

しかし瞳は細く、哀しく光つていた

今日もまた、彼にとつての苦行^{にちじょう}難行が始まる。

涙をぬぐつて、鏡の前でいつもの表情の練習をしながら歯を磨く。そうして朝の5時ごろには家を出るのが日課だ。

彼はあまり家に滞在できない理由があつた。だから――

「いつてきます……」

父も母も寝ている中、誰も返事をしない冷たい空間にそう呼びかけるようにぱつりと呟く。勿論返事はない。少し寂しく思うも、ケンカなしで家を出られるのならば、寂しい思いをした方がよっぽどいい。

相手に怯えられて攻撃されて。泣きそうな顔で、恐怖した顔でこちらを見る瞳と遭遇しないだけでもかなりの儲けもの。そう自分を納得させながらドアを閉める。

「さあてと～？ 今日はどつちが相談してくる日だ？」

彼の脳裏には緑色の髪の子と、薄い金髪の子が浮かび上がっていた。口笛を吹きながら、少し楽しそうに学校への道を行く尖水。

彼の苦難でしかない毎日が少しだけ変わったのは——この二人のおかげだった。

緑谷出久と爆豪勝己。

この二人のおかげで尖水は少しだけ。

そう。ほんの少しだけ

「くくく」

楽しくなつたのだ。

あの出会いの日から三年間。彼らの話し相手となり、相談相手として居続け、たまに偶然を装つて出久を酷い虐めから助けたり、じつは裏でコツソリと出久を守つてたりする。ただ一番分かりづらい方法で。

それは勝己にも当てはまるようで。

「おい、テメーなんぞ俺が殴るよりもデク殴つた?」

「え、あ……いや、だつて」

「てめー俺がどこの高校いきてーか、わかつてるよな?俺なら手加減できつからいいんだ。おめーはできねーだろうがああ?!」

「ひつ……す、みませ」

「俺の履歴に傷つけるような真似したヤツ、ボコる。」

という理由をつけては出久を守るので、実を言えば勝己もゴロツキに狙われてたりす

る。そのゴロツキを裏の裏でボコつて勝己も守つてゐるのが尖水だと、誰も知らない。

そんなこんなでもう三年。中学生生活ともオサラバする時期がもうすぐそこまで来てる。なんだかんだ言つて育児放棄はできない親が、中学生になつても尖水を自由にはさせてくれなかつた。

ただ高校生になつたら、即刻引つ越すつもりではある。家から少し離れた場所で、一からやり直そうとも思つてゐる。

親がまた綺麗ことで育児放棄なんやかんや言いそうだ。

「育児放棄…？ そんな可愛いレベルじや…」

尖水は首を振つた。

「いや…今起こつてる事すべて：俺のせいなんだ。しかるべき罰を受けてるだけなんだ。なにも問題はない。いたつて普通だ」

そう自分に言い聞かすように咳きながら、彼は昔から通つてゐる公園へと足を運んだ



しつかりしろ、俺。今日まで色々耐えてきたじやねえか。したくもねえいじめっ子を、いかにもこいつは悪者だと誰にも思わせるような演技を三年間し続けてきた。

「現実を見ろよクソナード君。てめえにや雄英は無理だつて

「む、無理じや…ないよ。実例がなかつただけで…」

「だから無理だつてんだろが！」

「ひつ…！」

デクもあの時みたく、カタカタ震えて何も言い返せないただのノートに何かを書くヒーローオタクになつていてる。

ここ三年間、口クに話もしなかつた。あいつの大事に書いてるヒーローになるためのノートを何回か爆発したこともあつた。昔俺がやつた事を少しだけやつた。良い大人がこんなバカげた事をやるのは気が引けたが…

やらなければ、こいつは変われないと思つたからだ。前世のアイツが変わつていつたのは、俺の苛めもあつて見返したい、超えたい壁になつたからだとも言つていた。

だからまあ、奇肉の策で少しだけ焦げ目がつくように加減はした。アレはアイツの努力の結晶だかんな。俺がここで破壊していいモンじやねえ：

研究熱心で身に着けた洞察力には目を見張るものがあつた。誰にも思いつかないような方法や作戦を思いつくのにも何度も驚かされたり、そんなあいつの機転のおかげで

窮地を何度も救つてくれた。

尊敬に値する。

ただ、気になるのは前世ではあまりそう感じなかつたデクの視線が、時々怖えくれえ俺の行動を観察してゐるつて処以外は、変わつた部分はねえ。

これなら問題なく：オールマイトから個性をもらい受けられるハズ。
前と違つて、デクがヒヨロヒヨロじやなく、今も続けてるトレーニングで結構体のつくりが良いから前みてえにボロボロのズタズタには：まあるかもしけねえが、グチャにはなんねえだろ。前みてえに苦労はしねえとは思う。

後の問題は…ここ一番の難関は。

俺の演技で、あの顔あの角度で、デクに助けを求めるような、縋るような顔をすりいいだけだ。まあそこが難関なんだが…：

「ハア……」

思えば長かつた。ここまでくるのに自分の演技で何度も胸糞悪さで吐きかけた事か。

「かーつきい

「ああ？」

チツ。こいつウゼエーんだよな：前世はあんまし関わらなかつた中学ん時のクラスメイト。正直言うとこいつと関わり合いたくなかった。俺の肩に当然のごとく腕を回

しゃがる。

「慣れ慣れしんだよボケ！」

「おつと。そういうなつて。なあなあ、今日もう一回やろーぜ？緑谷いじり」
平気な顔で、さも当然のことくそんな事をいつてのけるこいつが、俺は虫唾が走るほど嫌いだ。だが、山張つてることいつとタイマン張るのは正直面倒くさかつた。しかたがねーから同点で終わらせて、こいつと俺でそこらへんを〆てた。

こつちのほうが効率が良かつたし、なによりデクをさりげなく裏で守ることもでき
た。

ただこいつの人格が歪んでやがる。

コイツ人を痛めつけるのが趣味らしい。だからデクは格好の餌食つつーウケだ。
まあ、俺がさせねーけど。誰かに殴らせるんだつたら、俺が手加減しながら殴つた方が
良い。アザも残らねーし反動は派手でまるで本気で殴つたみてえに見える。

それでも一メートル以上吹つ飛ばねえのはあいつが諦めずに努力し続けて、筋力つけ
たからだな。

「何言つてやがる。」

「ああ？」

「もう終いだ。てめーのお遊びに付き合つてられつか。俺はナンバーワンヒーローにな

るつつたろうが」

「…」

「ヒーローが、いつまでも、んな弱い者いじめすつかよ。今日でお終いだ。てめーとツルむのもな」

そいつは静かに最後まで聞いたかと思えば、裏路地に一人で来いと言つた。最後のタイマン勝負をしろとも。どうやらあの日、同点にするためにワザといくつかあいつのパンチを顔面に食らつたことに気が付いてたらしい。

おつかしいな：上手く演技できてたつて思つたんだがな。

学校の帰り道、裏路地でタイマンで戦つた。こいつの個性は知り尽くしてゐる。圧勝だつた。あいつと別れた後、そう言え巴と思ひ出した。

…そうだ。ここらへんだと…多分。

「あつた…」

あの時の、ヘドロみてえなヴィランが詰められたペットボトル。

「…」

あーあ…蹴つてこいつを出さなきやいけねーんか。

「…」

ああ、どうすつかな…マジで今この中のヴィラン…東京湾に沈めてえ：

「チツ！」

俺は思いつきソレを蹴り上げた。その拍子にペツトボトルの蓋がはじけ飛ぶ。それに詰められたヴィランが勢いよく飛び出した。

「げへへ…俺は運がいいぜえ…」

少し、口元が緩んだ

「…クソが」

いまからこいつに捕まらなきやいけねえのかと思うと、反吐が出る。反吐が出るが…デクが個性を受け取るキツカケになるイベントだ。無くすと大変な事になる。

こんな嫌な俺をあの時みたく、救つてくれよな緑谷出久

—————

勝己は、己の渾身の演技のおかげで無事に事を進められたことに心底ほつとしていた。

出久は無事、無謀でも勝己を助けるために飛び出してくれた。正直もうそんな彼を見

る事は叶わないと思つていたし。

何より今自分は、出久にとつてのただの『嫌な奴』でしかないから。その後オールマイトが出てきて二人を救つてくれた。そうして、出久に勝己が強がりを装つて威嚇し帰つていく時、そつと物陰に隠れてオールマイトが出てくるのを待つていた。

そして無事オールマイトは出久に個性を渡した。勝己はそつとその場でガツツポンズをしたのは言うまでもない。

そんなこんなで日々は過ぎ去つていく。

最高のヒーローのオールマイトから個性を受け取り、オールマイトと共に出久はトレーニングを行つていた。

勝己はそれをひつそりと影から見守りながらグツジョブ俺。と自分自身をねぎらつた。これで一応は当分の間、自分も未来にやつてくる最悪な出来事を回避するためにトレーニングができるというのだ。

そう。爆豪勝己は三年の間、思考していた。そして決めたことがあつた。

それはオールマイトもそうだが、未来で亡くすハズの英雄の先生方やクラスメイト達を救う事にした。

手始めに小学五年生の時、出来うる限りでオールマイトの負うはずだつたあの致命的

大けがを、少なからずとも最小限に止める事が出来た。

情報と経験があると、ここまで事が出来るのかと驚き固まつたが
(これだ…)

己のるべき事、いまここでこうして第二の人生を歩んでいる理由を見つけたのだつた。その日、勝己は今まで以上に打ち震えた。そして覚悟を決め、目的を見据えたのだった。

「爆豪少年」

「うお!? オールマイト?! お前なにして…で、デクは…」

「もう行つたよ。キミは帰らなくていいのかい? この所すつと彼の様子を見ているようだが…」

もう夕方だよ? そういう小さい姿のオールマイトを見ながら、ハア…と勝己は溜息をついた。

「…もう少ししたら…いく」

なんだかとても疲れたような彼の小さな背中を見ながら、オールマイトはポンと、勝己の肩を叩いた。

「君たちに何があつたのかは聞かないよ」

あんなに仲良しで、キラキラ輝いていた二人を思い出す。一人は無個性でも元気良

い、少し抜けている、しかし頑固な少年。

もう一人は、どこか大人びていて、とても心強い、真っ直ぐ正義を貫く眼光を宿していた。少し乱暴でも心優しい少年。

その凸凹でも良いコンビであろう仲良しな二人が、いつの間にかあんな風になつてしまつた。原因も理由もわからない。しかし

「爆豪少年は無意味な事はしないと、私は知つている」

前世のようなガリガリにというほどではない、痩せたナンバーワンヒーローが言う。あの日、最悪な事柄を回避できたはいいものの、オールマイトの負つた傷は深い。

「…」

「知つていてるから、大丈夫だ。きっと緑谷少年も心の奥底ではわかつてくれているさ。」

ニコリと笑う男は、力めば皆が知る、もとの姿であるオールマイトになる。活動時間は少し制限がかかっているが、前世ほど酷くはない。

「気休めは：いらねえんだよ。オールマイト」

「氣休めなんかでは」

「いいから。あんたはちゃんとデクに教えられる事しつかり教えといてくれよ。少し育てて置いたから、あんまし手間はかかるねえとは思うが：まあ、色々ガンバレや」

オールマイトの事、個性、ワン・フォー・オールの事を知つていそうな言い方だが、彼

は今更そんなことを勝己に聞くことはなかつた。

勝己がなにか重大な隠し事をしている事は、初めて会つたあの日からなんとなく感じていたのだ。それが徐々に確信に変わつてつた。その一番の出来事があの日だつた。

(まさかあの時、私を助けることになつたのが小学五年生の爆豪少年だったとは……)

もしあの時、勝己が他のプロヒーローを呼びに来なかつたら？ もしあの時勝己の出す予測とプランと、彼の助けの爆破がなかつたら敵の目を欺けられなかつた。

そして、あの攻撃をモロに食らつてしまつた。きつと致命傷になつて……考えたくもない。

ただ、怪我は負つた。一生ものだと言われた。あの激戦だ。しかたがない。負つたが命には別条はない。まあいくらか手術はしたが。

ただただ、あの日の勝己の言動がおかしかつた。小学生が激戦の中に居れば震えあがるのに、彼はまるで歴戦のプロヒーローのように冷静沈着に振る舞つた。そんなの小学生ができるはずがない。

彼が居たことで多くの者が救われた。ピンポイントでヴィランが攻撃する場所へ、彼が予測し仮定をたてて行動していたから。その彼を追つていつたヒーローたちも遭遇し、手伝う形になつた。

だからこそ、出久と勝己に何があつたかなど、どうしてコソコソして出久のトレーニ

ングを影から見て いるのかも 聴かない。いつか話して くれる時が 来れば話して くれるだろ う。

彼らに一目おいていたのはエンデヴァーとオールマイトだけでは ない。プロの間で はこの二人の子供は有名だ。事件に遭遇する確率が 高いが、それを全て 解決して いるこ とから 将来有望なヒーローとして認識されて いたのだ。

あと 疲れた時に彼らを見ると 和んで癒されて たから。

彼らがこの二人を見る回数は普通の子供よりも 多かつた。何故なら 出久がしょつ ちゅうヒーローに会いたがつたので、勝己が親の変わりに一緒に ついて行つたのだ。

その場所に詳しいとかで最善のルートを伝つて、見学と 言う形でオールマイトやエン デヴァーに裏から手を回してもらつて 色んな事務所へ出向いたから、有名だ。

そして有名と同時に人気者だ ということは本人たちはまつたく 気が付いていなかつ たりする：

————

そういうして、彼らは無事に雄英高校へと入ることができたのだつた。

「よし！」

家を出て電車に乗り、やつとのことで雄英へと来た出久は、自分のクラスとなる戸を開けた。

「かつ…かつちゃん?!」

そこに居て飯田と睨み合いをしている幼馴染の姿を見て、そう叫んでしまつたが最後、クラス全員が二人を見つめた。

「…」

（うわああああかつちゃんゴメンよお！言うつもりはなかつたんだ！まつたくもつて注目されようと叫んだわけでもなかつたんだ！）

勝己は睨むだけで、出久はワタワタおどおどビクビクしながら目を彷徨わせている。だからか、勝己が一瞬その淒みのある表情から寂しそうな表情をしたことに気が付かなかつた。

（て、あれ…？何も言つてこない？）

「…」

出久は気が付かぬまま、他の生徒がワラワラと出久へと話しかけて、それを出久が照れながら、そしておどおどしながら短く返事を返していると、だらけた声と共に怠そう

な、何とも力の抜けるような声が足元から聞こえて。

なんなんだと思ひながら振り向けば廊下にゴロンと寝袋が転がっていて、そこに人が入つていた。

「ハイ、静かになるまで八秒かかりました。時間は有限。君たちは合理性にかくね。」
しかもそんな人がクラスの担任だというのだからびっくりだ。先生となつたその人の名前は相澤消太。この人もプロヒーローらしい。目が少し血走つていて、くたびれ感がハンパない。

本当にプロヒーローなのか？と疑問に思うほどだ。

その先生がさつそくやつた事は個性把握テスト。個性を使って誰がどの個性を持つていて、どこまで扱えるか。それを見るためのもの。

体力テストでソレを測る。中学の成績はどんなものだつたか聞けばみんな個性は使用禁止でそのテストをやつていた。相澤に言わせてみれば合理的ではないが文部科学省の怠慢だからしかたがないなど。

「爆豪、ちよつとこつち来てやつてみろ。」

さつそく試験でトップだった勝己が、皆のお手本としてどういうものなのかを見せる事になつた。

(…つていつてもな…)

勝己は少し困っていた。ソフトボール投げを個性を使つてやることは問題ない。問題なのはその威力もスピードも、前世の時より記録が上回つてしまはないか。他の皆を恐縮させてしまうのではないか。
わざと手加減をするべきか、それとも全力で行つて、今の自分がどれくらいなのか確かめるか迷つていた。

「爆豪、なにやつてる」

時間がもつたいないないと、相澤が勝己へと声をかけると、勝己はどこか上の空で。ボケツと、何とも彼らしくない顔をしたものだから、それに一番驚いてしまつたのが出久で。

「かつちやん⋮⋮」

その出久の声にハツとして

「⋮相澤センセー」

クラスの誰よりも相澤を先生と呼んだことに、クラス全員が目を丸くした。このナリだから相澤を先生と呼ぶのにためらいがあつたのだ。

それなのに一番先にそう呼んだのが、クラスでももうすでに乱暴者で顔怖いと思われてた勝己で。

「なんだ」

「昔の馴染みで聞く」

その言葉にクラスの皆は驚いてしまつて。爆豪つて先生と顔なじみなのか?!やら、なんか信頼して、信頼されてるつて感じ。やら言い合つている。

「目の前にぜつて一倒さなきやいけねーヴィランが立ちふさがつた時、プロのヒーローとして何が重要だ?」

「…色々あるが、まあ最初は周りの市民の安全確保からだな。攻撃に特化したものならばヴィランに立ち向かっていく。その間にサポートが得意な奴は人命を守るのに回るな。何が重要かは、経験で見極めていくが:一番ヒーローになくてはならないものは自己犠牲だとも言わわれている。まあ、俺はその思考は少し度を超してゐるつて思うけどな」

「そうか」

「爆豪、お前なにが:「じゃあ最後に聞くけどよ」…言つてみろ」

勝己は瞳だけを相澤へと向けた。

「大切なもん守るためにには:「一体何が必要だと思う?」

その彼の静かな、しかしほとばしるオーラを感じ取り、何かを感じた相澤は
「お前、一体4歳のころから何と戦つて:」

その言葉を聞いて静かだつたクラスの皆がザワリと騒がしくなつた。

「質問に答える」

「…そうだな。大切なものを守るには、それ相応の時間が必要だな。その時間是有意義に使うには、一時たりとも無駄にはできない。」

「…時間か……」

「まあ、ヒーローそれぞれ答えはある。俺のは時間。だが：お前のは何だ爆豪？」

それはちょっとした好奇心だった。ずいぶんと大人びた少年の本質を少しでも知りたくて。だからか、勝己はその片鱗を少しだけ見せたのだった。

「俺にとつての必要なもん…」

急に憂いた瞳。凶暴性ある声が静かになつて、何故かその場に響くようで。どことなく悲しそうなのに口元は微笑していて。

「あ…」

出久には見覚えのある顔だった。何かを決意して行動に移す前の顔。その顔はまるで何か遠い記憶を思い出しているような、その思い出に少し縋っているような。誰かを記憶の中で見て いるような眼。

そんな出来事は数秒だったかもしれない。なのにまるで一時間もそうしているような錯覚がした。

「昔は力だ、知恵だ、一番になることだなんだと喚き散らかしてたかもしんねえが、今はチラリと一瞬、出久の方を見た

「え？」

「今、俺にとつて必要なもんは」

グッとボールを投げる構えをする

「守る!! ただそれだけだ!!」

そしてボールを投げ出す瞬間、「死ねえええええええ!!!」と叫びながら爆風とともに投げた。みんなポカンとしていて、出久もだ。

「…死ね?」

出久がポカンとしたまま呟く。そうして出た勝己の最大限。924メートル。前世よりも記録が伸びていた。

「…ちつと抑えてまだコレかよ…加減ムズイな…」

ポツリとそう呟いた彼の小さな声を聴いたものは、出久と相澤センセーと、心配で物陰に隠れてみていたオールマイトだけだつた。

いや、あともう一人。

「…テストで抑えたつて、本気じやねえってことかよ…爆豪。どこまでてめえは…」

赤と白の髪を持つ彼は、そつと事の事情を静かに見守りながら、爆豪勝己という少年を目に焼き付けるようにジツと見つめていた。

もつとも、そんな彼らと同じくして見守っていた者がもう一人いたが、そいつはフツ

と笑つただけで、何も言わずにそのまま眠そうな、怠そうな顔をして。白緑色の髪がサワリと風に泳ぐ。なんともなしに、あくびをしながらそいつは笑つた。

「やつとここまで来たか。緑谷出久。爆豪勝己」

.....。

その後、八種目トータル点数が最下位のものは見込みなしと判断して雄英をやめてもらうことを伝えた。それに焦ったのは出久だ。

だつて彼はまだ上手く個性を扱えていない。試験の時も、今やクラスメイトになつた麗日を助けるために飛び出して使つたら両足と右腕がぶつ壊れた。

一回しか使えない上に動けなくなってしまう。出久は使うか否か迷い続け、とうとう最後から数えて三番目の科目、ソフトボール投げで個性を使おうとした。

そう。使おうとしたのだ。

しかし個性は発動しなかつた。見れば首に巻いた細長い布をシユルリとほどき、その布がフワフワ浮き、その下の黄色いゴーグルを見た出久が何のヒーローか当てた。

見ただけで相手の個性を抹消する個性

抹消ヒーロー

相澤先生のヒーロー名は『イレイザーヘッド』マスコミにあまり顔を出さないゆえに、あまり知られていないヒーローでも、出久の情報にかかればなんてことなかつた。

「見たとこ、個性が制御できないんだろ?」

「?!」

「また行動不能になつて誰かに助けてもらうつもりだつたか?」

「僕は! そんなつもりは:!:」

「そんなつもりがなくとも、周りは、そうせざるを得なくなるんだ。一人を助けて木偶の坊になるだけだろお前は。昔は無個性だつたみたいだがな: 個性が出たからと言つて簡単になれるもんじやないんだよヒーローつてやつは。」

ギロリと、赤く光つた目が出久の目を貫いている

「縁谷出久。お前の力じやヒーローになれないよ」

その言葉を聞いて、出久はますます何かを決意した。

個性を戻してすぐ目薬を目に数滴たらしながら、相澤は見込みはない。そう考えていた。昔知り合つた時はほんの少しだけ見込みはあるかもしれないと思つてしまつた手前、今の出久の姿を見てなにをちんたらやつてるんだと思う反面あきらめもついた。

己が知る緑谷出久は、個性が発現したとともに消えて無くなつたのだと。

(あのころはガキだつたからなのか、それとも誰かが傍にいたからか。強く見えたんだがな)

キラキラと輝いていた。成長と共に消えてなくなつたんだな。と相澤は思つた。しかし、皆の予想から斜め上に行つたのは出久だつた。

今ままじや何も変わればしない。ヒーローになれやしない。変化を追い求めなきや前には進めない。

「おいおい、マジか?!」

オールマイトが陰で見守りながら驚き、呟いてしまつた

(僕は人より何倍も頑張らなきやダメなんだ!!だから全力で)

力強く。周りの空気さえも消すほどの威力で。まだコントロールできないありつけの力を、指一本先の部分に集中させて。

(今僕ができる事を!!)

思いつきり振りかぶつたその手からボールが放たれる

「スマーッシユ!!」

そうして出た記録は

「805メートル…」

前世の時よりも上がつてんじやねえかよ…と勝己も驚いていた。

クラス中が騒ぐ中、相澤に向かつて、腫れあがつて痛い人差し指をものともせずに、グッと拳をつくり

「先生…」

緑谷出久は相澤へと向き合つた

「まだ、動けます！」

ニヤリと無理やり笑つてそう告げた出久に、相澤は今までに感じた事のない衝撃を受けた。それこそ何かが彼の中で革命を起こしたみたいに。

(こいつ…！)

相澤は久々に胸の底から喜びで打ち震えていた。そしてその顔にはほのかな微笑が浮かび上がつた。

力の調整はまだできない。

行動不能になるわけにもいかない。

ならばと、考え付いたのが今の行動だ。

(最小限の負傷で最大限の力…)

何だよ少年：つ！カッコいいじやないか！

と、影から見守つているオールマイトも、打ち震えていたのだつた。

結果的に最後までポイント数が少なかつたのは出久だつたが、相澤が除籍は嘘だといつた事によつて事なきを得た。

もつとも、あれは本当だつたが相澤も出久の中に何かを感じたのだ。

そのためアレ全部は最大限を引き出すための合理的虚偽などと言つたが、後で相澤と話をしにいつたオールマイトは見抜いていた。

第6話 絆しスキル

「飯田くん？」

「指は治ったのかい？」

ひよんな事から軽い会話を交えて友達になつた飯田と出久は、途中まで一緒に帰る事になつた。

怖い人という印象しか飯田に持つていなかつた出久だが、ただ生真面目なだけだとわかるともつと気を許すようにホツと一安心しながら緩く笑っていた。そこへさら

うららか
に声をかけてきたのが

「麗日さん」

「君は無限女子！」

目の前にやつてきた人のよさそうな彼女は、改めて自己紹介をした

「麗日お茶子です！えつと、いいだてんや飯田天哉くんに…緑谷デクくん？」

「デク?!」

言い出しつぺで間違われた?!と出久は焦つた。

対するお茶子はうららかくに答える

「え？ だつて、体力テストの時に爆豪つて人が…」

(こんな時にまでかつちやんの影響力が…ッ!)

やつぱりキミは凄い人だよ！ 嫌な奴だけど!! などなど思いながら、出久は初めての女子との会話に緊張しつつも答える。自分は出久と言つて、かつちやんのあれはじつは勝己がバカにして言つてているのだと。

だが、そこでお茶子はうららかゝな空氣で、ある一言を放つた。

「でも、デクつて…『がんばれ！』って感じでなんか好きだ私！」

後にこれが、出久の中で革命を引き起こすキッカケの一部となる。

「デクです!!」

「緑谷くん?!」

顔を真っ赤にさせながら嬉しそうにニヤケる出久を見て、それでいいのかと、別称なのではなかつたのかと、飯田が聞き返すが…

「コーペルニクス的展開：ツ！」

お茶子は何の事かわからずに首を傾げる

「…ペ？」

こうして、はじめての友達にワクワクドキドキしながら出久は帰つていつた。その彼の背中をそつと見守つていた誰かに、気づきもせずに。

「なるほどな…誰かに意味を変えてもらつたつて、あいつだつたんか」

たしかにアイツならばやりかねないなど、今度は青空を仰ぎ見ながら、勝己もそつと歩き出す。出久と帰り道は同じはずだが、一緒に帰つたりはしない。

今更仲良しこよしはできないし、昔みたいにいきなり話しかけるのもどうかと思つた。そんな事をして彼が驚いて後ずさるのは、目に見えている。そんな彼を見て傷つく自分が安易に想像できてしまう。

自業自得だ。自業自得なのだ。

少し…いやかなり寂しいがしかたがない。強制的にそう思わなければ、自分が押しつぶされて消えてしまうような、変な圧迫感を感じて息苦しさが沸き上がるようで。だから。だからこれで…良い。

ふと、胸の奥がギュッと何者かに捕まれたかのような痛みを覚える。少し苦しくて立ち止まつた。

深呼吸を繰り返して、息を整える。汗が噴き出したがすぐに収まつた。自分の身体が心の疲れを感じて耐えられなくなつてSOSを出しているのは、勝己自身薄々わかつてはいたが…

見て見ぬフリをするしかなかつた。だつて、こんなこと…誰にも言えない。

こんな情けない自分など。未来の記憶に苛まれてゐるなどと。未来に残してきた出

久が、最近よくここにいる出久と重なつて、勝手に自分が苦しんでしまうなどと。

今更自分のやつた事を、あんな悲しそうな顔をさせてしまつたまま逝つた事を後悔していると：誰に話せばいい？

そんな事より、今は…今の出久の幸せをつくるために。自分が知るみんなの幸せを、掴ませるために。

今、俺にできる事を…やつしていくだけだと。勝己は思つた。

「あいつが…今あいつらしく居られんなら…それが一番良い。なあ、そだろ爆心地？」
ポツリとそう呟くのは、誰に聞くわけでもない。己に、これでよかつたのだと言い聞かせるために呟いたのだった。

胸に手を当てて。出久が見えなくなるまで眺めていようと思つた。あいつのためにした事だつた。現にあいつはあいつで居てくれる。あんな事があつたからこそ、出久は人の痛みがわかるし、人にもつと優しくしようとするだろう。

芯は、そのまま強く育つて行つてほしい。そしていつか……自分を超えて、ナンバーワンヒーローになつて皆を救つていく。そんなヒーローになつてほしい。いや、皆を守れなくつても…自分を見失わないような立派なヒーローになつて欲しい。

そのまま勝己が、物思いにふけりながら突つ立つていたからなのかはわからないが…誰かが顔の怖い自分へ声をかけてきた。

「よお！お前、爆豪つて言うんだろ？」

昔、扱いが難しく絡みづらい自分によく絡んで、自分の事を良く知つていてくれていた友人がヒヨツコリ顔を出した。

「…おめーはたしか、切島つつったか」

「おー！覚えててくれたのか！」

忘れるわけねえだろ。と内心ぼつりと呟く。

人懐っこく笑う顔。誰とでも気軽に話してくれるからこそ、色んな面で救われた。そんなこいつを、忘れる事などできなかつた。

未来のアイツは元気にしてるかなと、ふいに思つたほどだ。

「お前の髪よオ」

「…お、おう」

ギクリと、彼の肩が不安で揺れ動いたのを、勝己は静かに見つめていた。その髪を赤く染めて憧れのヒーローのようになるために、必死になつていていた背中を思い出した。だからこれは勝己のただの気まぐれだ。

かつての親友だつた彼への、お礼と謝罪をこめて。

「漢らしくて良いと思うぜ」

「え」

いきなりアイデンティティを褒められた切島は、数秒固まつた

生前言えなかつた贊美を、今ここに。前世に何度も救われたから。ほんのちょっと声をかけてくれた。クズな自分を無視しないでいてくれた。

そんなこいつへ一度だつて言つた事がなかつた褒め言葉を…。

後で後悔しないように…今になつて未来のあいつへ言わなかつた事を、礼と混ぜて謝罪の意をこめた。

ありがとうな。それから、死んじまつてごめんな。

「じゃあな」

「あ、ちよつ…」

今日誰かと絡むのはこれくらいにしないと。でないと未来が変わつてしまふかもしない。未来が変わつて、自分の知らないイレギュラーが発生したら…自分はどうしたらいいのかわからなくなるだろうから。

わかる範囲内で行動しなければ、勝己は慎重に動いていた。誰にも知られないように。今はまだひつそりと活動せねば。

でなければ、敵^{（アイツ）}にバレてしまう。バレたら一巻の終わりだ…

「…怖えヤツつて聞いてたけど」

後ろでは取り残された切島が、赤い頭を押さえて、にやけた。

「なんだ。やっぱあいつ、良いヤツじゃん！」

ぜつてー親友になつてみせつから！待つてろよ爆豪！

そんな事を切島が言いながら息巻いていたことなど、勝己は知らなかつた。

————————*————*————*————*————*————*————*————*

「先生、これ」

爆豪が、なんとなしに声をかけてきて、俺がそれに振り向くと、ポイッと何かを空中に投げ出した。反射的にそれをキヤツチすれば、ビシリと指さしながら口を開いて、まるで悪あがきする子供に言い聞かせるようにこう言つた。

「ソレ、一日一回目に垂らせば、個性使つてもしばらくは目が乾かないハズだ。よつて個性使える時間が延びる」

手元を見れば、先ほど状況反射で無意識に掴んだものは、どうやら目薬らしい。

「こんなのに気を使わなくたつて、俺は……」

俺専用の特注目薬あるから余計なお世話だ。そう言おうとすれば俺の言葉を爆豪が遮つた。てんで話になんねえな。と言いながら。

「あんたが持つてる専用の目薬はソレ以下だ。いいか先生、ソレは俺が長年考えてきた

方法、制作調合を、雄英のサポート科複数とツルんで編み出した上にプロのヒーローたちにちょっと実験台になつてもらつた（誰とは言わない）そのうえで完成した奴だ。」
 お前：ヒーロー科でプライドやけに高いから絶対他の科には興味示さないと思つたらさつそく絡んでたのか。しかも秘密裏にコレをわざわざ俺のために？わざわざ俺のために？

大事だから二度、心の中で言つてみた。

あの爆豪が俺に気を使つた少しの感動と、先ほどの彼の発言により誰の目が犠牲になつたか垣間見えて。呆れ顔になつてしまつた俺を誰が咎めるだろう。

「お前：エンデヴァーアーさんとオールマイトさん実験台にしたのか」

遠慮なくあの二人を利用しようとするのは爆豪くらいのもので、他人の頼み事は冷たくあしらひながら蹴るエンデヴァーアーさんと、プライベートの頼み事は丁重にお断りするようなオールマイトさんが爆豪と緑谷だけには異様に甘いことは知つてる。

だからあの二人なら、爆豪の無理で危険で無謀な頼み事も聞いてしまう事は目に見てわかっている。プロのヒーローを実験台にする爆豪も爆豪だが、それを了承したプロのヒーローもヒーローだ。

だとしても、まさかな…と思う自分の考えを、目の前の生徒が押し黙つた事により、的中かよと溜息がもれる。あの二人が爆豪の頼み事で地面でのた打ち回つてた場面がや

けに鮮明にはつきり思い浮かべられるくらいだ。

思わず笑ってしまいそうな顔を引き締めた。

「…」

「そつと顔逸らすなよ…」

やつぱり図星かよ。今度はため息が出てきた。
こいつは良くも悪くも良く見てる。そう思ったのは初めてじゃない。こいつとの
付き合いは爆豪や緑谷が四歳の頃からだつた。その頃から爆豪勝己という子供は、周り
を良く見るタイプの少年だつた。

まるで、周囲に起ころるすべての情報を逃さないとでも言うかのように。だから彼のや
る事なす事すべてが何かに繋がつていると、後々じわりじわりと感じられる。

今だつてそうだ。この爆豪思案の元で雄英の生徒でつくられた目薬も、きつと役に立
つはずだ。

“雄英生徒がつくつた” という事にかんしても、きつと何か意味があるのだろう。

「なあ、爆豪」

「？」

問題はそこじゃない。こいつの事は自分でも信じられないくらい信頼しているのは
自覚してる。自覚しているからこそ、こういう『おせつかい』を焼き始めた爆豪を、み

すみす野放しにしてはいけないと、俺の勘が働いた。

「一体今度は何を知つて、『準備』してるんだ?」

「!」

思つた通りだ。俺の言葉に反応して、目の前の爆豪の瞳が見開かれて、そのまま固まつた。

こいつは昔からこうだつた。どこでどんな手を使つて情報を仕入れてくるのかまったくわからないが、爆豪は自分の周りが『危機』に陥ると知つた時、それを打開するための準備をする傾向がある。

「昔から、お前はどこから情報をとつてくるんだ? 何と戦つてるんだ? お前の行動、言動全部、年齢にそぐわない時がある。: お前は一体何者なんだ?」

今みたいに俺にこんな薬を渡してくるのも、きっとその危機を回避するのではなく、危機になる人間を強化し自分で突破できるようにそつと背中を押すためだろう。

それは暗黙にこれから先、俺に何かが起きると言つて いるようなものもある。

知つて いる。前から知つて いるから、どう動くか、動けるのか考えて行動するお前が、お前の持つその年齢と合わないんだ。どう考へても三十路は超えてるような繊細な作戦と思考の元で行われる行動だ。

俺の問いを聴いた爆豪は、しばし視線を彷徨わせていたが、後になにかに気が付いて

フツと顔に影を落とした。

「それ、は…まだ」

「言えないか」

「…」

だが、年相応に落ち込むときもあるし、それなりに笑うことが出来るのだと知つている。だからこそ時々見せる“プロのヒーロー”的顔に、タジタジになつてしまふのだ。
…注意しておくか。こいつの気遣いも素直に受け取ろう。昔、一度だけこいつの助言を聴かずに動いて大怪我したバカな先輩もいるしな。

「わかつたよ。お前の好意は素直に受け取る。俺はオールマイトさんじやないからね」

そう言いながらフツと笑えば、爆豪はホツと胸をなでおろしたかのような顔をした。
おいおい。そこまで心配するような事が起きるのか？…今からトレーニング三倍にして少し鈍ってる身体を鍛え直すか。

「…」

「授業はじめるぞ。さつさと入れ」

「…おう」

本当に。4歳の頃から一体何と戦つてゐんだろうな。お前。
(いつか、話せる時が来たら)

お前の中でまだ燻つてゐる何かに、お前自身終止符を打つその時まで。
「待つてよ。いつまでも」

「……」

爆豪は俺の言葉には何も言わなかつた。代わりにペコリと軽くお辞儀をした。それだけで了承したとわかるくらいには、信頼されると見ていいんだよな？

待つてるからな。だから

「あんま、抱え込み過ぎるなよ。爆豪」

「……！」

「何かあれば、俺にも相談しろ。いいな」

「……！」

こりやする気はあんまり無いと捉えて差し違いないな。短い返事の後、そのままサツと教室の中へと吸い込まれるように入つていつた爆豪の背中を見つめながら、なぜかクツクツと笑いが零れた俺はというと

(さあて、今日も始めますかね)

怠い感じに教室のドアを開けて入つて、皆を見わたしながら

「授業はじめんぞー。合理性に欠くからさつさと黙つて席つけー」

重たい瞼をそのまんまに、授業をはじめた。

————

わかっている。自分の心が悲鳴を上げていることなど。

わかっている。自分がもう、色々な重圧に耐えきれてない事を。

なにより：

「癒しが足りねえんだよっつ!!」

バン!!と机を殴った爆豪を、皆は怪奇を見るような眼で見ていた。ナニアレ怖い。と。出久もあんな取り乱した勝己を見るのは初めてだつたので引いていたし、何よりも話しかける勇気が今の彼にはなかつた。

出久の怯えたような眼を見るたび勝手に傷ついているのは勝己だ。そして癒しが欲しいと考えてついに声に出してしまつた己自身が、たまらなく今すぐに殺してやりたかつた。

只今、勝己は恥ずかしさで悶えている。プルプルと震えてジツと我慢している。なんでも声なんか出てしまつたんだと、悶々と考えていると、肩に誰かがトントンと叩いてきたのがわかつた。

顔を上げるとそこには―――：

「よつ」

その特殊な目の色と髪の色…。そしてなにより怠そうな、眠そうな顔と声。そう。そこに居たのは―――…

「尖水／さん?!」

思わず出久も声に出していた。

「尖水さん、どうして…」

「お前なんで…?」

二人とも同じような事を聞いて来て、尖水はクスクスと笑った。

「こんなトコに居るのかつて？おいおい、数日たつて俺が居たことに気が付いてなかつたのかよ？アハハ！ひつでえ」

クルリと回つて、制服を見ろと自らのクイクイ引っ張る尖水。

「同じ高校だつたんか…」

何処かほつと安心する珍しい爆豪を見ながら、大騒ぎをしたのは、クラスの皆も予想

していなかつた出久のほうで。

「ええ?! 尖水さんって年上じやなかつたんですか?!」

思いのほか声を張り上げた出久を見て、尖水は怠そうな声を出す

「ええ？俺、そんな老けてるような顔かね？」

怠そうに、しかしアハハと笑いながらそう尋ねる尖水。ワザと、口調を紳士のおじさんっぽく言つた。

「つーか年上になんて、どう見ても思えないだろ。バーカ」

勝己は自然と悪態をついたが、心強い味方で馴染みある尖水の登場で、その顔は明らかに緩められ、ヒヒッと笑つてさえ居て。

あまりにも楽しそうに笑うから出久や、クラスの皆は目をかつ開いて固まるほどで。え、こんな風にかつちやんつて笑うの？と出久さえ知らなかつた勝己の素直100%の笑顔を間直で見てしまつたクラスの皆は驚きに言葉さえ喉に詰まつていた。

（そうだよかつちやんつて、凄んでさえいなければイケメンで結構かわいいんだよ！凄んでさえいなければ！）

出久は混乱した頭でそんな事を思いつつ、笑う勝己から目が離せずにいる。後で絶対ノートに書こう。ていうか写真撮つておこうヨシこれをノートにはりつけよう。ついでとか宝物にもう一枚撮つてしまおうヨシそうしよう。

言いながら無音でシャツジャーを数回押しまくつた出久はそつとガツツポーズをした。（なんなん爆豪くん?!ギヤップ凄ない？今キユートな天使みたいだけどさつきは凄く怖かつた！）

お茶子は声を出さず、しかし結構赤面しながら、先ほどの勝己の凄みのある睨みを思
い出しながら身震いしたが、目の前の光景にすぐに目をキラキラさせた。

(あいつのあんな安心した顔…見た事ねえ…それほど、爆豪にとつて尖水つていう奴が、
頼りになる、安心できる存在つつーワケか…)

焦凍も驚きながらジツと勝己を見つめる

(なんか…)

どことなく、寂しい気持ちと違う気持ちが沸々と湧き出てきて止められなかつた。結
果声に出してしまつたのだつた。

「悔しい／な」

その声にハツと気が付き振り向けば、出久。出久も焦凍のほうを驚きの顔で見つめて
いた。

「と、轟くん…だつたよね…あの、かつちちゃんとキミつてどういう…?」
ゴクリと生唾を呑み込みながら、声を震わせて出久がおずおず尋ねる。

「緑谷つつてたよな、たしか。お前こそ爆豪どんなん関係なんだ?かつちやんなんて
言つてやがるし…」

「え、だつてかつちやんとは、その…お、幼馴染で…」

兄弟同然に育つた。とは言えなかつた。勝己の苦労も、彼の苦しみも悲しみも、何一

つ彼の事を分かろうともしないで、そんな事が言えるハズもない。

彼が、ああいう風にひん曲がつてしまつたのは、きっと自分のせいだ。自分の責任だ。

そう思つてゐる出久は、だんだん顔が曇つていつた。

「ただ…それだけだよ」

兄のように慕つてた。尊敬してた。自分の中の、オールマイトの次に来るヒーローだとも思つていた。

そのヒーローを、出久は自分の手で踏みにじつてしまつたと思つていた。あの時のようにはもう戻れないと、笑い合えないと。

しかし、何故か勝己のあの笑顔を見ると、諦めよりも、悲しみよりも、悔しさが勝つてしまつた。それは目の前に居る焦凍も同じのようで

「き、君は？ かつちやんの、なに？」

だからこそ気になつてしまふのだ。そんな気持ちになるほどに、彼は自分と同じように勝己に依存していると思つた。だから勇氣をもつて聞いた。

「…なんだろうな。俺もよくわかつてねえ。たしか1・2の時にクソ親父が妙に会わせたがつて、あいつは妙に会いたくないつて突っぱねてたらしくつて。」

焦凍は昔を思い出しながら話す。心なしか少しだけ楽しそうなのは、出久の気のせいではない。

「隙見て俺をあいつに紹介したんだが：面白いヤツだつて思つた。クソ親父を言い負かしたり、親父と互角に張り合えた同年齢のヤツなんて、初めて見たから」
「え、たしか轟君のお父さんつて…」

「エンデヴァー」

それを聞くが早く、出久の脳裏には幾つものエンデヴァーの情報が浮かんでは消えていく。

「や、やつぱり?!でも…かつちゃんナンバーツーのヒーローと互角に張り合えたの?!しかも…12の時すでに…?でも待つてそれじゃあやつぱりあの時言つてたひとり言は本当でかつちゃん力セーブしてたつて事なの?!あのかつちゃんのことだから無駄なことは一切しないと思うからきつと何か目的があつて――」

「うつせえよクソナード。」

そう言い放つと、大人しく自分の席についてしまつたのだつた。

その後すぐに、焦凍が勝己の座つている席まで移動して、何か聞こうとしたのだつたが、オールマイトが颯爽と現れてしまつたので彼はしぶしぶ諦めて席に座るしかなくなつた。

(これでいい…)

勝己は気づいていた。焦凍が何か言いたげだつたのを。しかしこれ以上イレギュラーが起きてはいけないと、軌道修正しようとした。そして、成功したのだつた。

(…つか、やっぱオールマイトかつけよな……)

午後のオールマイトの授業は戦闘訓練だと告げられた。各々がコスチュームに身を包み現れて、いざどんな訓練か説明を聞いてチーム分けとなつた。

すべて勝己が知る通りだつた。また勝己は同じチームメイトとやるし、出久もそうだ。そして、対戦する相手も同じだつた。

出久チーム VS 勝己チーム

一瞬、出久が萎縮したのを、勝己はギロリと睨むことで彼の底に秘めている対抗心を燻つた。そうして出久は勝己を睨み返したのだつた。

(そうだ。それで、いい)

思わずニヤリと笑つてしまつた勝己

(それでこそ、俺が認めた緑谷出久だ。俺が知る、俺の hero)

嬉しくなつてしまつた。確実に出久が、自分の知る未来の出久になつてきていたから。だからおもわず笑つてしまつた。すぐさま自分の配置に行つた勝己は知らない。

出久が、勝己のニヤリ嬉しそうな顔を見たあの後、数秒赤面して固まつていた事実は、チームメイトのお茶子しか知らなかつたりする。

(あんな顔されたら、私だつて固まつてまうよ!)

ちやつかりお茶子も見てしまつていたのだつた。

そして、勝己が歩いていくその道すがらに、いつの間にか尖水がいて。思わずビクツと驚いて身体が一瞬だけ固まつた。

それを見て少し笑いながら尖水は、困つたように急く勝己へと言葉をかける。

「爆豪、お前さあ、皆を紛そうとしないでくんねえか?」

「はあ? 何いきなり意味わからんねえ事いってやがんだ尖水?」

「なに、お前気が付いてねーの? うーわー! 皆さまご執心様。安らかに眠つてください。

南無阿弥陀仏」

なむなむ……と手を合わせながら擦る尖水の手を無理やり払い除けて、睨む

「おい、勝手に誰かを殺すな。つーかお前の言う皆つて誰だ?」

その言葉に尖水は何かを察した。と同時に怠い顔をした。

「……あー……もういい。からかうのも面倒くさくなつてきた。」

自分がいかに周りの皆を垂らし込んでいるのか。想像もしていらないのだろう勝己本人に説明するのがとてつもなく面倒になつた尖水は、その一切を受け流すことにして、それ以上彼をからかう事はしなかつた。

「じゃーなー」

「あ、おい尖水！」

腕を上げ手を怠くゆつくり振る。その動作は本当にやる気あるのかと、聞きたくなるくらいに誰がどう見ても怠そうだつた。

「お互い、ほどほどに頑張ろうな！」

有無を言わせずそのまま退場していく彼の背中を見つめて、勝己もそのまま前へと歩き出す。

「クソ…なんだつたんだ。」

皆を絆すつてなんだ。俺は誰からも嫌われる存在を演じてんだぞ。唯一友だと認識させなきやいけねえのは切島だ。それ以上はやらない。そう決めてんだ。
(じやなきや未来が変わつちまう恐れがある)

なのに尖水のあの言葉は一体なんなんだと、勝己は本気で首を傾げながら頭の上にハテナマークを浮かべていた。

「…波乱万丈な人生だよなー。メンドクサイ性格も合わせてすべてが怠いほうへ向かつてんぞー。ばくごー！」

やる気のない声でひとり言を零すのは尖水。

「いつか、緑谷と轟の嫉妬が爆発しないように祈つててやるよー」

ケラケラ笑つて、チラリとモニターを見た。そこには出久の覚悟した顔。そして尖水

は今度は焦凍のほうを見た。

「しかも本人たちが嫉妬してると理解してねーのが一番ウケるんですがねー」
ああダメだ。気を許したら爆笑する。そう思いながらクツクツクと彼は一人静かに
笑つた。

第7話 大怪我を阻止！

静かだつた。周りは一切の音がしなかつた。ただただ、僕たちの息使いと足音がその場に反響して鳴り響くだけ。ゴクリと生唾を呑み込むけど、緊張でカラカラに渴いてしまつた喉は一向に潤つてはくれない。

気配を感じ取れるように静かにゆっくりと足を進めていく。

（なんせ相手はあのかつちやんだ）

対戦、奇襲に追撃と、かつちやんの戦闘スキルは幅広く隙が無い。相手の癖を瞬時に見分けてどう戦えば相手が不利になるのか、どう追い込むのか作戦を一気に立てて突つ走る。

それこそまるで、激戦を何度も潜り抜けてきたプロのヒーローみたいだ。

あと要注意なのが、かつちやんの作戦は相手を追い込むか、捕獲するか、撃退するかによつて変わつてくる。

頭の回転が速くてその時の状況判断がほとんど勘なんじやないかつて思うほど。でも綿密で完璧なんだ。勘じやない。あれは経験から成せる代物だつて素人の僕でもわかる。

なんでそんな経験なんて持つてゐんだって凄く疑問に思うけど……あのかつちやんだ。
なんでもありが普通な気がする。

「麗日さん、作戦は言つた通りプランAでいくから
「わかった。」

「もしもの事があつたらBで。じゃ、こらへんでそろそろ会話はジエスチャーだけに
しよう……」

「うん。相手に知られたら作戦も水の泡だしね！頑張ろうねデクくん！」

少しだけでも隙があつたつていいのに……それをかつちやんは感じさせない。どんな
状況に追い込まれても、相手を威嚇し続けて、つねに相手の一歩先の行動を予測し動く。
並大抵の人間技じやない。

でも、僕はずつとかつちやんを見てきたんだ。だから知つてる。きっと他のどんな誰
よりも……

（風……？）

突然、建物の中から生暖かいそよ風が僕の方へ流れてきた。こんな建物の中なのに風
なんか流れてくるのか？あちこち穴が開いているし……その可能性はある。けど……
(いや、違う！風が生暖かい……という事は、これ空気中でよくかつちやんが使う……！)
他の人だつたらきっと見逃してたと思う。けど僕は違う。違うぞかつちやん！

「つらあ！」

「！」

「え?! 爆豪くん?!」

やつぱりかつちゃんは頭上から飛んで突っ込んできた。爆風を出さずここぞという時に宙に浮くように静かに壁を蹴つて移動してた。

生暖かい風は、君が静かに移動するときに使う超ミニマムな爆発の余波のせい。

「奇襲だ…」

「え?」

彼は奇襲するとき大抵ボクが（勝手に）解き明かした今の技を使用して、音速で相手へと突つ切る。

やつぱり合つてた！

「麗日さん下がつて！このままプランAを続けて！」

「う、うん…わかった！」

でも何でだろう…今日に限つて、らしくないミスを君は犯した。突っ込んで即爆破のかつちやんが――なぜか僕へツッこんでくるとき一瞬、殺氣を飛ばして声まで出してきた。

まるで自分が来たから要注意しろつて言わんばかりに。でも、まさかね。考えすぎだ

よね。だつて相手はあのかつちやんだし。募った僕への怒りで口が滑つちやつたんだろうなあ…かつちやんらしいや。

見れば彼はもう次の攻撃のモーションへ移行していた。

(もう避け切る有余はない。なら防御!)

顔の前に両腕をクロスして防御の体制をとつたと同時に、凄い爆音と爆発が僕を襲つた。

「グウッ！」

「デクくん…！」

「大丈夫。そんなにダメージ入つてないから…」

「…」

手で砂埃を拭い去つたかつちやんは、真剣な面持ちでこちらを睨んでいる。

「こおらうデク。受けて無事でいるんじやねえよ…」

かつちやんと本気でぶつかる時が来た!!

「かつちやんが敵なら…まず僕を殴りに来ると思った！」

かつちやんに僕を見てもらうチャンスだ…今の、僕を！

拳に力が入る。今の僕を見てもらうためには、まだモノにできないオールマイトの個性^{ちから}は使わない。使つたらダメだ。ただでさえこっちがバキバキになつてしまふし、あ

んなの人に向けて撃つたら死んじやう。

なら：使わず君に、勝つ!!

——*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*

おかしい。俺は何処か違和感を覚えていた。

(最初の頃と同じで、俺を背負い投げしたまでは前と同じだった)

思い出せ！何かが前と違つてやがる。

(なんだ…？何が違う？)

ああ、そうか。と思いました。

(背負い投げしてからの、セリフがねえんだ)

前世で俺を精神的に追い込んだ、あのセリフがまだ…

(自分の戦い方のスタイルを俺に見てほしいのか…それとも、どれくらい強くなつたか
見て欲しいのか…まあ、どつちにしたつて)

攻撃するわな！

「デクのくせして、俺と対等に張り合おうとしてんじやねー！」

言いながら爆破しようと腕を振り上げた。その時、ああ：しまつたと思つた。

なぜならまた、デクが俺の腕をつかみ上げてまたも背負い投げをしたからだ。鈍い痛

みが背中を襲う。この技は後にお前が磨きあげて十八番の内の一になつたほどもんな。ヒーローの本質が出始めたテメエが使わないわけがねえ。

「今のでわかつただろ：かつちやん」

静かな建物の中、デクの声が良く響いた

「君は大抵、最初、右の大振りなんだ：」

デクの荒い息遣いが聞こえる。震えている。声も身体も。だが目は真っ直ぐこっちを睨んでやがる。伝えようとしてきやがる。あの頃俺が思つてもなかつたもんを。

前じやわかんななかつたからあんな悲惨な結果に終わつた。テメエに個性無理やり使わせて腕をバキバキにしちまつた。

「どれだけ見てきたと思つてる？」

今でも昨日のように鮮明に覚えてる。内側から爆発したかのよう、ボロボロになつて赤黒く変色した腕の状態。

前ほどではなく、かといつてこの出来事を避けて通れねエのはたしかだ。今日の失敗があつて、あいつはまた一步前進する。

失敗を重ねる事で見えてくるモンもあるつつー事だ。

「凄いと思つたヒーローの分析は…全部ノートにまとめてあるんだ…」

ああ、よかつた。そう思つちまつたのは内緒だ。そうだ。このセリフだよ俺が待ち望

んでたのは。ヒーロー・デクの成長の一歩一歩を間直で見ていることに打ち震える自分が居て、なんか…みつともなかつた。

だが、それもまた良いと思う。

ああ…やつぱり

「君が爆破して捨てたノートに…」

書いて、あつたんだな。俺の事が。

わかっちゃいたんだ。だがああするしかなかつた。お前が人の痛みや苦しみから目を背けないように。

身に染みてるからこそ、お前は成長して、大人になつて。No.1ヒーローになつてもどの付くお人よしになつた。人の痛みがわかる奴だつたからこそ、お前は本当の意味で人を救う事ができた。

あのノート、たしか13番目だつたか…未来でもあいつはまだヒーローたちの事をノートにちまちま書いていたな。

死ぬ三日前、あいつのノートのNo.は10000単位にまでなつていた。しかも丁寧に俺の事はちまちま更新してやがつたから気味悪がつたっけか。

俺の最後まで、氣色悪いデクの癖が治る事はなかつたな。

ノートの中身については何も言わずに、デクはグツと拳を構えたまま睨むが俺にはわ

かる。俺がこんなでも、昔から俺はお前の中じや、身近なヒーローだったと。

泣き出しそうな潤んだ瞳は、真っ直ぐ俺を射抜いていて。いつもの弱気なデクからは

考えられないほどの気迫と、瞳の奥に宿つた強い強い光。

「いつまでも…雑魚で出来損ないの木偶デクじやないぞ…！」

認めてもらいてえのか？俺に。

「かつちやん、僕は…！」

笑わせてくれるぜ。俺はもう…とつくの昔に…それこそ生まれてくる前に。

「頑張れって感じのデクだ!!」

ああそうだ。その言葉セリフが聞きたかったんだ。思わずニヤケそうになる自分の表情を

必死にこらえて。悔しそうに睨むだけにする。

まつたくお前は。お前つて奴は

「デエク！」

「つ！」

威嚇に掌にポンポンと小さな爆破を起こす

「ビビりながらよお…そういうところが…」

グツと何かを見定めようと、俺を睨んでくる。そうだ。お前の持つ今の力を、俺に見せてみる。

「ムカつくなあ！（誇りに思う）」

震えながら、怖がりながらも、目の前の敵対するヤツを睨んで逃げずに立ち向かおうとする。困つて居た奴が居たら迷わず手を差し伸べようとする。

ヒーローの本質を元々持つてて、キッカケでもつと成長したこいつだから：最初から何も持つてなかつたから。持つた時、凄まじい力となつて、脅威となつて敵を圧倒できる。だからデク、お前は

（誇つていいんだぜ。お前の弱みでもあつて、強さでもある “ヒーローの本質”）
だが調子に乗らねえように釘刺しとかなきやなあ！

「前みてえにボロボロになられちや意味がねえ！」

「…え？」

「歯ア食いしばれ！」

そう言つた途端に、デクが回避するのが見えた。見えてから敢えて——取り付けられた装備の引き金を引く。

『爆豪少年！それはいくらなんでもやりす——』

「黙つとれやオールマイトお！失格にならねえ程度に火力を抑えたらああ！」

閃光が弾けたと同時に、そこら一帯を巻き込んで、大規模な爆発音と共に爆風が衝撃波となつて辺りを駆け巡つた。

建物はあまり壊れていなかつたが、あの規模だ。ギシギシと鳴り始めてやがる。ちつと規模がでかくなつたが、まあ良い。

デクが慌てふためいて作戦を考えようと身を隠したのも、爆風の中確認した。背中をやられてたつつい事は、機転を生かして咄嗟にダメージを受けることが出来そうな筋肉がついている背中を犠牲にしたか。

状況判断はまずまずだな。なるほど…こいつは前と違つて簡単にはいかなさそうだ。だが、それでも良い！こいつと真正面向き合つて戦つてる。互いに譲れないものを天秤にかけながら。必死に、無我夢中で。

そうだ。俺を見ろ。

お前にとつちやあ最悪なシナリオだ。そん中で戦闘センスとスキルを磨け！お前は…お前らは、まだまだ伸びしろがある奴らなんだからよお！

「進化を見せろや緑谷出久！」

「…っ？」

気分が高まつて、ついこいつを本名で呼んだ瞬間にデクが息を呑んだのが分かつた。

ああ、あそこか。なるほどな。

「咄嗟でも見つかりにくいそこを選ぶなんてな」

「つ！」

「てめーにしては上出来だつたのになあ！俺に名前呼ばれたぐれえで何動搖しとんじやデえク!!」

そこをニユツと極悪な笑顔をしながら爆発で近づくと、デクはバツと物陰から出てきて前面に手を滅茶苦茶に振り上げて大声で叫んだ。

「ちょっと待つてかつちやん今のはズルい!!」

心なしか顔が真っ赤だ。……なんでんな真っ赤なんだ？

……風邪か？風邪にはナシと、ヨーグルトが効き目がある……味はモモかそのまんまか……じゃなくつて！！戦いに集中しろ爆豪勝己！

「…ちつ！」

なに普通にアイツの面倒見ようとしてやがるんだ俺？バカか。これが長年あいつの面倒みてきた癖か。

うつわ。自分で気が付いて引いたわ。鳥肌立つたわ。自分の顔面を爆破してえわ。
「食らいやがれ！」

「そう何度も食らうわけ……」

デクが一步大幅に前進した。

「……ないだろ！」

ジャンプして、俺の頭上をクルリと回転しながら攻撃をかわす。

「…へえ」

どうやら今のお前は、前より感情のコントロールや頭の回転が速く、機転も良い。作戦も思いつくのが前より早え。ガキン時に経験した数多の事が、今のお前を形作つていやがるのか。

「面白え…」

「…」

今のお前がどんぐれえ出来るんか、試してやるよ！

「どっからでも、かかつてきやがれデク!!」

「そのつもりだよ！かつちやん!!」

——*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*—*

「デクくんメツチャ生き生きしとるけど、作戦の合図…そろそろ出してほしいなあ…」
お茶子はただ今、敵陣に潜入してひつそりと物陰に隠れて事の成り行きを見守つていた。彼らの作戦はいたつてシンプル。

勝己が出久に夢中になつて攻撃していくだろう事が予測できるので、その間にお茶子

が敵陣まで攻め入つて、合図ができるまでそこで待機する。チャンスがあればすぐさま場のすべてを利用して偽爆弾に触れればいい。

しかしこの作戦の時からお茶子は言い難い突つかかりを覚えていた

「たしかに爆豪くん、デクくんに向かつていったのはいいけど……」

うーんと、お茶子は静かに唸る。そこで作戦の半分は成功なのだ。勝己が出久へ向かつたことで、彼の意識は出久に向けられる。という事は応戦の間、お茶子は自由に動けるという事。しかし：

「これじゃ爆豪くん、デクくん以外に興味ない事にならん……？」

そうなのである。先ほどの出久の作戦と良い、出久の予想通りに真っ直ぐ出久だけを狙ってきた勝己と良い、どうやら勝己は出久をぶん殴る事以外考えていなさそうなのだ。

勝己が勝手に前へ出たことにより、相手チームの相方の飯田はその場で待機するだろう。しかしこれで、かなり防御が手薄になつた事は明白だ。

自分のチームメイトと力を合わせない時点での防御も何もかも手薄なのだが。しかし、実のところそうではなかつたりする。何故なら勝己は――

『飯田！準備は良いかあ！』

「待つていたぞ、爆豪くん！」

「へ?! ば、爆豪くんが飯田くんと…連絡とつたよデクくん!」

『ええ?!』

元から、出久とお茶子と飯田をこの戦闘訓練でしごくと決めていたからだ。勝己の行動や思考を予測し、ほとんど当たつた事から出久は凄いと言える。しかし、もつと上を行つたのは勝己だつた。

勝己は、出久が己の思考や行動を予測して動くことを予測していた：つまり、出久の思考や行動を読んでいたという事だ。読んでいて、あえて出久の予想通りに動き、そしてその中で自分に有利に動けるように策略していたという事。

意外や意外。あの勝己がだ。出久はそんな勝己を見て信じられずに大声を出しながら彼の方へと反撃したらしい。何かと何かがぶつかる音が聞こえる。一緒に怒号も飛びわ飛ぶ。

『かっちりんらしくないよそんなの?!』

『俺らしいってなんだええ?!』

『頭良すぎにもほどがあるだろ?! ちよつとは隙を見せてよ!』

『甘えんじやねえ! 隙がねえ相手だつたら隙を作らせればいい事じやねえか!』

『ごもつともな意見だ。と全員が思つた。

『ただけどそうじやない!』

『どういう意味だクソナード?!』

『だから、君の思考回路は異常だつていつてるんだよ！どんな頭してんのさ？！それに
ちよつとは僕が作戦考える時間くれたつていいじゃないか！これじや公開処刑だよ！』
『うつせえ！どうにかしろやクソが死ねええ！』

『超、理不尽!!!』

様々な破壊音が通信機から聞こえてくる。そしてその中で息も絶え絶えになつても
おかしくないハズの二人が、ジャンプや攻撃、走つたりを繰り返しても怒鳴り合つてい
る。

どんな肺持つてるんだお前ら…と、オールマイトをはじめ、その戦闘を液晶画面越し
に見守つていたクラス全員が思つていた。

『反撃は止めかよクソナードくんよお！』

『…かつちやんじやない…こんなのかつちやんじや…つ！』

『ああ？』

『だつて…つ！僕はずつと君を…』

見ってきたから…！

『だから…つ』

『こんなの君じやない!!』そう啖呵を切つた出久を見ながら、静かに、しかし徐々に声の

音量を上げる勝己。

『お前ごときが俺の何を覗て来たつて?!生意気なんだよ!·そういうトコがムカつくんじゃボケええ!』

『見てきたからわかるんじやないか!·こんなのやつぱりキミらしくないよ!·こんな…連係プレーなんて…ましてや他の人とタッグ組むなんて!!』

苦しそうに叫ぶ出久。顔は見えてないのに、お茶子の脳裏に出久が自分の胸元をギュッと手で握りながら痛々しそうに叫ぶ姿が見えたようにはつきり浮かんだ。

『…』

『…』

少しの沈黙が場を圧倒した。戦闘音も声も聞こえない。相手も、クラスの皆も息を呑んだ。そしてとうとう、誰かが溜息を零した。勝己だ。

『デクよお…てめえはいつも…勝手な事を考えてくれやがつて…なんで他のヤツと俺を別けて考えンだよ?』

『…え?』

『人を外見だけで判断するもんじやねーって、前に言つたよな?』

勝己の声は静かで、しかしその場に響くようで。誰も彼に逆らえないような圧迫感を感じられた。そうそれは…プロのヒーローが強敵に当たつて何かの拍子でブチ切れた

時のような…

『…ンで…なんでそれが、俺に作用されねえって考えんだ?』

『…え?』

『なんで、俺だけを隔てて考えんだ?』

あまりにも勝己が苦々しく、重苦しく言うので、出久もタジタジになつてしまつたらしい。先ほどの勢いがまつたくなかつた。

『そ、んなこと…』

『少し考えりやあわかる事だ。 そだろ? お前はクソナードでも頭は良い。 なのになん

でさつきみてえに、 なんで俺が飯田のヤツと連携プレイできねーって決めつけた?』

『だつて、かつちやんだつたら…つ』

『俺だつたら? 俺だつたらなんだ? できつこねえつて? ふざつけんじやねー!!』

声と共に、どこかで爆発音が聞こえた。

『これは現実で起こる事を想定して俺たちでも気軽にかつ、厳しく訓練できるように再現された場所とルールだ。 疑うべきは、"自分の中の拝見や見方" であつて、"起こりそうな事柄" ジやねーだろ。』

違うかオールマイト? そう問う彼の言葉に少々気圧されながらも、オールマイトは答えた「それが今現在出来うる我々教師の義務だ」と。

『それ、は…そうだけど』

『“起こらなそうな出来事”をも想定して動かねえと作戦も個性もなんもかんも活かせないうえに、 “自分のせいで何人か犠牲になりうる” 可能性もある。』

その彼の言葉は重苦しく響いて。まるでそれを経験したかのような雰囲気で。出久はもちろん、それを聞いていた全員が固まつてしまっていた。それをわかっているのかいないのか、勝己は続ける

『そして現実じや、相手も自分も友も知り合いも、ヴィランやヒーローでさえ “無力に死んでしまう世の中” でもあるつづー事だ』

その場だけでなく、クラスの全員が動けなくなつた。現実の厳しさは知つてはいるつもりだつた。しかし、彼らは今ここで改めて、爆豪の言葉によつていかに自分らが樂天家だつたのかを知る。

「あいつつて…こんなに眞面目だつたんだ…」

そう言つたのは芦戸三奈だ。

「人は見かけによらないもののなのね

続けて言葉を発したのは蛙吹梅雨

「爆豪すっげー！漢だぜ！」

賛美したのはお馴染み切島だ。

「小難しい理論や建前わかつたうえで、作戦考えるの上手すぎだろ。あいつ特攻系のバカだと思つてたが、やっぱ…強えな…心も身体も…」

次に顔を少し暗くしながらそう言つたのは焦凍だ。ちなみに彼はただ今、勝己と真正面で戦えている出久に嫉妬中である。ギリツと歯ぎしりもしてしまつたほどだ。

「つーか一人とも戦闘に夢中になつて頭から制限時間抜けて草生えるー（笑）」

尖水が怠そうに笑いながらしゃべると、その彼の傍にいた梅雨が彼のほうを向いた。

「尖水辰つて言つたわね貴方」

「そういうアンタは蛙吹梅雨だつけ？」

「そうよ。梅雨ちゃんと呼んで。尖水ちゃん」

「ちゃん付けかー。まあ、お近づきの印つて事で梅雨ちゃんつて呼ぶけどさー…俺の事ちゃん付けは…ちょっと」

「あらどうして？ クラスメイトで友達になつたのだから、これくらいは当然ではないかしら？ ケロケロ」

「お、やっぱツユちゃん個性力エル？」

「そうよ。あなたの個性はなあに？」

「んー…時期にわかるんでねーの？ 楽しみに見てたらいいーと思うぜー…」

言いながら欠伸をする尖水の、包帯が巻いてある手首が見えた梅雨は、そつとソレに

は触れずに彼をじっと見つめる。

「欠伸? それに気だるそうね……ケロ。 尖水ちゃんもしかして寝不足なの?」

「んー… そうさなあ…」

「朝起きるのが得意なの? それとも…」

そこで梅雨が尖水をまたもジッと見つめた。 彼女のつぶらな大きな瞳に見つめられて、さすがの尖水もタジタジになる。

「べ、べつにいいんじゃね?」

「ケロケロ。ダメよ尖水ちゃん。」

梅雨は尖水の手をそつと取った。 手首の包帯は見ずに。

「どんな理由があつたとしても、自分を大切にできるのは自分なのよ。だから無理はないでね。 何かあつたら私でよかつたら話し相手: 聞き相手になつてあげるわ。ケロ
ケロ」

「!」

その彼女の言葉と笑顔に振り動かされて、尖水は一瞬目を見張つて硬直した。 そうして少しした後、フツと微笑した。

「ああ。約束するぜ。 あんがとなツユちゃん」

「ケロケロ。ええ。どういたしまして」

一方その頃、あの二人も動き始めたらしい。あちこち煙があがっていた。

『どうして、君は…そこまで解るんだよ?』

出久が勝己に詰め寄る。

『…』

『おかしいじゃないか! 一体どういう事なんだよ?! まるで全部、君自身が…!』
『敵に隙を見せるんじゃねーよ動搖しすぎだ、デエク』

『!』

そう聞こえたが最後、また破壊音が続いた。

「デクくん?!」

『ごめん麗日さん! このままじやダメだから、作戦はBのほうを!』

「わかつた!」

キッと前を向き直していざ、飯田の後ろをとろうとしたが：麗日が一瞬目を離した隙に飯田はそこには居なくなつていて。

「あ、あれっ?! 飯田くんはどこに…」

「油断しそうではないか麗日くん!」

彼女の背後を取つて、拘束しようとした飯田は、しかし避けて攻撃を仕掛けてきた麗日とまた距離をとる。

「女子だと思つて見誤つていたよ……麗日くんキミは……格闘技が使えたのか！」
『はあ?!あの丸顔が格闘技だと?!』

それに一番に反応したのは向こうで出久と戦つている勝己で。
「うん。ワケあつて今まで黙つてたん。ごめんね」

「いや……それも作戦の内だ。それに今のはいい判断だつた。」

飯田の個性は素早い。よつて今ので避けていなかつたら……
「ケガをさせてたかもしれないからな……」

少し、思いつめたような節があつた飯田だが、続けてお茶子を睨む
「さあ……このブツが欲しけりや実力で奪つてみるんだなあ！ぐへへへへ」
「…………」

飯田が、いきなり彼らしからぬことを言い始めたのであつけにとられてお茶子の動き
が止まつてしまつた。彼なりの生真面目さがここで出て来てしまつたらしい。彼は
ヴィラン役に徹している。

お茶子は呆れて物も言えなかつた。が、しかし素早くお茶子が動いたかと思つたら、
彼女はパンチとキックを交互に出しながら、犯人捕獲テープを巧みに使つて飯田を翻弄
する。
(ただ者ではないと思つたが……つーこれほどとはー)

お茶子の攻撃が頬スレスレに横切る。勿論、飯田も負けずと応戦する。彼のスピードにさすがのお茶子も若干ついていけてない。が負けてもいない。

そんなのが続いたかと思ひきや……急に下の階が崩れ始めた。その直後だつた。

『麗田さん、今だ！』

「了解！ 飯田くんごめんね！」

彼女が個性を発揮しつつ飛び上がつた。

第8話 大怪我を阻止阻止!

なにが起つた?

オールマイトは啞然と、液晶画面を見つめるほかなかつた。それは他の皆にも言えることで。

(爆豪少年が有利だつたのを、緑谷少年が底力を発揮して圧倒し始めたころ、爆豪少年が笑つた。)

彼が不敵に笑つた瞬間、目にもの止まらぬ速さで、指をパチン!と鳴らして小さな爆発を指先に起こしたその瞬間、全てが崩壊したのだ。

壁や障害物だつた岩もすべてが消し飛んで、その影響は上の階まで広がつて…お茶子と飯田が落ちてきたのを爆豪が見て、何かを飯田に呟いた。

『このままなにもすんじゃねえ』

「なつ?!負けるというのか?!」

『どつちみち、建物壊しちまつた俺たちの負けだ。』

彼曰く、たとえヴィランでも大事な核兵器を壊しかねないこんな攻撃をしかけない。

売り物に傷をつけるヴィランはバカだと。

『今日は俺たちの負けだ』

「…わかつた。君に従おう。君は無駄な事はしなさそだからな」

『知つた風に言うんじやねーよ…』

結果は、爆弾回収したヒーローチームたちの勝ち。しかしヴィランチームは作戦もさる事ながら、潔く負けを認めて身を引いた事により、みんなの高評価を得した。それもこれも爆豪の作戦や行動が語つた事が大きかつたりする。

「ボロボロだな爆豪少年」

オールマイトイが彼へ声をかける。

「…あー久々に疲れたわ」

そう呟く彼を見ながら、少し考えた素振りをしたオールマイトイは結果を伝えた。

「…キミに得点は入らないが、緑谷少年チームのほうは逆に点数をマイナスさせてもらう」

その言葉に食つて掛かつたのは出久だった。

「え?! な なんですかオールマイトイ?!」

今度は出久の方へと歩いて近くで止まつた彼は、ジッと見つめる。

「…理由くらいは君がわかつて いるんじやないかな? 緑谷少年」

その言葉に、出久はシュン…と顔を伏せた。

「君は、爆豪少年があそこであんな無茶な行動をした本当の理由を、早く理解したほうがいい」

「…え？」

「ヒントをあげよう。もしあのまま続けてたら、君は何をしてた？」

「あのまま…？それは…」

そして出久はハツと何かに気が付いた。気が付いて青ざめた顔でブツブツ言い始めた

「そんなだつてかつちやんはそんな事知るハズないしそれにもし何か感づいたとしても僕に気遣うなんてそんなのかつちやんじやないしましてやそなのは」

「ストップストップ！ここでそれはナンセンスだよ少年！」

オールマイトはなおも、出久と向き合つて話す。

「君の中の爆豪勝己」という少年を、もう一度見返す必要があるのでないかな？」

「僕の中の…かつちやんを？」

「ああ。彼は君が思うほど…無慈悲でもないし無謀でもないし優しくないワケでもないと思うんだ」

逆に優しすぎるんじゃないのかな？とオールマイトが発して、反論しようとした出久の声を遮ったのは轟焦凍だった。

「緑谷」

「な、なに轟くん…」

何故だか二人の間に嫌悪な空気が流れる。

「俺はきっと、お前の知らない爆豪を知つてゐる」

「?!」

ギロリと睨む焦凍。

「爆豪は、優しすぎて空回りするが、アイツのやる事はすべてが繋がつてんだ。俺でも不思議と馴染めた。そこで色々教わつた。だからわかるんだ…あいつ、結構纖細で傷つきやすいぞ」

「?!かつちやんが…傷つきやすい…？」

「虚勢貼つて内心なだめようとするのがあいつだ。しかも自分の心、本音を隠すのが上手すぎんだ」

だから、あいつをこれ以上傷つけるな。

「…キミに、何がわかるんだよ」

今まで静かだつた出久が、その言葉を発して素早く焦凍の胸倉を引っ掴んだ。その緑の瞳は静かに揺らめいていて、焦凍さえ怖気づいてしまつたほどだつた。

「仲良かつた幼馴染が…急に自分だけに冷たくなつて、あげく自分の隣にくるなつて突

き飛ばしてきたら…キミだつて…!!」

そこまで言つて、出久は首を振つた。

「もう、いい…もうわけがわからない。疲れた」

そう言いながら壁にもたれて、ずるずると崩れるように地面に座つた。焦凍はとくと少しそんな出久を見つめてから、何も言わずに自分の番が回つてそこを去つた。

「…何ケンカしとんじゃアイツら」

遠くから眺めていた爆豪がそう言えば、尖水がアハハ！と笑いながら肩を組んだ。相変わらずダルそうな声を出している。

「お前本当、気づいてないんだなあ。平和だなあ…」

「はあ？どこが平和だ。お前の頭の中だけだろ平和なのは」

「へいへい：優しい爆豪さんは皮肉さえも真面目に答えてくれるんですねー」

「おい、それどういう意味：「ところで勝己」?!」

急に名前で、しかも真剣な声色で話し始めた尖水を、勝己は驚いて見つめ返した。
「出久に個性使わせないために無茶しすぎだろ…もつと方法あつただろーが」

「…ああするしかなかつたんだよ。」

チラリと、肩を落とした出久を見つめる勝己。

「ああしなりや、あいつは自分の個性使つてアソコぶつ壊して作戦を成功させようと
したハズだ。だからこつちが……」

「なるほどなあ」

勝己の肩から腕を放しながら、コキコキと腕慣らしをした尖水
「お前さ、このままいけば……壊れるんじやね？ 精神。てか心」

「は？」

「もう耐えられないって顔してんぞ」

「！」

咄嗟に顔を伏せた勝己の頭に、軽く手を乗せる尖水。その瞳は……とても優しい光を宿
していた。

「頼れよ！俺とかさ。お前はもう一人じゃねーんだぜ？」

「……！」

「人じや……ない。そう勝己が噛みしめるように呟いて。

「わかつたら俺の戦いもちゃん見てろよ～？」

氣ダルそうにそこを出ていった。

「……やっぱお前には敵わねえな……」

尖水の背中を見つめながら、勝己はそう零していた。それを聴いている者がいると、

その時の二人は気が付いていなかつた。
 （かつちやんは、一体僕の知らない間にどうやつて轟君に出会つて何を教えたんだろう？そしてなんでかつちやんは尖水さんにああも信頼を寄せてるの？分からぬことだらけだ…悔しいな…一番傍にいたのに、僕はかつちやんを本当の意味で見ていなかつたんだ…）

出久がマシンガントークのごとく考えて少し音量低めのブツブツを言いつつ焦凍を見れば、焦凍も不満そうに顔をしかめていた。

「うわー やべー ッ ュちゃん 可愛いって思つちまつたー」

「君はその子の事が好きなのかい？」

「好き？いや…まだそこまでじやねーと思うけど…まあ、友情関係の好き嫌いで言つた

ら好きの方が今格段にあがつてつかなー」

ポリポリと頬をかく尖水。

「あんなに優しく触れられたの…初めてだつたからさ…」

スリ…と先ほど梅雨が優しく触れた手をもう片方の手で撫でる。まるで先ほどの事を思い出すように。

「君はかなり彼女の事、好きだと僕は思うけど」

「ははっ。なんだよお前。面白い奴だな！俺が誰かを好きになる？それは危険だぜ？」

フツと一瞬、尖水の顔から笑顔が消えて能面みたいな表情をした。その顔を見てゾクリと悪寒が走った優雅は、固まってしまった。

「俺は誰もを不幸にしかしない存在なんだから…誰も好きにならないさ」

「へあ？」

そして冷たい眼差しに当たられて優雅が身震いしたところで、パツと明るい表情に変えた尖水は、苦笑しつつ優しく相方の頭を撫でた。

「冗談だつて！怖がらせてゴメンなー？大丈夫か？」

「…だ、大丈夫さ」

「そつか。じゃあ作戦はどうしようか」

「んー…そうだね。じゃあ僕が「オレ突撃に回るから、お前ここで核兵器守つてくれねー？」あ、うん。いいよ」

尖水が体を慣らす。そして

「うしつ！いくぜ！」

間延びした声をしながら、なんとも気が抜けるような、やる気がないような声色を発して尖水は脚力を發揮し、その場からシユツと音を出して消えた。

「へ？」

優雅もポカンとするしかなくて。そしてしばらくして、またシユツと音がしたと思つたら彼は終わつたと言ひながら拘束していたヒーローチームを床に置いた。

「いま…何が起こつたんだ?!」

切島が驚いて声を張り上げた。

「あいつ…なにか足元に使つてたぞ」

滑るように高速で移動しやがつたと、焦凍が言うと出久が続けた

「うん。なにか液体のようなものだつた。それを地面に流すように…いや、地面に触れ

た時は固くなつてた。そして敵のチームの方へ素早く移動して…」

「手を前に出して液体みてえなもんを使つて、ヒーローチームを包んだな」

最後にまた焦凍がそう言うと、出久と焦凍は顔を見合させた。

「どうやら君にも見えてたみたいだね。」

「てめえがどんな奴なのかはわからねえけど、高い分析力は持つてるようだな。あと目も良いみてえだ」

またも険惡な空気になると思いきや、焦凍がすぐ背を向けた。今度は彼の番だからだ。その背中に声をかけるものが居た。勝己だ。

「おい轟、お前俺が言つてたトレーニング、やつてねーな?」

「…」

「無言は肯定ととんぞ」

「……………」

努力はしてる「嘘つけ半分ヤロウ!!」いや、してる」

「つーかなんだその間は…あーまつたく。お前ホント石頭だな。まあいい。今回じつくり見てやんよ。もし左半分使つてなかつたら…どうなるかわからんな?」

「……………努力は、する」

「お前…ああ、もういい。早よいけや」

勝己は自分の後ろを見る事を忘れていた。そう、彼は思いもしていなかつた。出久が自分を怖いくらいジッと見つめていたことを。勝己に声をかけてもらつた焦凍に嫉妬していたことを。

「なにあれ轟君には助言とか手伝つたりするのにどうして僕の事は邪見にするのつていうかかつちやんにトレーニング手伝つてもらえるなんてなんて羨ましいんだつていうかかつちやんに声をかけられるだけで僕だつたら緊張しちやうかも知れないけどやっぱり心の奥底は嬉しさでいっぱいになるよああもうホント羨ましいよなんで僕は違うの何でそんなに扱いが違うのさ…ブツブツブツ」

それ以上は怖くて誰も出久に近づこうとは思わなかつた。

第9話 月に託した願い

あの日は、月：

そう、月だ。たしか空に月が浮かんでいた。
真つ暗で：何も見えなくつて。

でも月の淡い光だけがボウつて見えて、どこまでも昏い空を、弱弱しく明るく照らしてたんだ。太陽のような強い光は持つてない。だが、もてうる自分の力をそつとそつと、絶え間なく俺に：俺たちに注いでた。

死にぞこないである、俺たちに。皆に見離された俺たちに。諦められ、朽ちて行くしかなかつたはずの人間たちだつたハズなのに。

(まるで、俺たちを決して見放さないとでも言うかのように：)

絶望の節で、虫の息のような奴らが次々死んでいった。

あたりは真つ暗だつた。あの空のように。

腹は空き、心も身体も傷つきボロボロ。指を動かすのも億劫になる。体力を温存するためにも、壁にもたれかかつて、全身の力を抜きつつ、喉の渴きをごまかすように、パサパサな口の中に唾液を回す。

無意味な行動だとわかつても、気休めぐらいにはなつた。

街のネオンの光が鬱陶しい。幸せそうな家族が、声が聞こえるたびに言いようのない悔しさと、憎しみと、羨ましさと…虚しさが沸き上がる。

(優しいフリ、みないフリ…)

俺も動けずに、ただ待つた。迫りくる死を日々待つだけだった。自分の手を見続け、気まぐれに目線だけを音の聞こえた方へ送る。

猫や犬がこちらを物珍しそうに首をかしげながら見つめてくる。

(誰も助けに来てくれない……ヒーローでさえも…)

絶対に大丈夫だよと。絶対に助けに来てくれる。そういうつて目を輝かせながら教えてきて、結局目の前で散つていった同じ年の尊い命を思い出した。

(なにが…ヒーロー)

ギリツと奥歯をかみしめる

(なにが…絶対に助けに来てくれる！ だ…みんな…？ つぎだ)

ちくしょう…と一言呟いた。

ふと差し込んできた温かい淡い光。疑問に思つてなげなしの力を振り絞つて空を見上げて、月がそこにあるつて気が付いて…

ああ、キレイだな…つて思った。

ひび割れた建物からうつすらと差し込む月の光が、何故だか心地よくって。
だから俺はある日、強い光しか注ぐことができない太陽じゃなくって、淡くてキレイ
で優しい光を持つ、あの月にお願いしたんだ。

(いつかで良いから、いつかで良いから。まだ生きられたら)
らしくもなく、祈るように小さな小汚い震える手を合わせて。
(あんたみたいな、月みたいな友達：ください)
震える身体でそんな事を、月に願った。

「死柄木弔」
しがらきとむら

聞きなれた声に俺の意識は浮上した。ちつ。嫌な夢をみちまつた。イラつきながら

首元をガリガリ搔く。

「黒霧：今何時」

「昼の4時です。」

「あー…おやつ…」

そこにそつと置いてある黒霧が用意したデザートを手に取ろうとして、スカツと自分の手が空を掴んだ。あいつ、個性つかつておやつをワープさせやがった。

なんでそんな事をするのかという意を込めて黒霧を睨めば、あいつはすました顔でこういってきた。

「おやつの時間は過ぎてます」

「はあ？ それでなんで俺が食べるのを我慢しなきゃならないんだ。よこせ」「ダメです。ヴィランでも規則正しくおやつの時間は守らないと」

「なんでおやつの時間だけ規則正しくしなきやいけないんだ。俺たちはヴィラン。何者にも縛られない。ルールも関係ない……なら、おやつを何時に食べようが関係ない……食べたいときに食べる。なあ、そだろ？」

「……では、条件があります」

そう言つて半分呆れている感情を隠しもせず、黒霧は俺に一枚の紙を渡してきた。

「買い物リスト……ふつざけんな！ 俺に買い物だと？」

思いつきり机をぶつ叩く。もちろん個性が発動して崩れないよう一本くらい指を離して。

「そんなものに行くくらいなら、オヤツなんていらぬね」

興が覚めたと言わんばかりにそう言うと、黒霧は困りましたね……このままでは今日の晩御飯ありませんとか言つてきやがる。

知るか。お前が行け。お前が。ワープで楽々いけるだろ。

「素材買つてきてくださいたら、おやつの量を普段の二倍にしますけど」

「チツ。この紙に書かれてるヤツだけでいいんだな？」

「ええ。それだけで足りる。よろしく頼みましたよ」

「そこ、上手く丸みこまれたなんて笑うなよ？ じゃないとお前、壊すぜ？」

「あー……だりい」

足取りは重い。

「なんで俺が…」

賑わう人々の中をかいくぐつて進むのは苦手だ。どいつもこいつも幸せそうな面をしながら、さも悪い事なんて起きてません。みんな平等な平和の中に居ますみたいな顔しゃがつて。

(なにも見えていないフリをしているクセに)

死にかけている奴が居ても、お前たちは手を差し伸べようともしない。

(偉そうに犯罪者、世間の屑。ヴィランなんて宣う)

ああ。

何もかもを……

……壊したくなる

「あー…ダメだ。」

ついついそこにあるものを…壊したくなつてくる…

先生にも言われた。感情のコントロールをマスターしなければ、いくら頭が良くても無様に負ける。

負けること自体は罪でもましてや悪い事ではない。自分の次の枷として経験として次に生かす。

しかし世の中、必要なのはコントロールだと。

「すぐ癪を起すのは俺の悪い癖だ。」

自覚はしているが、未だそれをコントロールする術を、俺は持つてない。

「さて……と……？」

買い物リストを丁寧に読み上げて、忘れ物がない事を確認する。

「ネギ……味噌……豚肉……」

どうやら何も忘れてないみたいだな。これらから連想されるもので晩御飯に適した、黒霧が作りそうなものは……

「豚肉の生姜焼き、豚肉のネギ味噌焼き、豚肉のネギ味噌炒めかもしれないな……」

嫌いじゃないな。

むしろ好きな方の料理だ。父さんの大好物で、母さんがよく作つて：

「……黒霧のつくるヤツ、似てるんだよなー」

この料理はとくに母さんの味に似てる。だから嫌いじゃない。

だから壊さない。だから…

「さあてと…俺を歩かせた罰として…ちよいと寄り道でもしてオヤツのおやつを買に」

瞬間、目の前で爆発音とまばゆい光に包まれた。

「!」

どうやら攻撃されたらしい。間一髪で避けたはいいが…ちつ。視覚がやられた。目が見えねえ…

そう思いながらも、先生から学んだ通りに対処しようと意識を集中させる。「目をやられて周りの状況を把握するには、残った感覚だけで全てを把握すればいいんだつたな…」

聴覚、嗅覚、味覚、触覚…そこから導き出される情報を処理して、『空間で自分の体を認識する感覚』を發揮させる。

そう。今の俺は身体全てが音や匂い、空気の温度の違いさえもを感じ取つて攻撃に移れる。さあてと下準備は整つた。あとは…目の前に現れた巨大な何者かをぶつ飛ばすのが先決だな。

「おい、デカブツ」

「…なんだお前。」

目は見えない。けどハツキリわかる。こいつが変な個性を俺に使つて來た奴だ。

「なんで俺の買い物、吹っ飛ばした?」

せつかく屑みたいなヒトゴミの中を、結構久しぶりに良い気分で買い物してたのに
なあ…あーホント、世の中つて…

「クソだよなあ…?」

くひひつ。こいつは壊してやるんだ。跡形もなくボロボロに崩れて、そんで!
「消えちまえよ!!」

感覚だけでこいつの攻撃をよけて、そんで隙をつくつた。

(ここだ)

スッと流れるように俺の手をそいつの体へ触れようとして。あと少しでこいつへの
攻撃が入ると言う所で、デカブツは避けやがつた。

おまけに俺の腹に重い一撃をぶつ放す始末。

「ゲフッ…あーマジかよくつそ!」

壊したい壊したい壊したい壊したい壊したい壊したい壊したい壊したい壊
したい壊したい壊したい壊したい壊したい壊したい壊したい壊したい壊した
い壊したい壊したい壊したい壊したい壊したい壊したい壊したい壊したい壊
したい壊したい壊したい壊したい壊したい壊したい壊したい壊したい壊

「へつそおおおお!!!」

!

目の前に迫りくる気配。ああ、こんな殴られる十秒前になんで視力が戻るんだよ！

避けられないじゃないかよ。運がないにもほどが…

そう思いながら相手を見ていた。一瞬、昔みた綺麗な月の光を思い出した。

（あの日も丁度、こんなクソみたいな日で：俺を励ましてた親友が死んじまつた日でも
あつて…）

するとすぐ傍でドカン！という音。

気が付きや、いつの間にか目の前のデカブツが吹っ飛ばされていた。

そこで：目の前には淡い月の光をそのまま髪の毛に溶け込ませたかのような…19、
20歳くらいの男子がいた。

キレイな月の色を髪に宿し光らせながら、そいつは不愛想な声色で、だがどこか気遣

うような、そんな声色で俺へ口を開いた。

「おい」

「……」

『死にたくなきや俺の傍から離れんな』

その男の低い声がやけに俺の耳に心地よく馴染んで。心地が良くて。
ほど良い柔らかな優しさが声ににじみ出していた。

『テメーは誰だ』

『ただの通りすがりのヒーローだ』

ちらりと見えた、暗闇の中でも失われないルビーミてえな赤い真っ赤な瞳。とても力
強い瞳だった。綺麗だと思った。

そして男は一瞬にして間合いをつめて、巨体を背負い投げして関節技で身動き取れな
くした。そんな通りすがりのヒーローを見て俺は忘れてた願いを思い出した。

『いつかで良いから、いつかで良いから。まだ生きられたら』

『ああ…ああ……つ！

『あんたみたいな、月みたいな友達…ください』

この人がそうだ。

直感的にそう、感じたんだ。

俺は歓喜に打ち震えた。

だが：こいつはヒーローと名乗つた。なんでだ！ なんで俺の願つたモノは…あっち側なんだよ!!!!

「おい」

「なんだよ」

むしやくしゃしてゐる俺に近づくヒーロー。だがこいつは他の奴らとは違うと感じた。纏うオーラが違う。物腰が違う。ヒーローなのになんでムカつかないんだろうな。ほかの奴見えてると壊したくなるのに。

あのムカつくオールマイトとも違う、何か惹き付けられるものを感じる。

「お前は悪くねえよ。よく戦つた。」

「?!」

先生と…同じ言葉を？

「悪いのは対処できねーヒーローでも、世の中をこんなに仕立て上げた上層部のお偉いさん方でもねー！」

「…」

「盲目の正義を掲げるやつら、そしてそれに漬け込む奴らが悪い…もちろん、俺の存在も罪なものだ」

「それはどういうことだよ？」

そう聞けば、月の髪の色の奴は、儂く笑つたんだ。今にも泣きだしそうな…だけどとても印象的で忘れられない——：

「内緒だ」

キレイな微笑みだつた。

遡る事、一か月前。

「はあ？ 身体を変化させたい？」

尖水辰へと相談を持ち掛けた勝己は、ああ。と言いながら何故そんな発想にたどり着いたのかを話はじめた。

「はつきり言えばこれからくる、壮絶な戦いで俺が俺のままで居ちや分が悪い。」

「今までだつて十分すぎるほど暗躍してきておいて、お前つて奴は……」

「目的は守る事。それだけだ。守る範囲を広くしてえ。そのためならなんだつてするぜ。俺は」

その異常なまでの執着は彼の身を少しづつ滅ぼしてると、何度も辰は言つたが彼は苦々しく「わかってる……」しか言わない。

「そんで、なんで俺のどこ來た？」

「じつは……お前に頼みたいことがあつて」

勝己は言いながら一つの黒いケースを取り出す。その中にはいろんな薬や変な液体

が入った試験管などがあり……どうみても雄英の化学班が関係しているだろと、半ば呆れを感じながら彼の説明を待つ辰。

「幾年もの実験の結果、お前の持つ個性“水銀”が、力ギになつてくるらしい」「…ちなみに、なんの？」

「…」

「あのな爆豪：知らないとは思えないが、一応言つておくぜ？ 水銀つて一のはだな…」

「猛毒なんだろ。知つてる」

「…知つてお前、俺に出せつて？ ダチを殺す手伝いしろつて？」

「ああ、そこんところは心配いらねえよ。知り合いに水銀詳しい奴がいてな。」

「だからつてなあ…」

「……やっぱ、ダメか？」

「あ、面倒くせえなあ。ホラ」

「…いいのか？」

「あはは！ なんだよその顔。欲しいんだろ？ お前の事だから、俺が扱う水銀が特別必要なんだろ？ 減るもんじやないし、好きなだけ持つて行けよ」

「恩に着るぜ！」

そうして出来上がった薬剤。淡く光るその液体を、一か月後に勝己は使つた。副作用

があるのは知つてたが、なぜかその日は使わなければいけないと、一種の使命感に似たようなものを感じたのだつた。

たまたまだつた。そう。本当にたまたまだ。

その日は、チンピラが雇つたヴィランどもを蹴散らせた。その帰り道だ。見覚えがある個性を放つて、傍に居た男子に襲い掛かっていくヴィラン。

（取り逃がしたやつか……裏ロジでも街中であんな派手な個性使つてくれてマヌケが！あれじや見つけてくださいって言つてるようなモンじやねーかバカが！）

よく見れば、攻撃されている男は、大体は避けてたが、擦り傷をあちこち作つていた。そして次のモーションで勝己はその青年が誰なのかわかつてしまつた。わかつたうえで、彼は彼を助けることに神経を使つた。

おかげでスムーズに事が運んだはいいものの：

（さて、どうしたものか……）

勝己が見つめる先には、絶対俺なんかにしないだろと言いそぐになる憧れの眼差しをしたヴィラン……死柄木弔がいた。

「
緑谷が狙われてた?
」

「ああ」

「一人の小さな会話にはほとんど誰も気が付かないのに、クラスが賑わってる中でも二人は二人だけが知る会話を気軽にしていた。」

「普通のチンピラだとも思つたが……ありやヴィランだな。」

「何人相手にしたんだ？」

「ざつと三人か。応援を呼ばれちまつたから合計で五人だつたな。」

「へえ……五人ね。そんでなんでヴィランが緑谷を狙つたんだ？」

「……中学時代の……誰かに頼まれたんだとよ」

「……そうか」

ただ一人とも気が付かなかつたのは、その中で唯一といつてもいい焦凍だけが、彼らの会話を聞き取れていたという事。

無駄に表情を動かさないのが幸いしたのか彼らは気が付いてない。

(狙われる?)

焦凍は変わらない表情でそんな事を思いながら、渡されたプリントに名前を書いてい

た。轟焦凍。うん。間違えてはいない。

「まだアイツを狙つた中学時代の奴ら居たのかよ……」

「……直接行つて蹴散らした」

「え、もう問題解決してたん?」

「…野放しにしどくとやつかいだかんな…エンデヴァーに頼んで…」
なるほどと、焦凍は耳で聞くだけにして問題を解いていく。

(それで親父のヤツ、意気揚々と昨日、出かけて行つたのか)

見てて気持ち悪いくらいにエンデヴァーは張り切つていたのを思い出す。目はギラギラしてたのに口はへによりとだらしなく笑おうとしていたので、無理に力んでアヒル口になつてたのを思い出した。

「けどそのせいで今日、体調悪いんだろ? 颜色いつもより悪い…白いぞ。寝てないな? 何徹夜目だ?」

辰にそう睨まれると、勝己はしぶしぶ答えた

「に、二徹夜…」

「…そしてあまり食べ物が喉を通らないって? 「そんなん言つてねー!」言つてなくつてもわかるからオレ。」

そこで盛大に溜息を吐く辰。

「プロのヒーロー目指すなら健全に過ごせよ…身体壊したら元も子もねえし守れるモンも守れなくなる」

「…ぐ。」

二人の会話からして、焦凍は大体察した。

(爆豪、身体怠そうにしてるのも、体育で記録が今一だつたのもソレが原因だつたのか)
しかもそれが出久を守るためとは。特別扱いされてる出久に少なからず嫉妬してしま
うのは致し方がなかつた。焦凍も人間だ。爆豪に惹かれていて、少し憧れてもいる相
手なのだから。

そんな相手が己の体を壊すようなことをやつてゐる。身を削つてまで守つてゐる。

(緑谷は、あいつに守られてんだな…)

なのにどうして

(緑谷は…爆豪を本当の意味で“見て”やんないんだろう…)

二人を隔てている大きな溝。それがちよつとやそつとじや近づく事も埋まる事も叶
わない事を、なんとなく察してはいた。だが今まだ理解に苦しむ焦凍だつた。
そんな時だ。

「あ、かつちゃん…」、「ごめん…」

出久の肩が勝己の肩にぶつかつてしまつたのだつた。勝己は内心酷く動搖してし
まつた。久々に出久がこんなに近くにいる。それだけでおのれの胸は打ち震える。歓
喜と、悲しみに。

ドクリと心臓が強く脈を打つ。そのせいで一瞬息が詰まる感覚が勝己を襲う。この

ままではヤバいと、勝己は焦った。薬の副作用か？ 続けて二日間使つたらこうなるのか？ などと考える勝己。

「はあ…」

その痛み始めた胸を隠すようにネクタイを緩めながら勝己は溜息をこぼした。まるで、痛みや悲しみをどこかへ追い出して和らげようとしているみたいに。

そう。勝己は必死になつていつもの発作みたいなものを起こさせないように振舞つた。ただそれだけだ。

自分の弱つた姿なぞ、自分が認めた誇るヒーローに見せてたまるものかと。

しかし何を思ったのか、その勝己の力ない目を見てカチンと切れたのは何と出久で。辰が止めようとしたソレより素早く勝己の胸倉を引っ掴んで。

「どこ見てるんだよ…」

「放せよ」

「なんだよその目！ そんな弱い目、君らしくないじやないか！ 何なんだよ君は！」

「…つ！」

弱い目。

悟られたくないがつた。

なのに…

勝己は時々、このような発作が起きることが度々ある。それを、あの劇薬がさらに引き出してしまつたらしい。

原因是明白だ。己の精神と身体が弱ると起る現象。過去の罪の意識：そして前世の記憶。

一種のトラウマにも近く、フォビアにも近く：そしてパニック症候群とも似ていた。今日は特にひどいのだ。学校に来る途中、三度も過呼吸になつた。あのまま帰つてもよかつたが：いかんせん最近、出久を狙おうとする輩が居て心配で仕方がなかつた。

だから来た。怠い身体を這つて。ぼーっとしてしまうこの頭は、きっと熱もあるだろう。そろそろ頭痛までしてきた頃、この出久の急接近とこの彼の言葉。

『弱い』

なんとない言葉だ。ありきたりの言葉だ。それに傷つく理由も必要性も勝己にはないハズだつた。

しかし今の勝己は過去の事を簡単にフラツシユバックしてしまう危険性があつた。おもに劇薬の副作用のせいで。それに続いて前世の記憶も持つてゐる。

自分が今まで出久に仕出かしてしまつた痛々しい行為を：前世の事を思い出してしまう。考えるなと命令をしても無駄だつた。連鎖で自分の脳が思い出したのは虐め始めたころの、出久：

「は…」

あの時の彼の顔を、きっと勝己は一生忘れないのだろう。

「かはつ!!」

「え?」

「…つ……あ…!!」

脳に焼き付くようにこびり付いている。

「かつちや…?」

「は、はあ……う!……うあ…カハツ……!!!!」

「ど、どうし」

絶望で勝己を見上げる、幼馴染の顔

「あ…アア!……ッは…はうああ……!!」

「ど、どうしちやつたのかつ」

悲しみで歪む、出久の顔が

頭から、離れない

ハナレテクレナイ

お願ひだから

お願ひだから

お願ひだから……!!!!!!

(赦してくれ…………俺のビーロー……)

「綠谷！・爆豪から離れる頼むから!!」

状況を一部把握したらしい辰の悲痛な声が響く。とつさに離れて辰を焦りながらも困惑した顔で見る出久は何をどうすべきかわからず。

辰が大雑把に説明しようとしたその、一瞬。

勝己の体が大きく揺れて――：倒れていつた。

誰も勝己を見ていなかつた。だから反応ができなかつた。

ただ一人を除いては

第10話 大切な思い出

（轟焦凍 視点）

あいつと初めて会つたあの時、正直に言えばいけ好かねえって思つた。どうして親父が俺と会わせたがるのかわからなかつた。

だけどあいつが親父と互角に張り合うのを見て、目を見張つてしまつた。

いつの間にか食い入るように見てたんだ。アイツの動き、蹴るや殴るなどの動作がとてもつもなく洗練されたものだと一目で見て気づいた。

「キレイだ…」

思わず零れた言葉は、誰の耳にも届かなかつたが…俺自身が耳を疑うほどで。でも、それが自分の本心からくる言葉だつた。

だから納得しちまつたんだ。親父がなぜ、爆豪に異様に執着しているのかを。あいつはキレイだから。あいつは、強いから…

だけど、親父に連れられて何度かあいつを観察する間に気づいちまつたんだ。あいつの…爆豪のキレイな真紅の瞳が曇るときがあるのを。それはいつも決まって、幼馴染の“緑谷”というヤツの名前が出る時だつた。

はじめは俺には関係ないし、人のデリケートな部分まで干渉するもんじゃねーとほつとこうと思った。けど…その顔が時々寂しさに歪んだり、悲しみで思考がかき乱され、動きや思考が鈍る。そしてきまつて胸を捶くような仕草を、誰も見ていない時にサツと素早くする。

汗がブワリとじみ出て、嗚咽をかみ砕くように下唇から血がにじむまで噛み、無理にでも痛みを逃がしていいようだつた。上手く息ができないのか、はつ…はつ…と苦しそうに息を吸つては吐いてを繰り返して。

その一連の動きは見覚えがある。幼い時の記憶——お母さんがよく隠れて……

(過呼吸…?)

それで理解した。あいつは幼馴染の何かの事で苦しんでいるのだと。そしてそれは——今も彼を苦しめているのだと、目の前で倒れてしまつた爆豪を見て俺は直感した。

あいつが苦しそうな顔をするのは、いつも

(緑谷が傍に居る時だ……)

そうだ。アイツがいつも言つていた、"バカなお人よしで鈍感で頑固な幼馴染がいる"と。懐かしむように。けど時々苦し気に。

ソイツが傍にいるときだけ：爆豪はいつももまして喜び、そして悲しむ。そいつの話

をするだけでも顔や態度にそれが現れる。

ようは爆豪にとつて、緑谷は劇的な弱みにもなるし、強みにもなるつてことだつた。理由はわからねえ。聞いた事も、ましてや聞きてえとも思つたこともねえ。けど、コレはねえだろ‥‥

いくらなんでもコレはねえよ緑谷。

こんな、弱つてる爆豪にトドメ刺すみてえなこと。

こればっかりは‥‥‥‥‥

「緑谷…悪いな…俺はお前を許せねえ」

「!」

その俺の殺氣こもつた言葉を聞いてクラス中どよめきが上がる。力なく倒れた爆豪の体を間一髪で支えることに成功した俺は、きつとすげえ顔してたんだろうな。緑谷の顔が強張つてるし身体も少し震えてる。

けど、知つたこつちやねえな。爆豪をこんなにしちまつたのは目の前のコイツだ。コイツのせいで爆豪は限界を超えたまつた。

「爆豪がこんななつちまつたのは、大半はてめえのせいなのに」

「!」

それをお前は‥‥

「お前の中の爆豪つて…なんなんだよ?」

「ああ、見ててイライラする。こんなにイライラすんのは…アソツ以来だ。

「親父以来だよ。ぶつ飛ばしてえつて思ったの」

「?!」

「お前は爆豪を見ているようで何も見えちゃいねえ…」いつの優しさに気づきもしねえで…」

「あんなに大切に思われて、大切に扱われて守られていいながら。
「よくもまあ、爆豪にこんな…」

「ああ。ダメだ。これ以上ここに居れば俺はきっと。こいつを。

「と、轟くん…かつちゃんをどこに」

「保健室に連れて行く。くれぐれも後を追つてくれるなよ緑谷…じやねーと俺はテメーに何をするかわからねえ」

「…つ」

空気ぐらい読めるヤツで助かった。俺は早々にその場を離れた。爆豪をお姫様抱っこして保健室に向かう。体温が妙に高いのは熱のせいだとわかるが、明らかに汗の量とその汗の冷たさが異常だ。

息もあんまし上手くできてねえし……痙攣してやがる……
早くリカバリーガールに診せにいかねえと……！

（綠谷視点）

カツとなつてしまつた。頭に血が上つたんだ。だつてあのかつちやんが、ため息ついて僕に何も言わずに去ろうとするし。

なによりも、あんな彼の弱々しい目を見て、我慢ができなくなつてしまつたんだ。
どうしよう：

かつちやんが：倒れてしまつた。倒れないと思つてた。だつてあのかつちやんだもの。大丈夫だつて思つた。かつちやんだつたら何でもできるし、誰よりも丈夫で誰よりも頑丈だつて信じてた。いや、過信してたんだ。

だからかもしねい。

彼の顔が、異常に青白くなつていつたのにも、息苦しそうにしてたのにも：気が付かなかつた。気が付かなかつたんだ――――――

どんなに強くたつて、人は人。身体でさえ異常なときはあるのに。心だつて……何ら

かの条件がそろえれば人は病気になるし、壊れることも――――――

そこまで考えて僕は頭を抱えたくなつた。後悔の念が押し寄せてきて今更だ。そ

うだ。今更なんだ。

どうして僕はいつも、かつちやんだつたら…と彼を他の人と隔てて考えちやうんだろう…どうしてかつちやんだつたら、頑丈だからと、これくらいで倒れないと思つてしまふんだろう。

かつちやんだつて、僕らと同じ高校生なのに。僕らに悩みがあるようにかつちやんだつてあるハズなのに。なのに僕は…どうしてもかつちやんが違う次元に居る超存在だつて、思つてしまふんだ。

謝りたい。かつちやんが無事かたしかめたい。でも…今は…できない。

『後を追つてくれるなよ緑谷…』

轟くんの言葉がリフレインする。切羽詰まつたようなその表情が、かつちやんを見る時だけ優しく、そして悲し気に動くのを知つている。

『じゃねーと俺はテーマに何をするかわかんねえ』

そう言い放つた轟くんは、僕を見る時だけ眼光が鋭く、冷たかつた。

後を追つてはいけない。僕はきっと、あの二人の触れてはいけないデリケートな部分に触れてしまつたんだ。

後を追つてはいけない。無意識に握りしめてた拳から力を抜く。緊張で強張つた身体はまだカタカタと震えてた。

そして僕は、かつちやんが握り締めてたある物が床に転がっているのを見て、わかつてしまつた。理解してしまつたんだ。直後押し寄せたのは後悔と“痛み”

「……っ！」

痛むあまりに胸を両手で押さえ、ギュッと握り締める。胸に剣でも突き刺さつたかのような、鈍くてとつても痛い悲しみの痛みだつた：

「ぼくは……っ！　なんて事をかつちやんに……!!」

その場に泣き崩れてしまつた僕を、クラスの皆は啞然と見守つて。そこにすでに居た相澤先生は、みんなをまとめる為に声をかけて。

「緑谷。お前はちょっと来い」

今まだ涙を流す震える僕をそつと立ち上がらせて、一緒に誰もいない、誰も来ないような屋上へと連れてきてくれた。

「少しずつでいい：お前の言葉で聞かせてくれるか。お前と爆豪の今までを」

先生の優しさが、今の僕にはとても痛くて苦しくて。でも、とても嬉しかつたんだ。

それは幼い時の記憶。少しほんやりする記憶の一つ。

二人はいつも一緒にいた気がする。いや、時折どこかへ行きそうになる勝己を、出久が必死に手をつないで隣に縛り付けていたと言つても過言ではなかつた。

それほどまで、出久は勝己に依存していた。ふとした瞬間に、出久は頻繁に感じたの

だ。そこら辺に吹く風でさえ、勝己をどこかへ攫つてしまいそうな…

まるで少しの事でさえも、消えていなくなってしまうような。目の前から跡形もなく搔き消えてしまうような…そんな危うい感覚がいつも出久を襲つた。

いつも不安でたまらなかつた。勝己にはどこにも行つてほしくなかつたから。消えてほしくなかつたから…

だつて出久にとつて勝己こそ己の大切な宝物だつたのだから。キラキラと光り輝く彼をずっとそばで見ていていい。

自分のエゴだつたのだ。だからあの時も勝己を縛るように。自分を忘れないようにするために、勝己の誕生日に願いを込めて贈つた。

特典付きの、期間限定オールマイトイホルダーを。

自分のコレクションの中の、特別な思い出の詰まつたキーホルダーを贈つた。

勝己はこんな貴重なものを貰えないと返そうとしてきたが、無理やり受け取つてもらつたのだ。

『昔どこかで、誰かに聞いたんだ。』

出久は語つた

『もしも自分の大切な人がね、遠くにいつちやつてもね』

自分が大切にしている宝物を贈ると、その絆は永遠につながつていてくれるのだと。

たとえ何が起ころうとも、何かが二人を隔てても。

その絆を大切に思う間は、決して消えない『まじない』なのだと。

『だからねかつちやん』

僕の前から消えないでね

（まるで…わかってるかのような顔で笑うんじやねーよ…）

勝己がこれから何をしようとしているか、まったくわかつていない癖に。だが、だからかもしれない。そんな出久を見て勝己は新たに覚悟を強固にした。

そして勝己はそれをギュッと握り締めて、真剣な顔でこう言つたのだ。

『わかった。何があつてもオレはお前との絆を手放さねえ。何が起こつても…俺だけでも大切に持つててやる』

返品はきかねーぞ！

最後にそう言い放つた勝己の顔は、ニッと彼らしく笑っていたのを、出久は今でも昨日の事のように思い出せた。

「…これが、さつきかつちやんがずっと握り締めてたキー・ホルダーです…」

出久は蹲りながらも先ほど拾つたキー・ホルダーを相沢に見せる。それは大切に扱われていたためか、完璧に原型をとどめていた。

丁寧に上からプラスチックのようないの袋で包められて、勝己の爆発にも耐えられる素材でできている。

「捨てたつて思つてた…」

もう出久とは関係ないのだと、言われているような気がしていた。彼が自分を隔てたのだと思つていた

だけれど、それは出久の思い込みだつた。勝己はずつと大切に持つていてくれたのだ。絆を。あの日の思い出を。優しく包み込むようにそつと自分の胸に抱いて。「ずつとずつと…かつちやんは僕との思い出を大切してくれた…」

勝己ではない。実際は自分が隔てていたのだ。彼を自分から。その現実を必死に見ないようにして…結果、勝己を傷つけてここまで追い込んでしまつた。

「かつちやんは…かつちやんは…！ こんなのに縋るほど…！ 大切してくれたのに!! なのに…!! ぼくはかつちやんを傷つけるだけして…つ…！」

そしてまた、出久は声をあげて泣いてしまうのだつた。

「そうか」

静かな、先生の声が響く。

ストと隣に座つて、相澤はポンポンと出久の背中を摩つた。

「ケンカや仲間割れは人生の中じゃいくらでも湧いて出てくるトラブルだ。」

「…」

問題は湧いて出てきて治まるものもあれば、生涯一生解決しないものもある。
「だからって、何もしないで手をこまねいてるのはお前の性分じやないだろ緑谷」「…！」

ハツとした顔の出久を見て、相澤は続ける。

「相手も立場も顧みず、深いところまで足を踏み入れてしまうのがお前だろ」
相澤が思い出すのは…己が無個性でも、傷つき動けない勝己や相澤を、ヴィランの攻撃から身を挺して守ろうとした出久の小さな背中。

—出久が忘れてしまっている記憶だ—

とても小さくて頼りないはずなのに。何故かとても大きく感じてしまったのだ。あの日の事をきつと一生、相澤は忘れる事はないのだろう。

「お前たちの絆が具現化したようなモンなんだろソレ」

キー・ホルダーを指さす。カサリと出久の手の中で音が鳴る。懐かしむように微笑み、そつとキー・ホルダーを撫でる出久の顔は…物悲しそうで。

「…はい」

「じゃあ、あいつに返さなきやいけないな」

「…」

黙りこむ出久を見て、相澤はまた出久の頭をポンポンと撫でた。

「爆豪を信じてやれ。あいつも苦しんでる。お前からもらつた思い出の品を大事に今も持つてるつづることは、あいつにとつて掛け替えのない大切なもんだって事だ」

「そう…ですか？　かつちやんが僕との思い出を大切に…」

それに繩りつく程度には、彼にとつてとても大切なモノなのだろう。

「そして必然的にそれは爆豪がお前を大切にしてるつて事だな」

「ええ！　ぼ、僕を？！　かつちやんが？！　うそだあ…」

「あのな。そろそろ気づいてやれよ緑谷。」

呆れ顔でそう返す相澤。爆豪が可哀そーだと言つた。

「…轟君にもオールマイトにも、言われました…」

思い出すはそれぞれの、言葉

『君の中の爆豪勝己』という少年を、もう一度見返す必要があるのではないかな？』

オールマイトが言つていた、見返さねばいけない事柄。

『お前の中の爆豪つて…なんなんだよ？』

苦し気に吐き出された言葉には、怒りと悲しみが含まれていた。まるで自分の事のように勝己を心配し、自由に思い、行動できる轟のその姿に嫉妬した自分が居て戸惑つた。自分はそんなことなど出来なかつた。

勝己の、あの背中を見るたびに……ああ、遠いなと目を細めるだけだった。だから対等に話している轟を見て——どうしようもない嫉妬の炎が腹の底からせりあがつてき……氣分が悪くなつた。

だから余計に見て見ぬふりをしてしまつたのだろう。おかげで普通の時ならば気づけた勝己の異変に、己は気づけなかつた。

「僕の中の……かつちやんは……」

出久は目を閉じて意識を自分の中に集中させた。

「いつも……横暴で、でも先を行く皆のリーダーで……」

そこで出久はハツとした。そうだ、なんで忘れていたんだろうと呟く
「とも、やさしくて……温かくて……」

また胸倉をギュッと握る。そうだ。そうだつた。勝己はいつも傍に居てくれた。守つてくれていた。そして異常なまでに己を盾にしてまでも、出久を守つていた。あの勝己の手は一見乱暴そうに見えてじつは優しい事を知つている。

出久の頭を何度も撫でてくれた手だ。何度も弱い自分を引き上げてくれていた手だ。言葉も乱暴なだけで……すべて気遣われた結果ああなつてしまつたのだと気づく。

彼は根本的に傷つきやすく繊細な心を持つ——心優しい少年だつたのだと、それは変わらずにあるのだと気づかされた。

だから。今までの自分に腹が立つた。何も知らない自分が……今まで勝己をどれほど傷つけたか理解した。理解したから出久は心の奥がキュッと苦しくなった。

「お兄ちゃんみたいな……人でした……!!!!」

その言葉の後に続いたのは出久の泣き声のような叫び。

膝から崩れ落ち、大声で泣き叫ぶ出久を、相澤は黙つて見つめていた：

(本当に覚えてねえのか：あの時の事……)

相澤は一人思い出す。ある事件に幼い時の勝己がヴィランに攫われて、相澤が居たにもかかわらず苦戦し、しかしやつとの事で敵を追い詰めたその時だつた。ヴィランが勝己ごと自害しようとしたのだ。

その時に相澤はすでに限界を超えており、目にダメージもあつた。個性はこれ以上使えない。しかし使わなければ…そんなふうに迷つていたその時に事は起つた。迷つてる相澤を置いて、こつそり後をつけてた出久が迷うことなくヴィランへと突っ込んで体当たりをした。

怯んだその瞬間に相澤が捕縛に成功した。その捕縛のさいに出久がケガをしてその日の記憶といくつかの記憶がぼんやりとしか思い出せなくなつてしまふが。

すでに幾つかこういう事態の経験をしていた相澤や他の誰より早く、出久は敵へと怯むことも迷う事もなく：敵へと真っ向に向かつていつた。

勝己という幼馴染を助け出すためだけに。

(デカいな…)

その小さな背中を見ながら思ったものだ。しかしその頃から勝己に変化が見られ始めたのもたしか。

(もつと爆豪へ配慮しておきやよかつた…)

そうすれば、今頃勝己だつてあんなに苦しい思いをせずにすんだのかもしれない。もしかするとあの日の事が原因で彼の中でトラウマになつてしまっているのかも：しない。

出久が無茶をしでかして、ヴィランにやられてボロボロになる。それをあの日、目のあたりにしてから怖くなつてしまつたのではないか？

(だとしたら切つ掛けは緑谷の無茶だ。)

そう考えるとつじつまが合う。今までの勝己の無茶につながる。しかし繋がらない事柄も俄然として見えてくる。隠れた真実を追い求めていく相澤の目には、理解しつつある真実があつた。

しかし、それに伴つてさらに隠れていた事柄が明白になつて。

(だが、そうだとしてもだ。アイツの情報網がどつから来ているのか。それがわからねえ：そもそも、子供の頃のあいつにあんな危険であいまいな情報、渡すヤツいるか普

通
?)

結局その部分は分からずじまいです。
相澤はムムムと思考に溺れていいくだけだった。

「でも…さつきのかつちやんの挙動を見るに考えたくはなかつたけど、なんらかのコンプレックスもしくはフォビア、精神的負荷による精神と身体弱体化、それによるアンバランス性症候群で引き起こされた…」

相澤の思考を乱して現実へと引き戻したのは、出久の癖だつた。

「緑谷、ストップだ」

「はっ！ す、すみません…つい……」

いきなりいつもの癖が出た出久を見て、フツヒどこか安心したように笑う相澤。

「お前は調子、戻つたみたいだな」

「…はい」

「じゃあ大丈夫だろ。だが問題は他にもあるな…」

「かつちやんと轟くん…ですね」

あの冷たい交互の色が違う眼光を思い出す

「ああ。予測でしかないが、爆豪がお前の隣を歩むのを止めた時期に、あいつらは出会つたんだろうな。」

彼の挙動を思い出す。

「きっとその時が一番爆豪が不安定だつた時期だ。あいつの弱いところ、強いところ、優しいところ…全部あいつは、轟は傍で見て感じたんだろうな」

「そつか…だから轟くんは、あんなことを…」

『俺はきっと、お前の知らない爆豪を知ってる』

睨むその眼光の中にたしかに感じた。嫉妬と、悲しみと、悲願を。

「先ずは…轟くんに謝らないといけないって思うんです。」

グツとこぶしを握り締めて出久は言う。

「僕はきっと、彼が大切に思う人を傷つけて、そして彼をも傷つけたと思うから…これから先何が起こるかわからないけど、僕は彼にも謝りたい」

それが僕の彼への精一杯の礼儀だと、出久は力強く言い放つた。そんな彼を見て相澤はフツと笑う。

「やつと俺が知る『お前ら』に戻つてきやがったな」

「へ？ それはいつたいどういう…」

「教えないね。答えが知りたければ」

もがいて、足搔いて、這いつくばつて、上り詰めて探してみせろ

その相澤の意地悪そうな声を聴いて、その場を静かに去つていく背中越しに大声で答えた。

「はい!!」

「ん…」
爆豪視点

「爆豪！」

目を開けると、真っ先に入ってきたのは赤と白。そして互いの片方の違う目の色。そしてよく見てみると理解した。どうやら俺は保健室に運び込まれたようだ

「んでてめーが、保健室にいんだよ」

「爆豪が…倒れたから、俺が、ここ…までつ」

「…そうか。倒れたんか俺」

「…」

「なに泣いてんだよ」

いつも涼しい顔してるヤツが、俺の横たわるベッドの脇に置いてある椅子に座りながら、子供のように泣く姿は昔のデクを思い出すな。

「すまねえ…でも…」

未だに乗り越えられてねえ、てめえの壁…トラウマを思い出しちまつたか？ ピクリと無意識にこいつの頭を撫でようとしてる俺の手が動いて、俺はそれにも戸惑つちまたが…必要はねえと感じて手をそのまま自分のデコへ乗っからせた。

「あーもういい。勝手に泣け」

「…すまねえ…」

しばらく轟の押し殺すような泣き声を聞きながら考えていた。

(思い出しちまつたな…あん時の事…)

ガキの頃に攫われたあの事件。センセーもいた。皆歯が立たなくって、あと少しつて一時にあいつ俺ごと自害しようとして。

目の前にがむしやらに走つてくる緑色が見えた時、心の中がザワついた：

前世でも同じような事が起きたつつーのに、なんでまた俺が攫われなきやいけなかつたんだ…しかもまだガキン頃だしょ…個性まだまだ上手く出ねえ時だつた。

(くつそ…)

デクが死んじまうんじやねーかと、心臓が痛いほど脈打つた。怖くなつた。怖くなつて、あいつのあの必死の顔とか見て、あの強い瞳を見て前世の記憶がフラツシユバツクしちまつた。

(今日は何もかもが上手くいかねーな…)

耐えられると思つてた。だが現実はそうはいかなくて。

「ごめん…爆豪」

「なんでてめーが謝ンだよ…」

「お前の…大切なヤツ、傷つけちまつた…」

「…」

真剣な顔で轟は俺を涙目で見つめてきた。つーか、こいつは何を言つて？

「でも後悔はしてねえ：おれ、俺は：お前が大切なんだ！」

「…は」

「え、なんだこの展開？　どういう事だ。つーかどういう意味：てか俺の両手をお前の両手で包むな放せ。」

「爆豪！　考え方…：緑谷の奴はお前の大切にするほどのヤツじゃねえ：あいつはお前を苦しめる元凶だろ？　そんなに苦しんで守らなくつたって…」

「…」

「こいつ…」

「俺は、俺は…お前が心配なんだ！　緑谷のために色々な事して…そして少しずつ壊れていくお前を見てらんねーんだ：頼むから、もう…」

「轟焦凍」

「!」

俺は真っ直ぐ轟の目を見つめた。二つの異なった色の瞳が不安に揺れている。

「それは無理な話だ」

「なんで…！」

まるで駄々っ子に言い聞かせるように、静かに轟へ言葉を紡ぐ。

「あいつは、俺のヒーローだから」

「?」

そう言つたときの轟の目を見開いた顔は正直珍しかつた。表情筋あんまし動かねー癪してこういう時は仕事するのなお前の顔。ヴィランと対峙するときは長所になるが。日常では短所になりうるな。

そう考えていると驚いたままの轟が、何かを聞きたそうに見つめている。しゃうねえな…少しだけ話してやつか。

「ずっと昔に、俺の中の本当の俺を、見つけて手を伸ばし続けて。引っ張った奴がいた。」「……」

最初はウザつたくてしかたがなくて。まるで俺が下であいつが上だと言わんばかりで。それがたまらなく嫌で。だから俺はあるつが俺より下つて事をわからすために色々やつた。

無理にでもそのホワホワした頭ン中に俺という名の恐怖を染みこませて、二度と歯向かわないように仕立てようとした。

けどそいつは、俺の予想を上回つて俺を助けちまつた。何度も何度も。ヴィランから。世間から。時には俺自身から…

「ガキの頃、あいつは俺の命を救つてくれたんだ」

「…」

轟は俺の話を静かに聞いていた。俺の言葉を一言も逃さないよう、ジッと大人しくそこに居て聞いていた。こいつ、聞き上手なんだなと、今更思った。

「で、今のあいつにはそん時の記憶はねー。だから余計に困惑してンだらうな……」
いつの間にか外は夕焼けで。そろそろ帰るかとベッドから起き上がるうとしたら、思いつきり勢いよく保健室のドアが開かれた。

「と、轟くんっ!!」

「み、緑谷…?!」

「ここまで走つてきたのか汗だくで、少し息が切れたままデクが入つてきて、轟の前に立つとそのままキレイに頭を垂れた。

「ごめんなさいっ!!」

「な、い、いきなりなんだ」

「君の大切な人…かつちやんを傷つけて…ごめんなさい!!」

「?!」

「こいつ、今までの話を聞いて？」

「君にとつてかつちやんが大切だつて気が付いたの、相澤先生と屋上で話してた時で…
その、本当にごめんなさい…赦す赦さないの問題じやなくつて、その、ぼ、僕が謝りた
かった、だけなんだけど…」

後半に行くにつれて、もじもじしながら声が小さくなつていく。こいつが不安な時の癖だ。まーだ直してなかつたんか。
とりあえず、こいつが話す内容を聞く限りは俺と轟の話は聞いてないみてーだ。だつたらしい。

(デクに知られたくねえ)

デクが俺の中でヒーローだつづ一事。

「…気づいたのか」

「うん：恥ずかしながら、やつと…」

「そうか…じゃあもう爆豪を虐めないんだな?」

「え?!」

「はあ?!」

素つ頓狂な声が出ちまつた。聞き捨てなんねーな。

「おいちよつと待てコラ半分ヤロウ：誰が誰を虐めてるつて?」

「緑谷が爆豪を?」

「虐めてないよ?!」

「虐められてなんかいねーよ!!」

「そうなの? 俺には緑谷が一方的に爆豪を虐めてたようにしか…」

「は、はあ?! てんめー、なにわけのわからねー事…」

そこで俺の言葉を遮った奴がデクだった。何で邪魔するんだと掴みかかつたが、なぜか簡単に払いのけられちまつた。

「君の目には、きっと僕が誰かを虐める悪いヤツに映つてたんだね…それも君の誰よりも大切な人が、君の嫌いな人に虐められて酷く傷つくような…そんなふうにかつちやんと僕をとらえて見えちゃつてたんだよね…」

その言葉に目を見開いたのは、轟だけじゃなく俺もだつた。そうだ。たしかこいつ、こいつの母親つて――：

「だから僕は、謝りに来たんだよ。君の中の傷に触れて、君を傷つけてしまつたことに…そして君が大切にしてくれているかつちやんを傷つけたことも含めて…」

もう一回デクは頭を深々と下げた。轟は最初こそ驚いていたが、少し困惑したような顔をして。自分の左側を手で覆つた。

「もういい。緑谷」

その瞳は悲し気に光つていて

「謝つてくれたんだ…俺はお前を赦すしかないだろ」

「でも…」

「いいんだ。ここからだろお前たちは。ここから先どう接していくかとか、そんな色々

…

デクは気が付いてねえけど、轟のヤツ：肩が震えてやがる。今度はこいつかよ…トランマつツーのは本当に厄介だな。

「たく、どいつもこいつも…」

だから、これはサービスだ

「ば、ばく、ごう？」

「かつちや…?!」

俺を担いで運んでくれたり。俺の話を、濁したが誰にも話してなかつた前世の記憶の話を聞いてくれた。これくれーは安いもんだろ。

「あんだ？ 頭撫でられるのは恥ずかしいンか？ やめてほしいンか？」

悪戯つ子のようにニヤニヤしながら聞けば意外な返事が返ってきた。

「……その、できれば…まいにち…」

もじもじしながら、毎日してくれたら、嬉しいとか言いやがつて。何言つてんだこい
つは？ 頭逝かれたんか？

「は？」

「ダメ!! か、かつちゃん独り占めはズルいよ轟くん！ かつちゃんもいつまで轟くんの頭撫でてるの?!」

「はあ？」

いきなり勢いよく突つかかってくるデクが、自分の頭を差し出しながら大声でいった
「僕のも撫でてください!!」

「死ね！」

「ギャブ！」

「み、みどりや…」

思わず手で爆破しちまつた。手加減はしたぜ？ つーかそもそもさつきの態度とち
げえし。なんなんだデクの野郎？ そんなことを考えていると、轟はデクのほうへ歩ん
でいつて、手を貸しながらデクを立ち上がらせていた。

「大丈夫か？」

「轟くん…ありがとう…」

「いや。これくれーは…俺は頭撫でてもらつたが、お前はもられてねーし…」

「同情されただけだつた?!」

まつたく。どうなるかと思ひきやこいつらは…どこまで俺を救えば気が済むんだ。

心が軽くなつた。凄く軽くなつた。まるで今までの重さがウソのように。

なんとなくこれから先、もつと自由に動けるような…そんな予感がした。

彼は知らない。

『爆豪！ 考え直せ：緑谷の奴はお前の大切にするほどのヤツじゃねえ：あいつはお前を苦しめる元凶だろ？ そんなに苦しんで守らなくつたって…』

相澤と緑谷が

『あいつは、俺のヒーローだから』

じつは彼らの会話を聞いてしまっていた事に。

そして少なからず、出久の事をそう言い張った勝己のその言葉に、いたく感動して廊下を何度も走ってしまった出久が数秒後に、部屋に突入していくのだった。

「ヒーロー…か」

相澤はそこをすでに離れて、特訓ルームへと足を進めていた。

「結局あいつら両想いつつー事…になるのか」

「二人ともお互いにお互いを身近なヒーローとして見ていたのだ。

「はあ…あんなの見たら気合入るだろうが」

特訓ルームについて、相澤は個性を発動させながらジャンプをした。首の周りの布を浮かばせながら目の前のロボや、特訓の相手をしてくれる教師を睨む。

「どいつもこいつも…世話が焼けるやつで問題児になりそうなヤツらばっかだ。」

しつかり監視して、正しい道へ導かねえと…そのためには教師おれたち側が少しでも強くなつてねーとダメだつづー事。

「なあ、そうだろ爆豪?」

その声に返事もなければ返答もない。あるのはその場に響く戦闘訓練用のロボと爆音と破壊音だけだった。

第11話 尖水辰と不穏な動き

勝己が倒れた。相当無理をしていたから、一生懸命あいつの面倒を見て、影ながら支えてきていたつもりだった。でも、本当につもりだつたみたいだ。

目の前で倒れたアイツを支えて助けたのは轟焦凍。そして勝己を癒したのは・出久。「なにも…できなかつた……」

とつさに出たのは、出久への言葉の棘。口から出る乱暴な言葉だけだつた。それ以外は・身体も足も。手でさえ動けなかつた。ヒーロー志望だというのに、なんて情けないんだろう。

身体が鈍りのように動かなかつた。あそこで動けた轟焦凍のほうがよっぽど強く成長しているじゃないか。

俺が見下していた轟焦凍のほうが、よっぽど強かつたじやないか……
「……アイツらの方が、頼りになつちまつたな」

一人一人が強く。強くなつていく。

人として。大人として。ヒーローとして。

遠くなつっていく背中。逞しくなつしていく精神。それがヒーローになると言う事。気

を抜けば置いて行かれる世界。何も得られず、成長できなければ：目指すものにならず、手さえ届かず遠ざかつて行つてしまふ。

そんな世界に、居ると言う事を再度認識せざるを得ない。

「クソッ！」

この、苛立ちは。この、疎外感は。この、悲しみは…
何もできなかつた自分への苛立ちで。

何も成長できることからの、焦りと、置いてかれることからの孤独感と、恐怖。
まるで過去に置いてかれているような気がして。一人にしないでくれ。そんなこと
言えるわけもなく。ましてや手を伸ばせるわけもなく。
自分に人を守る力などないのだと言われているようで。俺には人を傷つけるしかで
きないのでと指をさして言われているようで。

温かい場所が…クラスが、友の居る場所が、相応しくないと思えてしまつて。胸が…
痛くなつてくる。

「やつぱ…俺は…俺には……××××しか、ねえのかな…」

はじめて個性が現れた時の事を思う。

苦しむ親。

苦しむ友達。

怯える人々。

吐かれる暴言。

続けざまに起ころる、暴挙の数々。

はじめて向けられた、憎しみの目――…

はじめて一人になつて、孤独になつて……

それで――闇の中で出会つた、最悪の悪の親玉…

『君は、ヒーローというよりも』

嫌だ、嫌だ！俺は、俺は！！

『こつち側の人間ではないのかい？』

頭がズキズキと痛む。まるで、あの時の事を忘れるなど言うかのように。

「ふざけるな…俺は、まだやれる…」

震える声でそう言つたつて、誰の耳にも届いてやしないのに。

『君の個性、今の側だと大層苦労すると思うよ？なんてつたつて今の側は縛るのが好きだし、危険とみなせばすぐに排除しようとすると…君の周りの人間の態度がその結果さ！

ハハツ』

あいつの声が頭の中で木靈する。低く、木靈する。

甘い毒をまき散らしながら、俺を支配しようとする。頭に甘い痺れが一瞬感じたよう

な気がした。

『いずれ、君は君でいられなくなる。人は心があつて人なんだ。だから面白い。そうは思わないかい?』

あいつがこつちに伸ばしてくるその手は、俺は取らなかつた。払いのけてやつた。
『ふざけるな! 俺は絶対にヒーローになるんだ!』

『そうか…それは残念だ。』

でもね。と、そいつはクツクツ笑いながら言つた。

『限界が来たら、きっと君は考えを改めてくれるだろう。誰も君を信じなくなり、誰も君の存在を必要としなくなる。ただの邪魔者扱いされる時がきっとくる。その時は…』
ニヤリと、暗闇の中でもあいつが極悪に笑つた気配がはつきりわかつた。

『迎えにくるよ』

ああ…頭が痛い。痛くて痛くてたまらない。呼吸がままならない。冷や汗で前髪がおでこにくつつく。

最後の頼みのように。ワラにでもすがるように。俺は願いをポツリ呟いていた。

「なあ…お前ら…ヒーローなんだろ?」

俺を…救つてくれよ

「俺を導いてくれ…」

俺が何かをする前に。

俺が何かをやらかす前に。

俺の闇が俺を飲み込むその前に

俺の手が再び血で濡れるその前に……

H_ヒ
e_ー
r_ロ
o_ー

助けて。

保健室で、みんなが少しワイワイやっている。その様子をこつそりと見ていたのが尖水だつた。扉の前で何をすることもなく。ただただ、彼らの放たれる言葉を聞いていた。ドアに背をもたれさせ、そのまま立っているだけ。

心なしか、彼の顔が青白く、呼吸もままならない。

おもむろに、その伏せられていた瞼がゆっくりと上がっていく。クスリと、笑う気配がした。

その手はいつもの力強さはなく。震えている。

その瞳は、とてもとても悲し氣で。

「ホント、お前ら愛されてんだなあ」

クラスでも、もちろん家族内でも。

「……いいなあ…」

ポツリと零れた本音は、誰の耳に届くことなく。

「……んな感情、お前らに抱くなんて…」

その場に溢れて、そうして消えていく。

「自称兄として失格だな…」

流れしていく涙と共に、尖水はグシグシと乱暴に腕で目をこすり、涙をぬぐつた。彼の

悲しさを知る者はいない。

また、彼の苦しさも、知る者はいないのだ。

彼が抱える苦悩も、彼が言わない過去も、言えない過去も…
すべて闇が知る事。

自分の胸倉をギュッと握り締めながら、フラフラと彼はその場を後にした。

「そういやあ、尖水はどうした？」

勝己の発言によつて、そこに居た二人は顔を見合させた。そう言えば途中からいなく
なつていたなと出久が思い出して。

「先生と話しあつて、かつちやんたちの居る保健室へ来る間の廊下までは、後ろの方で何

か考え込んでたみたいだつたけど…」

「今までいた。けれど、いなくなつた。そう聞いた瞬間、誰にも気づかれなかつたが、勝己はドキリとしたのだつた。

「なンで、アイツの存在忘れとンだお前は」

「だ、だつて！ かつちゃん：と、轟くんに一刻も早く謝りたくつて…」
チツ。と勝己はいらだつ自分を抑えるようにため息を零す。

(まさか、もう始まつたつていうのか？)

勝己はとあることを知つていた。いや、知らされていた。

とある、未来が見える個性を持つヒーローに聞かされていた。

『いずれ、あの子は闇に飲まれるだろう。君でさえ気づけない、深い、深い闇にね』

尖水と一緒に、彼に無理やり会つた時の話だ。彼は眼鏡をクイと上げて、勝己のやつたユーモアあふれる一発ギャグに笑つたあとで、勝己の願いを聞いてくれることになつた。

心なしか尖水も肩を震わせ、「ブツ」と、必死に何かを耐えていたような気はするが。
勝己は一切気にならない。

尖水を外に待たせてくれと、彼は言つた。この時、勝己でさえ想定していなかつた出来事を、このヒーローから聞く事になろうとは。

君はとても興味深い。未来を見通す個性のヒーローに、そう言われたのを思い出す。

『まるで未来をワザと変えるために送られてきた異邦人のようだね。いや、私が知るコ
ミックの話さ。』

何でも彼は、未来で沢山のモノを失つたらしい。最後に自分の命が終わつた後、また自分として生まれた。だからその主人公は、今度は

『悲しい未来を、なかつたことにしよう』と動く。もちろん彼の行く所行くところ、凄まじい葛藤がおこる。十や二十じやない。万や億さ。まるで、運命の波が彼を飲み込もうとするかのように。運命が、彼を消そうとするかのように…』

そこまで言つて、彼は勝己をジツと見つめた。

『未来を変えるなんて、今まで見た事がなかつた。しかし実際に君はもう…』

彼には何が見えてしまつたのだろうか。静かに頭を振つてから、彼はそつと溜息を吐く。

『とにかく、尖水辰には十分に気を付けてくれ。それか、気にかけてくれ。彼には測り知れない闇がある。今はコントロール出来ていても、いずれアレは耐えきれなくなる時が来るだろう』

その時が来たら、君はどうするつもりだ？

(どうもしねえ。俺は俺のやりたいようにやる。)

グッと、勝己は己の拳を握り締めながら見つめた。あの時、答えたように、思いをもう一度拳に宿すように誓う。

(ぜつてえ、その闇から)

その瞳は強く輝いているようで、ギラギラと強く輝いていた。
(助け出してやつから)

だからその時は

待つてやがれ。尖水辰。

(今までの恩を二十倍にして返してやつから)

「覚悟しとけ」

その、勝己が零した言葉があまりにも力強く、しかし静かにその場に響くように呴いたので、出久が震えあがつた。

「ピヤツ?!」

「あ?」

たいして、勝己は己が先ほど、凄い気迫で呴いたことなど微塵も知らない。どうやら無意識に出てしまっていたようだ。出久は昔の勝己が降臨したのかとブルブルと震えている。それを見かねた焦凍が勝己の肩を叩いた。

「爆豪…」

「なんだ」

「…お前、さつきスゲエ気迫で呟いてたぜ」

「え」

「覚悟しとけって…」

「あ」

「そこであつちやーと、勝己が手をオデコへとあてがつた。

「あー…なんつーか、すまねえ。お前らの事じやねー」

「お前らじやない。そう言われて何を思つたのか焦凍がグイと身体を前のめりにしながら、勝己へと質問する。

「誰に何を覚悟しておけと言いたかつたのか、俺たちは知つちやまずいのか？」

真っ直ぐ見つめてくる焦凍の瞳を、静かに見守つてから、勝己は頷いた。

「ああ。悪いが今のでめーらじや、そいつの足元にも及ばねえ。知つてもただ損するだけだ。」

尖水辰。彼はきっと…この雄英の中でも指折り強い。それこそ本気を出せば…中からでも雄英生徒たちや教師さえ、危険に貶める事だってできる。ヒーロー側だからそれをやらぬだけで。

だから、中途半端な覚悟で詮索するなど、勝己は彼らの安全もかねて、忠告をする。し

かし頑固なのは、出久だけではなかつたらしい。

「だが、俺はお前のために何かしたい」

ますます強く、顔をしかめながら言う焦凍が、とても痛ましかつた。きつと過去を思
い出しているのだろう。子供の自分がなにもできなかつた、救えなかつた大切な存在。
母親の事を、焦凍はよく勝己と重ねてしまふ事が最近多くなつてきている。

ヤバイ。勝己はそう感じはじめていた。なぜなら、己に強く嫉妬をするものを知つて
いるからだ。そいつはただ今、勝己の隣で絶賛ぶるぶる震え中で。

かと思えば、バツと立ち上がりつつ、力強く言う。

「ぼ、僕だつて何かしたいよかつちやん！僕たちに出来る事なら、なんだつて！だから…
かつちやん、一人で背負わないので」

また倒れられたら…今度こそ僕死んじやう…と、出久が俯き加減で言えば、勝己がオ
デコをデコピンした。痛い…と言いながら涙目になる出久。

「今のお前らじや無理だつつてんだろ」

「だから教えねえーのか」

焦凍がそう言いながら詰め寄る。勝己はギロリと睨むように、強く言い返した。

「ああ。今のお前らじや、話す氣にもなれねえ。」

「…俺たちが…弱いからか」

「ああ」

「…ツそう、か」

焦凍は苦し気にそう言いながら、また、左側の顔を覆う。

そして立ち上がりつて、真っ直ぐに出久と勝己を交互に見た。

ギュッと拳を作りながら。

「じゃあ、体育祭で俺が緑谷に勝てば、お前は俺のものになつて、全部話してくれるんだな？」

「ハア?!?!」

いきなりの焦凍のトンデモな発言に二人して声がハモツた。なんだその、何を考えたらその答えになるのかまつづつたくわからぬ謎証言は。

「なんでそーなるんだ?!」

「極端すぎない?!」

勝己と出久が交互に言えば、きよとんとした顔の焦凍が首を傾げる。

「だつてそーいう事だろ？俺が誰よりも強いことを爆豪に見せれば、爆豪だつて隠して色々を安心してまかせられるだろ。」

だからといってどうして体育祭？なんで焦凍のものにならなければいけない？焦凍の謎な思考回路を解き明かせるやつは、残念ながらこの場には居ない。

「手っ取り早いのは、爆豪が俺のものになる事だ。悪い手じやねーぜ爆豪?」
「！」

勝己は焦凍のこの言葉に目を丸くした。あくまで焦凍は全てにおいて勝己のためを思つてやると言つてゐる。言い方や発想がやや斜め上を横切つていつそ宇宙までいつているようなぶつ飛んだ発想だが。

勝己を守ろうとしている事、勝己を大切に思つてゐると言う事が、痛いほどわかつた。勝己も出久も理解した。

だから、出久は

「譲れない」

「デク?!」

「僕だつて、そこは譲れないし、譲らない」

いつもの弱々しい光がなくなり、何をも変えるような鋭く純粹なまつすぐな瞳に、強い光が差す。

「かつちやんは」

ズイと焦凍の前に来て、背中に勝己を隠すように立ちふさがる。

「僕の幼馴染だ」

ギロリと強い眼光が焦凍を射貫く

「かっちゃんは、僕が守る」

だから君の役は必要ないよと、挑発などするものだから、焦凍の心に火が付いた
「へえ…言つてくれるじゃねーか」

焦凍も只寄らぬ雰囲気になる。睨み返し、静かに、しかしドスの効いた声で言う。
「幼馴染だからつていい気になつてんじやねーぞ。ぜつて一体体育祭でお前に勝つて、一
番になつて、爆豪をお前から引きはがしてやる」

焦凍は本気だ。本氣で出久に勝ち、出久から勝己を引きはがす気だ。ゴクリと生睡を
飲んだのは、一体だれか。

そんな緊迫状態の中、さらに焦凍を煽つたのが出久だつた。

「できるものならやつてみろよ。僕は絶対に負けない」

ゴゴゴという効果音が似合いそうな二人の睨み合いに、片隅で勝己はとйтうと、「どう
してこうなつたんだ?!?」と頭を抱えていた。